

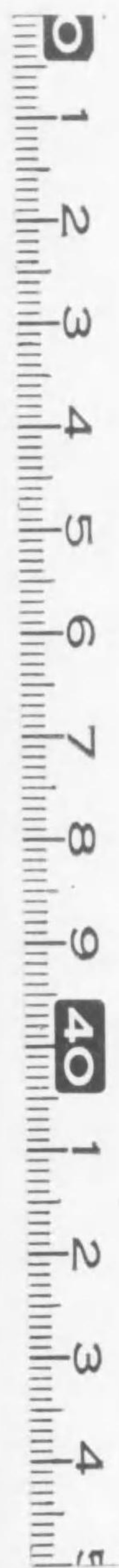
387-256



1200501457567

387

256



始



IT 3D 31



國譯禪學大成



第四卷

國譯禪學大成第四卷凡例

一、本大成第四卷に收載する所の書は、洞山悟本大師語錄一卷と永平道元禪師語錄一卷と義雲和尚語錄二卷と凡べて三部四卷なり。而して之等の書は何れも曹洞派下名宿の撰述にして、古來、同宗専用の書として盛んに流通せり。

一、以上三部の中、洞山悟本大師語錄は支那に於ける曹洞宗の始祖たる悟本大師の遺錄にして、我が徳川時代元文年間、宜黙玄契の編纂して開版したるものなり。此の外、洞山語錄には月坡道印の集録したる「洞山錄」及び指月慧印の校訂刊行したる「洞曹二師語錄」の二種あれども、今は専ら玄契本に據つて國譯し、校正に際しては指月本を以て稍々其の兩者の異同を詳かにせり。

一、永平道元禪師語錄は日本曹洞宗の鼻祖にして越前永平禪寺の開山たる承陽大師道元禪師の遺錄なり。而も本錄は我が室町時代の延文三年に既に開版せられたるも、近時之を得るに由なきを以て、今は寛文年間に刊行せし流通本に據つて國譯し、卷末の漢原

文も亦之に従へり。

一、義雲和尚語録は、道元禪師四世の法孫にして永平寺第五代の主たる義雲禪師一代の遺録なり。而して本書は南北朝の頃、既に一卷本として開版せられしも、舊刻殆ど世に存せず。故に徳川時代に入つて正徳年間、越の寶慶寺の僧龍堂が、其の遺篇を拾ひ輯めて一卷となし、之と共に鷹峯の正山道白が二巻本として刊行せり。今次、國譯するに際しては此の正徳本に據れり。

一、以上三部の書は、何れも皆洞派の古尊宿が暖皮肉とも謂ふべきものにして、洞上の宗風を知るには實に緊要の書なり。今此の國譯によつて一般に流布するを得ば、單に編者の幸ひのみに非ざるなり。

昭和四年三月

編者黃楊道人識す

國譯禪學大成 第四卷

目次

| | |
|--------------|------|
| 國譯洞山悟本大師語録解題 | 一一二 |
| 國譯洞山悟本大師語録序 | 一一六 |
| 國譯洞山悟本大師語録 | 一一七九 |
| 洞山悟本大師語録原文 | 一一三六 |
| 國譯永平道元禪師語録解題 | 一一二 |
| 國譯永平道元禪師語録序 | 一一二 |

國譯永平道元禪師語錄 一一四五

永平道元禪師語錄原文 一一二四

國譯義雲和尚語錄解題 一一二

國譯義雲和尚語錄序 一一四

國譯義雲和尚語錄 一一三六

義雲和尚語錄原文 一一五六

國譯洞山悟本大師語錄

解題

本書は具には「筠州洞山悟本大師語錄」と稱す。支那曹洞派の高祖たる洞山（今の江西省高安縣）の悟本大師が、發心の時より過水悟道の後、或は新豐山（今の江西省宜豐縣）に或は洞山に於て爲人度生し、一代六十三年間に於ける語要と歌頌及び行實等を蒐集したるものなり。而して其の文章は富贍、家風縝密にして、大師の詞藻と眞面目とを窺ふには唯一無二の書たり。我が國に於ては寛文の頃、月坡道印が諸書の中より大師の言句を抜萃し、輯めて「洞山錄」と題して刊行したるも、其の書たるや、編纂の方法、杜撰裁多きを以て弘く世に行はれざりき。是に於て紀州瑞龍寺の僧宜默玄契は大いに之を慨し、纂録惟れ懇めて其の異同を校訂し、元文四年、重ねて梓に附せり。其の後、寶曆年間に至り、指月慧印なるもの、更に訂正して複製したるものが盛んに世に行はるゝと雖も、今は専ら宜默の刊本に従ふ。

傳を按ずるに、大師、俗姓は俞氏、諱は良价、支那會稽（今の浙江省紹興縣）の人なり。唐の憲宗皇帝の元和二年（皇紀一四六七）に生る。幼にして出家し、五洩山（今の浙江省諸暨縣）の禮默禪師に師事す。二十一歳の時、嵩山に於て具足戒を受け、遊方して首め南泉普願に謁し、更に瀉山の靈祐に參す。次で瀉

正、觀心に粹なりと聞き、往いて法身自性の旨を問ふ。胤曰く、「此の旨幽玄なり、縦へ子が爲に之を説くも、恐らくは善を盡さざらん。且く去つて佛心宗に問へ」と。師乃ち衣を更へて建仁寺に至り、榮西禪師に參じて臨濟の旨を叩く。西、一見して深く之を器となす。榮西遷化の後、西の嗣明全禪師に師事し、相從ふこと九年、貞應二年、明全に従つて入宋し、居ること五年、天童山（今の浙江省鄞縣の東）の長翁如淨禪師に従つて曹洞の正脈を傳へ、安貞二年に歸朝し、京に入つて建仁寺に寓す。天福元年、弘誓院の正覺尼等、宇治に伽藍を創し、觀音導利院興聖寶林寺と名づけ、師を請じて開山第一祖たらしむ。師、是に於て禪堂を開いて叢規を立つ。是れ本朝、禪堂の濫觴なり。寛元二年、波多野出雲守義重、精藍を越前の志比に創し、吉祥山永平寺と號し、師を請じて開山始祖となす。師乃ち其の叢規を一に大童に則る。是に於て扶桑禪林の規範、師に至つて方に大成せり。寶治元年、副元帥平時頼、師を鎌倉に請じ、旦夕道を問ひ、遂に菩薩戒を受けて弟子の禮を執る。又、後嵯峨上皇、師の道譽を聞いて紫袍及び禪師號を賜ふ。師再三固辭すれども優詔許し給はず、己むを得ず、受けて遂に肩に被せず。建長五年夏、微恙を示す。秋八月駕に命じて洛に入り、同二十八日夜、沐浴して衣を整へ、筆を索めて偈を書して曰く、「五十四年、照二第一天。打箇箇字跳。觸破大千。嘆。渾身無著處。活。陷黃泉」と。筆を投じ、怡然として坐化す。壽五十四、法臘四十一。弟子懷英、僧海、詮慧等は皆膝下の神足にして法中の麟鳳なり。著す所の書、正法眼藏・永平清規・學道用心集・寶慶記・語錄等あつて世に行はる。明治十三年、明治天皇、謚を承陽大師と賜ふ。

國譯洞山悟本大師語錄 序

從上の 宗乘、物の爲めに言を垂る、一へに 塗毒鼓を搦つが如し。聞く者は皆喪す。絶後に乃ち重ねて甦り、無舌にして解語す。湖南の正脈、青石の濫觴、五傳して 新豊に迫り、一萬千里、百谷朝宗、法性の波瀾渺として、涯涘無し。矧んや夫の文章 富贖、家法縝密、高く寶鏡を懸け善く來機に赴く。入室の神足に非ざるよりは、阿誰か敢て鞭影を窺はん。門外の遊人 逡巡して退縮、歐峯奔逸、絶塵 荷玉、步趨踵を繼ぎ、以至二八の賢品轡を執つて馳す。 駸々乎として其れ壯なる哉。其の片言隻字、 崑壁南金、多く陳編に載すと雖も未だ全録有ることを見ず。 僉曰く、「祖庭の関典」と。同心浩歎せずといふこと莫し。宣猷 禪

①序。叙に同じく、緒に通ず、文體の一種、即ち「はしがき」なり。
 ②宗乘。宗は宗家と熟字して本家の意、邊磨門下の教法を指す、乘は運載の義にして、衆生を運載して佛地に至らしむるの意なり、今宗乘とは教家の大小乘に對して邊磨單傳の宗義をいふなり。
 ③塗毒鼓。毒藥を塗りたる太鼓のことにして、如來眞實の説法に喩ふ、蓋し毒鼓を打つて聲を發す、聞く者皆死するが如く、如來の説法又之を聞けば貪瞋痴等、悉く滅盡すとの意なり。
 ④無舌にして解語。無舌は言語文字の相を離れたるをいふ、理盡き言窮りたる佛祖の大道は、舌頭の能く及ぶ所に非ず、無舌にして始めて語ることを解すといふ意。
 ⑤湖南の正脈。湖南は慧能を指す、蓋し曹溪山は支那湖南省に在るが故なり、正脈は正しき法脈の意。
 ⑥青石の濫觴。青石は青原山行思禪師及び石頭山希遷禪師を指す、濫觴は起源の意。

人之れが爲めに慷慨^①、髮指す、纂錄^②惟れ懋^③め、采^④撫^⑤殆んど盡き、乃ち釐^⑥めて壹局^⑦と作す。昔者^⑧湛然^⑨澄禪師^⑩、得山林居士^⑪等、叢書^⑫を涉獵^⑬して、玄沙^⑭の語を鈔錄^⑮し、際天浴日^⑯の海鹹^⑰を一滴^⑱に味ひ、以て禪者^⑲の渴心^⑳を慰す。今や宜^㉑歎^㉒、其の故事^㉓に倣^㉔ふ者か。謂^㉕つべし勤めたりと。若し夫れ一家^㉖の雲仍^㉗、標^㉘に因^㉙つて月^㉚を見、意^㉛を得^㉜て言^㉝を忘^㉞じ、水の逆流^㉟、四海^㊱に瀾漫^㊲せん。其の沾丐^㊳を被^㊴る者、孰^㊵れか敢^㊶て隨喜^㊷せざらんや。因^㊸つて緒言^㊹を叙^㊺し、

①新豐山。洞山大師を指す、蓋し新豐山に住せしを以てなり。
②富贖。足り整ふて豊かなること。
③厭峰。雲居山道膺禪師を指す、雲居山は一名厭峰と稱するが故なり。
④荷玉。曹山本寂禪師を指す、蓋し初め荷玉山に住すればなり。
⑤駘々乎。馬の疾く進む貌。
⑥崑崙南金。崑崙は崑崙山の玉のこと、劉子新論に曰く、崑崙の下、玉を以て島を抵つとあり。南金は最も貴き黄金の意、昔支那の南方に産せしよりいふ。

⑦禪人。禪門に歸したる人の意、法師等に對していふ。
⑧慷慨髮指。慷慨は意氣感激して平ならざる貌、慨は憂悼、心に在る貌、髮指は怒髮衝冠の意。
⑨壹局。局は卷に同じ、古書多く局の字を用ふ。
⑩湛然澄禪師。諱は圓澄、湛然は其の號なり、支那會稽の人。
⑪得山林居士。支那閩中の人。
⑫涉獵。水を涉り獸を獵る意よりいふ。書言故事に「博覽を涉獵といふ」とあり。
⑬玄沙の語を鈔錄。玄沙宗一禪師語錄三卷是れなり、玄沙廣錄に洩れたるを蒐めたるものにして、卷頭に湛然澄の序、

得山の緣起、玄沙の小傳を載せ、上堂、拈香、垂語等を收む。
⑭雲仍。遠孫又は雲孫といふに同じ。釋名に「雲孫は己を去ること遠くして、浮雲の如くなるをいふ」とあり。
⑮瀾漫。水の滿ちみなざるをいふ。
⑯沾丐。沾は露に通ず、うるほふこと、丐は乞丐の意。
⑰弁。冠に同じ。
⑱元文の戊午。元文戊午は櫻町帝元文三年に當る、西紀一七三八年なり。
⑲稽首。拜して首の地に至るをいふ、額を地につけて拜なすことにて、最も丁寧に拜するをいふ。

其の卷端に 弁らしむ。
元文の戊午百餘吉旦

住林泉沙門元趾 稽首拜題

國譯洞山悟本大師語要 自序

吾が 大雄氏の心印に於ける、淵々浩々、戲大なるかな。在昔此の教や、機を 靈山に發して 少林に達り、燈々明を繼ぎ、奕葉纒綆し、以て我に及ぶ。然れども年世寢た遠し、其の勢や同異無きこと能はざるのみ。最も其の昭々たる、靈山に若くは莫し。少林以還は曹溪に若くは莫し。曹溪の一脈流れて 兩派と爲る。涇流の大き 沛然として其の波瀾狂す。此の時の方つて障へて之を東せしむる者は、是れ乃ち 濟上洞上の二家に出づ。二家各々其の存する所の者有り、師々たる幾語相與に 嚶其、誨を千載の下に垂る。然りと雖も其の語 縝密に、其の機高尙なり。之を 郢中の歌に譬ふ、其の曲彌々高うして其の聲彌々奇なり。所謂國中屬して和するもの數人に過ぎざるのみ。所以に洞山語録の如き、其の傳絶ゆ。其の語存すと雖も春池に浮沈し礫と相混す。其の故は何ぞや。

① 靈葉。集詞と殆んど同意、宜默以前已に洞山の語要の集録なきには非ず、但だ傳はらざりしのみ、故に今は重集といふなり、蓋し又自ら謙するの意をも寓するもの歟。
 ② 大雄氏。釋尊をいふ。
 ③ 靈山。靈鷲山のこと、中印度摩揭陀國王舍城の東北に雙嶺、釋尊說法の處として名あり。
 ④ 少林。少林寺のこと、支那河南省嵩山にあり、達磨面壁の處として名あり。
 ⑤ 奕葉纒綆。奕葉は重りたる葉のことにして、累世の意、縝密は冠の垂れ紐のことにて、傳來といふ程の意。
 ⑥ 曹溪。支那廣東省韶州府の東南三十里にあり、六祖慧能を

杜撰の輩、妄りに凡情を以て古語を 改易すればなり。最も其の甚だしきものは、**「觀察使」**の語の如き皆改易す。**「渠れ今正に是れ我れ、我れ今是れ渠れにあらず」**の語の如きは、「正に是れ」を更へ、「是れにあらず」と作すもの有り。或は「是れにあらず」を改め、「正に是れ」と作すもの有り。是を以て其の脈斷絶せざることを能はざるものか。又「也た前朝斷舌の才に勝れり」の句の如き、「前」を易へ「知」に作すとさんば、其の義了せざるものか。是を以て居士無盡と雖も、未だ嘗て本據を解せざるの間無くんばあらず。大凡そ此れに類す。予以爲らく、「今の世に居て古の道に志す、孟浪猶は然り、況んや 後昆をや」と。是に於て古本を温尋し、竊々乎として同異を 校讎し纂集成んぬ。人或は予に

以て名高し
 ① 兩派。曹原行思、南嶽懷讓を指す。
 ② 沛然。大なる貌。
 ③ 濟上洞上。臨濟、曹洞のこと。
 ④ 嚶其。其は助語辭、嚶は鳴と同意。
 ⑤ 縝密。つゝしみぶかく綿密なること。
 ⑥ 機。機用とつゞく、はたらきといふこと。
 ⑦ 郢。楚の都。
 ⑧ 杜撰。妄語にして格に合はざる撰述をいふ、轉じて粗瀆の意に用ふ。
 ⑨ 改易。あらためかふるること。
 ⑩ 觀察使。本文に「師、密師伯と百顏の哲禪師の處に到る。顏曰く、觀察使姓は甚摩ぞ云」とあるを指す。
 ⑪ 渠今正是我。我今不是渠、これ洞山過水悟道の偈の句。
 ⑫ 也勝前朝斷舌才。正偏五位頌正中來の句。
 ⑬ 孟浪。とりとめなし、くばしからず、おろそかななどの意。
 ⑭ 後昆。昆も後の意、後世の子孫といふこと。
 ⑮ 竊々乎。明かに見ぬく貌。
 ⑯ 校讎。かんがへしらぶること、誤りを見出すこと、疑を搜すが如くするよりこの語あり。
 ⑰ 本文の註に就いて見るべし。
 ⑱ 唯。應答の語、俗に「はい」といふこと。
 ⑲ 芒乎。まどひくらむ貌。
 ⑳ 不。非の意。
 ㉑ 國修。とものひ修むること。
 ㉒ 區々。小さき貌。
 ㉓ 仲春。陰曆二月。
 ㉔ 精舍。梵語毗訶羅の譯、精練なる佛法の修行者の居る處といふ義にして、寺院のこと。

謂つて曰く、「諸佛の言教生冤家に似て始めて參學の分有り。此れは是れ洞山大師の語にあらすや。」
曰く、「唯、然り之れ有り。」曰く、「奚爲れぞ非なるや。」予曰く、「將に謂へり、祖佛無しと、況んや
言教をや。」或人子が言を聞き、芒乎として答ふる無し。予曰く、「已みなん已みなん。苟くも、不なる
もの有らば、此の語の編修に於ける、今や區々として其れ再びすべけんや」と。

是れ歲戊午 仲春十五日、

日本國沙門玄契、歌浦瑞龍 精舎に涉筆す。

國譯洞山悟本禪師語錄

參學 沙門 玄契 編次

師、^①雲巖の眞を供養する次、僧問ふ、「先
師道く、祇這れ是れと、便ち是なることなしや否
や。」師曰く、「是。」云く、「意旨如何。」師曰く、「當
時は幾ど錯つて先師の意を會す。」云く、「未審し
先師還つて有ることを知るや也た無や。」師曰
く、「若し有ることを知らずんば、爭か、恁麼に
道ふことを解せん。若し有ることを知らば肯て
恁麼に道はん。」^②長慶云く、「既に有ることを
知る、甚麼としてか恁麼に道ふ。」又云く、「子を
養ふて方に父の慈を知る。」^③

國譯洞山悟本禪師語錄

①洞山。支那江西省豫章筠州高安に在り。此の山に普利院あり、雲巖の副真价此に住し、大いに化門を張る。曹洞の宗名實に此の山に由つて起る。

②禪師。禪師とは禪門高德の尊稱なり、善住意天子所問經には「一切法に於て不取不生と認知し得る者は、禪師と稱して可なり」と説けり。

③悟本。良价の謚號なり。良价、俗姓は俞氏、支那會稽の人、唐の憲宗皇帝元和二年（西曆八〇七年）に生る、出家、遊方等のことは本録行由編に詳かなり、大中の末、新豐山に住し、後洞山に遷る。門下常に數百人、唐の懿宗皇帝咸通十年示寂す。

④參學。參禪學道の略。

雲巖の諱日、師、齋を營む。僧問ふ、「和尙、雲巖の處に於て何の指示をか得たる。師曰く、「彼の中にありと雖も、指示を蒙らず。云く、「既に指示を蒙らず、又齋を設くることを用ひて甚麼か作ん。師曰く、「争か敢て他に違背せん。云く、「和尙初めて南泉に見ゆ、甚麼としてか卻つて雲巖の爲に齋を設くるや。師曰く、「我先師の道徳を重んぜず、亦佛法の爲にせず、祇他の我が爲に説破せざることを重んず。僧云く、「和尙、先師の爲に齋を設く、還つて先師を肯ふや也たいなや。師曰く、「半は肯ひ半は肯はず。云く、「甚麼としてか全く肯はざる。師曰く、「若し全く肯はす即ち先師に孤負せん。問ふ、「和尙、本來の師を見んと欲す、如何が見ることを得ん。師曰く、「年牙相似たり、即ち

沙門。沙門は梵語。動息、止心、止息、出家人等と譯す、出家して佛道を修するもの、總稱なり。
 玄契。諱は宜默、紀州和歌山林泉寺の僧。
 編次。編次とは「あみついでる」とにて、編纂、編輯と略る。同意なり。
 雲巖の眞。雲巖は曇成禪師のこと、師師は百丈惠海に従つて參究すること二十年なりしも因縁契はず、去つて藥山惟儼に至り、之に投じて大事を了得し、嗣法す、洞山大師は此の門下に出づ、眞は御影なり。
 先師。雲巖を指す。
 愆。宋代の俗語にして「斯の如し」の意なり。
 長慶。長慶の慧積、雪峰義存の嗣。
 諱。忌なり、諱日とは俗に云

ふ命日のこと、今雲巖の諱日は十月二十七日なり。
 齋。佛事の時の供養の食事をいふ。元來は齋素と熟し、三業をつしむことにして、従つて時にあらざる時に食せざるをいふ。
 和尙。梵語に烏波陀耶といひ、親教師、力生等と譯す、もと阿闍梨と共に授戒の師たるもの、名稱なりしが、中古以來單に高僧の尊稱に用ひ、曹洞宗にては轉衣以上の者を呼ぶ尊稱に用ひらる。
 南泉。南泉普願、馬祖道一の嗣。
 孤負。又は辜負に作る、そむくこと。前漢書李陵傳に曰く、「陵、恩に孤くと雖も漢も亦義に負く」と。
 本來の師。本來の面目。
 年牙。牙は猶ほ齒の如し、齒なり。

阻なし。僧進語せんと擬す、師曰く、「前蹤を躡まず、別に一間を請ふ。僧無對。雲居代つて云く、「恁麼なるときは則ち和尙本來の師を見ず。僧、長慶に問ふ、「如何なるか是れ年牙相似たる者ぞ。慶云く、「古人は恁麼に道ふ、闍梨又這裏に向つて箇の甚麼をか覓む。上堂に曰く、「還つて四恩三有に報せざる者ありや。衆無對。又曰く、「若し此の意を體せずんば何ぞ始終の患を超えん。直に須らく心々物に觸れず歩々處所なく、常に間斷なくして始めて相應することを得べし。直に須らく努力すべし。閉に日を過すことなかれ。僧問ふ、「寒暑到來、如何が回避せん。師曰く、「何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。云く、「如何なるか是れ無寒暑の處。師曰く、「寒の時は闍梨を寒殺

前蹤。古人の足跡。
 躡。ふむと訓す、踐、踏も同じく、ふむなれども、其の間自ら別意あり、就中語は先へ行く人の「アト」を「フム」と、人の衣の裾をふみ、軍を追撃する時などに用ふる字なり。
 雲居。雲居道膺、洞山の嗣。
 代語。代語に二種あり、第一に師家自ら垂語して大衆の答話を待つに、大衆無對なる時に、自ら大衆に代つて語を下す場合、第二、古則公案を舉して、古人無語の所に至つて自ら代つて語を下す場合、今は後の意なり。
 闍梨。梵語、軌範師と譯す、僧の尊稱なり。
 四恩。心地觀經には「一に父母の恩、二に國王の恩、三に衆生の恩、四に三寶の恩」と云へり、正法念經には「一に

母、二に父、三に如來大師、四に説法の師」を擧げ、若しこの四種の人に供養すれば無量の福を得て、未來は佛道を得と説けり。
 三有。婆娑論に曰く、「一は欲有、二は色有、三は無色有なり。問ふ、「有とは何の義ぞ。云く、「一切有漏の法是れなり。佛の言く、「若し樂、能く後生をして相續せしめば是れ有なり」と。
 閉。「ひま」、或は「しづか」と訓す、閑の意なり。
 闍梨。前注を見よ。
 寒殺熱殺。寒時は寒になりきり、熱時は熱になりきつて寒熱の念を生ぜざるをいふ。
 祖教佛敎。祖敎とは祖師の敎なり、その祖師とは一宗一派の闍梨、又は一宗一派の系統に列し、世代に數へらるる人を云ふ、禪門にては達磨を特

し、熱の時は闇梨を熱殺す。」

上堂に曰く、「祖教佛教は生冤家に似て始めて參學の分あらん、若し祖佛を透り得ずんば、即ち祖佛に謾じ去られん。」

上堂に曰く、「主人公を坐斷して第二見に落ちざれ。」北院、衆を出でて云く、「須らく知るべし、一人あつて伴に合せざることを。」師曰く、「猶は是れ第二見。」院便ち禪牀を掀倒す、師曰く、「老兄、作麼生。」院云く、「某甲舌頭の爛るを待つて即ち和尚に向つて道はん。」

早參、疎山の仁出でて問ふ、「未だ是れあらざるの言、請ふ、師、示誨せよ。」師曰く、「諾せざれば人の肯ふなし。」疎云く、「還つて切にすべけんや也た無や。」師曰く、「爾、即今還つて切にし得てんや。」疎云く、「切にし得ずんば、即ち諱む處なし。」

上堂に曰く、「此の事を知らんと欲せば、直に須らく花を生ずるが如くにして、方に他と合すべし。」疎山問ふ、「一切處に乖かざる時如何。」師曰く、「闇梨此れは是れ功勳邊の事、幸に無功の功あり、子何ぞ問はざる。」云く、「無功の功豈に是れ、那邊の人にあらざらんや。」師曰く、「大いに人有つて子が、恁麼の問を笑はん。」云く、「恁麼ならば則ち超然にし去らんや。」師曰く、「超然、非超然、非不超然。」云く、「如何なるか是れ超然。」師曰く、「喚んで那邊の人となすことは即ち得ず。」云く、「如何なるか是れ非超然。」師曰く、「辨處なし。」

夜參、燈を點せず、僧あり、出でて問話す。退いて後、師、侍者をして燈を點せしめ、乃

稱することもあり、佛敎とは如來の敎のことにして、華嚴より涅槃に至る四十九年の横説縱説これなり。

⑦ 生冤家。冤は「あだ」と讀む、冤敵の義、生は熱の反對にて新の義、新しき譬敵、例へば父母の譬敵の如きをいふ。

⑧ 參學。參禪學道の略なること前註の如し。

⑨ 謾。謾は「あざむく」、又は「あなどる」と訓ず、今は欺謾の意なり。

⑩ 坐斷。坐破或は斷破と云ふも同じ。

⑪ 第二見。第二義門と云ふも同じ、向上の第一義に非ざる第二第三に下落するをいふ。

⑫ 北院。益州北院通禪師、洞山の嗣。

⑬ 禪牀。僧堂内に於ける坐禪する場所、住持人なれば椅子、雲衲なれば單位なり。

⑭ 掀倒。掀は「あぐ」「かゞぐ」と訓じ、倒は「たふす」と訓じ、掀倒は掀翻と殆ど同意なり。

⑮ 作麼生。生は助辭、作麼は「何」と同じ。支那の俗語にして不審、疑問の語、「いかん」、「いかに」等の意に用ひらる。

⑯ 某甲。自己の稱。

⑰ 早參。朝參とも云ふ、晩參に對す。病後に於て住持人、大衆を集めて院堂説法するを云ふ。

⑱ 疎山の仁。撫州疎山の光仁、洞山の嗣、身相短陋なりし、時に矮師叔と稱すと。

⑲ 示誨。誨は「しふ」と訓ず。切、切は追、急、憤、説等の意あり。

⑳ 即今。只今の意。

㉑ 諱。諱は忌なり。

㉒ 此の事。此の一大事の略。佛祖の大道を云ひ表す換へ言葉。

㉓ 疎山。疎山の光仁なり。

① 功勳邊。兒童邊とも云ひ、本分に對する言葉なり、「てがら」「いさをし」と訓じ、修行の結果の方面を云ふ、此の邊の事を論ずるに有名な洞山の五位あり。一に向、二に奉、三に功、四に共功、五に功功なり。本録卷尾その義を詳かにするが故に今は略す、但し今こゝに功と云ひ、無功と云ふが如きは、必ずしもこの五位に配するに及ばず。

② 那邊。這邊に對す、那箇に同じく彼方と云ふこと、又何處の義にも用ふることもあり。

③ 前註を見よ。

④ 超然。其の物事の範圍外に、え出る貌。

⑤ 夜參。晩參に同じ、晩間に於ける小參を云ふ、教修清規の晩參に、凡そ衆を集めて開示するを皆參と云ふ。古人の徒を一匡するに、之をして朝夕

に否扣せしめ、時として此の道を激揚せざるなし、故に每晚必ず參すること曠時に在り」と。

⑥ 侍者。師長の左右に常侍して、給仕輔佐する役の名、之に五種あり、五侍者といふ。

⑦ 適來。さき程といふ意。

⑧ 三兩の粉。粉は細末、面に傳くる者なり。古、面に傳くるに米粉を以てし、又之を染めて紅粉となし、或は采を設けて潤色せり、兩は量目凡そ四匁なり。

⑨ 這箇。這は此と同意にして、這箇は「これ」、「これら」等の意に用ひらる。

⑩ 上座。長老ともいひ、上座の義にして沙門中の老宿を尊稱せる名なり、現今曹洞宗にて出家得度の後、入衆したるものを呼ぶに上座の名を以てするは、自ら原の義と異なるな

ち召す。①適來問話の僧出で來れ。②其の僧近前す、師曰く、「三兩の粉を將取し來り、③這箇の上座に與へよ。」其の僧拂袖して退く。此れより省發し、遂に衣資を罄捨し、齋を設け、三年を得て後辭す。師曰く、「善く爲せ。」時に雪峯侍立す、問うて云く、「祇這の僧の辭し去るが如きは、幾時か卻來するや。」師云く、「他は祇一去を知つて再來を解せず。」其の僧、堂に歸り、衣鉢下に就いて坐化す。雪峯上つて師に報す、師曰く、「然も此くの如くなりとも雖も、猶ほ老僧が三生に較ること有り。」

上堂に曰く、「一人有り、千人萬人の中に在つて、一人に背かず、一人に向はず。備道へ、此の人何の面目をか具す。」雲居出でて云く、「某甲參望し去らん。」

師、衆に示して曰く、「佛向上の事を體得せば、方に些子語話の分あり。」僧即ち問ふ、「如何なるか是れ語話。」師曰く、「語話の時、閑梨聞かず。云く、「和尚還つて聞くや否や。」師曰く、「我が語話せざる時を待つて即ち聞かん。」僧問ふ、「如何なるか是れ正問正答。」師曰く、「口裏より道はず。云く、「若し入あつて問はず、師還つて答へんや否や。」師曰く、「也た未

- ①知るべし。
- ②省發。省悟、見性等と同意。
- ③衣資。衣服の資料の意にて、僧家金銀のことを云ふ。
- ④罄捨。殘らず捨てしまふこと。
- ⑤雪峯。福州雪峰山義存禪師のこと、明州德山宣鑑に嗣ぐ、三到授于九至洞山を以て名あり、古來其の名、僧俗の間に高く、千五百人の大善知識と稱せらる。
- ⑥衣鉢下。僧堂内に於ける各自の單位をいふ、各單の上には衣鉢を安置するが故に、斯く云ふなり。
- ⑦坐化。坐定しながら遷化せしをいふ。
- ⑧三生に較る。三度程生れ代り來つて、漸く洞山程の位に至るであらうといふこと。
- ⑨雲居。道場のこと。
- ⑩參堂。堂は僧堂なり、僧に堂

だ曾て問はず。問ふ、「如何なるか是れ門より入る者は實にあらざる。」師曰く、「便ち好し、休するに。」問ふ、「和尚出世幾人が肯ふ。」師曰く、「竝に一人の肯ふなし。」云く、「甚麼と爲てか竝に一人の肯ふ無きや。」師曰く、「箇々の氣宇、王の如くなるが爲なり。」

上堂に曰く、「道は無心にして人に合し、人は無心にして道に合す、箇中の意を識らんと欲せば一老一不老。」(後僧、曹山に問ふ、「如何なるか是れ一老。」山云く、「扶持せず。」云く、「如何なるか是れ一不老。」山云く、「枯木。」僧又逍遙の忠に舉似す。忠云く、「三從六義。」又曰く、「此の事直に妙會すべし、事は其の妙にあり、體は妙處にあり。」

解夏上堂に曰く、「秋初夏末、兄弟、或は

- ①歸るを云ふ、歸堂に同じ。
- ②佛向上の事。佛陀は五十二位の最上なり、されど此れに住著すれば猶ほ病たるを免れず、故に更に向上の境界に至るべきをいふ。
- ③體得。體達、體解、體悉等に同じ。
- ④些子。些子は些少と同意にて「少し」或は「多少」の意。
- ⑤語話分。分は分際の際、語話すること出来る分際の際、現今の俗語に「話をするだけの資格」と云ふに同じ。
- ⑥氣宇。人の度量、まぐらる。那維に曰く、「密池氣宇曠」と、又字は性なりとも云ふ、然れば氣質と同じく、「こころだて」なり。
- ⑦無心。有心に對す、求むる所なく、得る所なき心の意にて、善惡是非の爲めに動ぜざる心を云ふ。
- ⑧箇中の意。此の間の消息と云はんが如し。
- ⑨曹山。本寂禪師、洞山の法嗣、曹山録の著者なり。
- ⑩扶持。たすけもつこと、孟子に曰く、「疾病相扶持。」論語季氏篇に曰く、「危くして持たず、顔じて扶けず。」
- ⑪逍遙の忠。江西趙遙山の懐忠禪師、溈州夾山善會の法師。
- ⑫舉似。似は示に同じ、舉げ示すこと。
- ⑬三從六義。一より三を生じ、三轉して六となるの義にして、一とは無明、三とは貪、瞋、癡、六とは六識なり。
- ⑭解夏上堂。解夏とは夏安居の制を解くの際、故に解制とも云ふ、結制を解く意なり。解夏の上堂は七月十五日早天に行はる、乃ち堂頭陞座し、結制の無事終了せるを告知すると共に、大衆一同に謝辭し、

東、或は西、直に須らく、萬里無寸草の處に向つて去るべし。」良久して曰く、「祇萬里無寸草の處の如きは、作廢生か去らん。」左右を顧視して曰く、「此の事を知らんと欲せば、直に須らく枯木、花開くが如くにして方に他と合すべし。」僧あり、石霜に到る。霜問ふ、「和尚何の言句あつてか徒に示す。」僧、前話を擧す、霜云く、「人の下語するありや否や。」云く、「無。」霜云く、「何ぞ門を出づれば便ち是れ草と道はざる。」僧回つて師に舉似す。師曰く、「此れは是れ一千五百人の善知識の語なり。」(別して云く、「大唐國內能く幾人か有る。」)

上堂に曰く、「向の時作廢生。奉の時作廢生。功の時作廢生。其功の時作廢生。功の時作廢生。」僧問ふ、「如何なるか是れ向。」

次に大衆一同、堂頭に向つて謝辭し、以て式を擧るを例とす。

① 萬里無寸草。萬里の間に草一本もなきこと、相對差別の相混じたる平等一如の境に喩ふ、故に東西南北にあらず、春夏秋冬にも隨せざるなり。

② 良久。稍々暫くの間無言なるをいふ。

③ 石霜。慶諸禪師、道善宗智の別。

④ 前話。萬里無寸草の語。

⑤ 下語。古則、公案又は頌古、垂示等の法語に對して、自己の見解を呈露するため下す語を云ふ。

⑥ 善知識。智徳衆に優れて能く人を教ふるの力ある人を云ふ。涅槃經に、「善知識とは法の如くに説き、法の如くに行じ、乃至正見を行じ人をして正見を行ぜしむ。若し能く是

の如くならば則ち名けて眞の善知識となす」と説けり。

⑦ 別語。他の問答爾量して答へたるものに對して、又別に自己の見識を以て答を付するをいふ。

⑧ 此の上堂に於て所謂功勳五位の頌を示されたるなりと云ひて、一本には向、奉、功、第一の作廢生の下に各其の頌を配記せり、此れ或は是ならん。

⑨ 向。功勳五位の第一位にして、人に本具の主人公あることを信じて、之に歸向する位を云ふ。

⑩ 奉。功勳五位の第二位にして、已に人々本具の主人公あることを知り、純一に其の命令に奉順するを云ふ。

⑪ 功。功勳五位の第三位にして、奉順の功に依りて人々始めて主人公に相見し、一切の妄見を透脱せる位なり。

師曰く、「喫飯の時作廢生。」云く、「如何なるか是れ奉。」師曰く、「背の時作廢生。」云く、「如何なるか是れ功。」師曰く、「鐘頭を放下する時作廢生。」云く、「如何なるか是れ共功。」師曰く、「色を得ず。」云く、「如何なるか是れ功功。」師曰く、「不共。」又曰く、「混然として諱む處なし、此の外更に何を求めん。」師、衆に謂つて曰く、「心に擬するは是れ犯戒、味を得るは是れ破齋。」(曹山曰く、「如今の人は佛味祖味の如き盡く滯著を爲す。」)又曰く、「心に擬するは蚤く差ふ、泥んや復た言あるをや。」

衆に示して曰く、「佛向上の人、有ることを知らば方に語話の分あり。」時に僧有り、問ふ、「如何なるか是れ佛向上の人。」師曰く、「非佛。」(保福別して云く、「佛非。」)雲門云く、「名不得狀不得、所以に非と言ふ。」法眼別して云く、「方便に呼んで佛と爲す。」又曰く、「塵中不染の丈夫兒。」雲門云く、「拄杖は但だ喚んで拄杖と作し、一切は但だ喚んで一切と作す。」問ふ、「如何なるか是れ。」玄中の又玄。師曰く、「死人の舌の如し。」問ふ、「如何なるか是れ。」毘盧の師、法身の主。師曰く、「禾莖粟幹。」問ふ、「三身の中、阿那身か。」衆數に墮せざる。」師曰く、「吾れ常に此に於て切な

① 共功。功勳五位の第四位にして、本然の自性を徹見して後正位を守らず、自由の活動をなすと雖も、尙ほ未だ功位に誇るの念を脱する能はざるを云ふ。

② 功功。功勳五位の第五位にして、功の極所を透脱して功不功を見ず、自ら無功用の境に至るを云ふ。

③ 鐘頭。大猷なり、頭は助字。

④ 擬。「はいる」と訓す、思量分別するを云ふ。

⑤ 破齋。非時食をいふ。

⑥ 佛向上の人。佛向上の事を會得したる人。

⑦ 保福。從展禪師、雪峰義存の法嗣。

⑧ 雲門。文偃禪師、雲門宗の祖、雪峰義存の嗣。

⑨ 法眼。文益禪師、法眼宗の祖、地藏桂琛に法を嗣ぐ。

⑩ 塵。塵とは六塵の、色聲香

り。「僧、曹山に問ふ、「先師道ふ、吾れ常に此に於て切なりと、意作廢生。」山云く、「頭を要せば便ち斫り去れ。」又雪峯に問ふ、峯、拄杖を以て劈口に打つて云く、「我れも亦曾て洞山に到り來る。」

師、鉢を洗ふ次、兩鳥、蝦蟇を争ふを見る。僧あり、便ち問ふ、「這箇は甚麼に因つてか恁麼地に到る。」師曰く、「祇園黎が爲なり。」

會下に老宿有り、雲巖に去つて回る。師、問ふ、「汝雲巖に去つて作麼生。」宿云く、「不會。」師代つて曰く、「堆堆地。」又、老宿袈裟角を拈じて問うて云く、「父母未生の時還つて這箇有りや。」師曰く、「只だ今豈に是れ有らんや。」宿、手を搖す。

師、因に稻田を見る次、朗上座牛を牽く。師

曰く、「這箇の牛、須らく好く看るべし、恐らくは稻を喫し去らん。」明云く、「若し是れ好牛ならば稻を喫せざるべし。」

師、維摩經を講する僧に問うて曰く、「智を以ても知るべからず、識を以ても識るべからず、喚んで甚麼の語と作す。」云く、「法身を讚するの語。」師曰く、「喚んで法身と作す、早く是れ讚せるなり。」

衆に示して云く、「一大藏教は只だ是れ箇の字。」

垂語して曰く、「直に本來無一物と道ふも、猶未だ他の鉢袋子を消得せず。」僧即ち問ふ、「時時に勤めて拂拭せよといふ、甚麼と爲てか他の衣鉢を得ざる。」未審し甚麼人か得べき。」師曰く、「門に入らざる者。」云く、「只だ門に入ら

味嚼法の六境は、吾人の心を染汚するを以て塵といふ。拄杖。僧の携ふる杖のこと、禪僧之を携ふるは行脚の時危に乘じ、險を涉るに力を扶くるが爲めなり。

① 玄中の又玄。これ臨濟義玄創する所の三玄の一玄中玄を指すか。蓋し玄中玄とは四句百非を離れたる妙玄無盡なるを云ふ。

② 毘盧師、法身主。毗盧は毗盧遮那の略、法身佛の意なり。法身とは眞如の理體にして如來自證の妙理なり、今毘盧の師、法身主とは最極至上の地位にして大尊貴生なるをいふ。

③ 承華粟幹。事々物々皆法身なりとの意にて、明々たる百草頭、明々たる祖師意と同意なり。

④ 三身。三種の佛身の意にて法

身、報身、應身のこと、法身は前註の如し、報身は眞如の理を證悟する所の相好圓滿の色身、應身とは衆生の根機に應じて種々の身を現じて教化を施す化身をいふ。

⑤ 阿那身。阿は動字、那は何と同意。

⑥ 不離衆數。淨名經弟子品阿難章、「佛身無爲諸數に隨せず」とあり、衆數の二字は須菩提章に見えたり。

⑦ 先師。洞山長谷禪師を指す。劈口。口を開くや開かざるやにといふほどの意、口を開くと同時にといふに同じ。

⑧ 洗鉢。行鉢の後、其の鉢盂を洗ふをいふ。

⑨ 蝦蟇。無尾類中、尖指類に屬する兩棲動物、又大なる蛙の異名。

⑩ 會下。同一なる說法衆會の下に走りて、其の教を受くるも

のをいふ、門下といふも同じ。

① 老宿。老年宿徳の略にて、長土の人を尊崇する語。

② 不會。會は會得なり、不會は俗に「わかりませぬ」と云ふ體の意。

③ 堆々地。上の積みて動かざる貌。

④ 袈裟角。袈裟の一角なり。角は隅なり。

⑤ 拈す。拈は「つまむ」と訓す、持ち出すことなり。

⑥ 維摩經。具には維摩詰所說經といふ、三卷なり、同阿闍梨國品に曰く「智を以て知るべからず、識を以て知るべからず云々」。

⑦ 智。智慧の時、事理の正邪を辨別する心の働きをいふ、六度の中の智慧波羅密のこと。

ざる者の如きは、還つて得てんや也た無や。師曰く、「然も此の如くなりと雖も、他に與へざることを得ず。」

垂語して曰く、「直に 本來無一物と道ふも、猶ほ未だ他の衣鉢を消得せず、這裏合に 一轉語を下し得べし。且く道へ、什麼の語をか下し得ん。」上座有り、下語すること九十六轉すれども師の意に慚はず、最後の一轉始めて師の意に慚ふ。師曰く、「閻黎何ぞ早く慚に道はざる。」別に一僧あり、密かに聴く。祇最後の一轉を聞かず、遂に上座に 請益す。上座肯つて説かず。是の如くにして三年 巾餅に執侍す、終に擧すること請ふ。慈悲を蒙らず、善く取ることを得ずんば悪しく取り去らん」と。遂に刀を持し之に向つて曰く、「若し某甲が爲に擧せずんば、即便ち上座を殺さん。」上座、悚然として曰く、「閻黎且く待て、我れ汝が爲に擧せん。」乃ち曰く、「直饒ひ將ち來るも亦著くるに處なし。」其の僧禮謝す。

師因に 普請する次、巡察し去る、一僧の普請に赴かざるを見て、師問ふ、「爾何ぞ去らざる。」僧云く、「某甲 不安。」師曰く、「爾尋常健なる時何ぞ曾て 去來せん。」

師、僧に問ふ、「甚處より來る。」僧云く、「遊山し來る。」師曰く、「還つて頂に到るや。」云く、「到る。」師曰く、「頂上に人有りや。」云く、「人無し。」師曰く、「慚麼ならば則ち頂に到らざるや。」云く、「若し頂に到らずんば、争か人無きことを知らん。」師曰く、「我れ從來 這の漢を 疑著す。」

冬節 泰首座と果子を喫する次、乃ち問ふ、「一物あり、上、天を柱へ、下、地を柱へ、黒うして漆に似たり、常に動用中にあつて動用中收不得。且く道へ、過ぎて甚麼の處にか在る」と。泰云く、「過ぎて動用中にあり。」同安の顯、別して云く、「知らず。」師、侍者を喚んで果卓を擧退せしむ。

僧問ふ、「即今往來底、喚んで甚麼としてか則ち得ん。」師曰く、「不得不得。」一僧あり、延壽堂に在つて不安、師に見えんと要す、師遂に往く。僧云く、「和尚何ぞ人家の男女を救ひ取らざる。」師曰く、「爾は是れ甚麼の人家の男女ぞ。」云く、「某甲は 大闍提人家の男女。」師良久す。僧云く、「四山相逼る時如何。」師曰く、「老僧日前に也た人家の 屋簷下に向つて過り來る。」云く、「回互か不回互か。」師曰く、「不回互。」云く、「某甲をして甚

法の名に代表せられ、法を傳ふるといふことを衣鉢を傳ふと稱するに至れり。

未審。未だ審かにせずといふ疑ひ且つ問ふの語なり。

本來無一物。末法の眞相は吾人の妄想分別を以て見るが如きものにあらざりて、執着すべき物もなきといふ。

還漢。這は「此」に同じ。這裏は「このうち」、又は「こゝ」といふ程の意なり。

一轉語。進退谷まりたる處に至つて、自由に身を轉廻するの一言、又は一語にして他を轉迷開悟せしむることを得るの語句をいふ。

最後。最後なり。

請益。學人が師家に就いて垂誨を請ふて自己を益するの意。

巾餅、手巾、淨瓶の時、左右に當侍すること。

悚然、おそる、畏。
普請。大衆を普く請じて作務に従事すること。
巡察。住持、衆僧を點檢するために衆寮を巡廻するをいふ。
不安。病氣のこと。
去來。自己の運作轉動をいふ。去就、去住等と同じく此處を去り、彼處に來るの意なり。
還漢。還は「此」と同じく、漢は「者」と同じ、人を罵る時に用ふ、蓋し胡人中國を罵つて漢と云ひしに始まる歟。
疑着。著は意味を強むるの語なり、疑の意。
冬節。冬節は冬至の節ならん、冬至は二十四氣の一、陽曆十二月二十二日頃、又節は時期といふ意もあれば、冬節は只だ冬といふ意か、一本に冬夜とあるを見れば或は然ら

の處に向つてか去らしむ。師曰く、「粟釜裏に去れ。僧、噓一聲し、「珍重」と云つて便ち坐脱す。師拄杖を以て頭を敲くこと三下して曰く、「祇與麼に去ることを解して、與麼に來ることを解せず。」

師、病僧を看す、僧云く、「火風雜散の時如何。師曰く、「來時一物なし、去も亦伊れに任從す。」云く、「羸癯を爭奈せん。」師曰く、「須らく知るべし、病まざるものあることを。」云く、「如何なるか是れ病まざる者。」師曰く、「悟る時は則ち分寸もなし、悟らざる時は則ち山坡を隔つ。」云く、「前程還つて、卜度を許さんや也た無や。」師曰く、「然も黒きこと漆に似たりと雖も、成立して今時に在り。」京兆の七師、僧をして師に問はしめて云く、「那箇、究竟して作麼生。」師曰く、「卻つて須らく他に問うて始めて得べし。」

蟾首座、師に問ふ、「佛の眞法身は猶ほ虚空の如く、物に應じて形を現すること水中の月の如しと、作麼生か箇の應底の道理を説かん。」師曰く、「臚の井を觀るが如し。」座云く、「是なることは則ち是なるも、只だ八成を道ひ得たり。」師曰く、「首座作麼生。」座云く、「井の臚を觀るが如し。」庵主あり、不安、凡そ僧を見れば便ち云ふ、「相救へ相救へ」と。多く下

語するも契はず、師乃ち去つて之を訪ふ、亦云く、「相救へ」と。師曰く、「甚麼をか相救はん。」主云く、「是れ藥山の孫、雲巖の嫡子なること莫しや。」師曰く、「不敢。」主、合掌して云く、「大家相送れ」といひて便ち遷化する。僧、師に問うて云く、「亡僧、遷化する、甚麼の處に向つてか去る。」師曰く、「火後の一莖茆。」

師、衆に示して曰く、「我れに三路ありて人を接す、鳥道、支路、展手。僧問ふ、「師、尋常學人をして鳥道を行かしむ、未審し如何なるか是れ鳥道。」師曰く、「一人に逢はず。」云く、「如何が行かん。」師曰く、「直に須らく、足下無私にし去るべし。」云く、「祇鳥道を行くが如きは、便ち是れ本來の面目なること莫しや否や。」師曰く、「關黎甚に因つてか顛倒す。」云く、「甚麼の處

とを四互といふ、不四互は此の反對なり。

① 粟釜裏。倉は新に開拓して三年を経たる田なり、故に粟釜は田の中といふことにて、一切分別を離れた處の義なり。

② 噓。口を虚にして氣を出すをいふ、嘆息の聲。

③ 與麼。恁麼に同じ、斯の如くの意にて、支那の俗語。

④ 火風。地水火風の四大にして、善等の身體は勿論萬有は此の四大に依つて成立す。

⑤ 羸癯。病氣にて身體の衰弱せること。

⑥ 山坡。堤なり、猶ほ山河を隔つと云ふがごとし。

⑦ 卜度。「うらなひはかる」と、凡夫の情識を以て是非善惡等を分別思慮するをいふ。

⑧ 七師。會元第九に曰く「京兆

府米相尙、亦米七師と曰ふ、俗會等七なるを謂ふ、又米胡と曰ふ、美髯なるが故なり」と。洞山靈祐の洞、京兆は今

の安西府。

⑨ 佛眞法身。この四句は金光明經四天王品の中にあり、四天王が佛を讚する偈なり、この問答は一本に曹山本寂と德尙座との問答となせり。

⑩ 八成。猶ほ十分に對して八分といふがごとし。

⑪ 嫡子。嫡嗣といふに同じ、世嗣ぎのこと、佛祖の大道を單傳相續する人をいふ。

⑫ 不敢。俗に「いえ、どう致しまして」といふ程の意にて、自己の能ふことを謙遜して能はずといふが如き時に用ふ。

⑬ 遷化。化を他界に遷す義にして、僧侶の死をいふ。

⑭ 亡僧、死亡せる僧のこと、遷化は名刹に住せる釋尊の死を

① 奉首座。南岳の玄奘首座、潭州石霜山慶禪師の法嗣。首座は首衆又は第一座とも稱す、叢林に於て大衆の首位にあるが故に此の名あり、多年備參の功成りて大事了畢の者を以て任するの職なり。

② 同安の願。洪州風棲山同安院。紹顯禪師、法眼文益の嗣なり。

③ 延壽堂。病室のこと。

④ 大闡提。闡提は梵語、信不具、又は斷善根と譯す、本來解脱の因を缺きて永久に成佛出來ざる者のこと。

⑤ 四山。生、老、病、死の四を山に喻へたるなり、別譯雜阿含經、涅槃經等に出づ。

⑥ 窟窟下。窟は軒なり、窟窟下のこと。

⑦ 回互、不四互。石頭の參同契に「回互と不四互」とあり。甲乙彼此相互に交參滲入するこ

か是れ學人の顛倒。師曰く、「若し顛倒せずんば甚麼に因つてか卻つて。奴を認めて郎と作す。」云く、「如何なるか是れ本來の面目。」師曰く、「鳥道を行かす。」

師、僧に問ふ、「什麼の處にか去り來る。」僧云く、「鞋を製し來る。」師曰く、「自ら解するか他に依るか。」云く、「他に依る。」師曰く、「他還つて汝を指教するや也た無や。」僧云く、「允さば即ち達せず。」

師、幽上座の來るを見て、邊に起つて禪牀の後に向つて立つ。幽云く、「和尚甚麼としてか學人を回避す。」師曰く、「將に謂へり、闍黎老僧を見ずと。」

僧、茶奠に問ふ、「如何なるか是れ沙門の行。」奠云く、「行することは則ち無きにはあらず、

その糸無ければ束縛なくして行履自由なり、その意を足下無糸とはいふなり、即ち一切煩惱の繫縛を脱して去來自由なるをいふなり。

① 本來の面目。天然のまゝにて少しも人為を加へざる姿の意にて、人に自己本來具有の心性をいふ。本分の田地、本地の風光、本分の事象と云ふに同じ。

② 奴を認めて郎と作す。「臆を認めて馬と作す」といふんが如し、郎は郎君、奴は奴僕の義、從僕を認めて主人と作すといふことにて、識神を認めて佛性となし、煩惱を認めて菩提となすをいふ。

③ 鞋。「さうり」、「わらご」等の履物をいふ、但し支那と日本とは同じからざるが如し。禪苑清規に「鞋は須らく白色なるべし、紫色を得ざれ」と

いふに對し、これは一般雲水僧に用ふるなり。
④ 火後の一葉草。火葬をしたる所に生じたる一本の草といふことにて、法身の生滅去來に隨せざる妙用をいひ、又は新陳代謝して而も新たななるをいふ。
⑤ 鳥道。鳥の過ぎた跡には何等のあとかたもなき故、後蹤跡の意なり。
⑥ 支路。玄々微妙の路にして、有無透悟等一切の見を空じて、空寂の處を往來するをいふ。
⑦ 展手。手を垂るるの意にして、百尺竿頭より一步を下つて爲人度生すること。
⑧ 學人。佛道を參學修行するものをいふ。
⑨ 足下無私去。一本に私を糸に作る、これはなり、豈し足に糸が着いては自由に歩まれぬ、

覺あれば即ち乖く。別に僧ありて師に擧示す、師曰く、「他何ぞ道はざる、宗審し是れ甚麼の行ぞと。」僧遂に此の語を進む、奠云く、「佛行佛行。」僧、回つて師に擧示す。師曰く、「幽州猶ほ可なるに似たり、最も苦しきは是れ新羅。」(東禪齊、拈じて云く、「此れ還つて疑訛有りや也た無や。若し有らば、且く道へ甚麼の處にか得ざる、若し無くんば他又道ふ、最も苦しきは是れ新羅と。還つて點檢し出さんや。他道ふ、行は則ち無きにはあらず、覺あれば即ち乖くと。卻つて再び問はしむ、是れ甚麼の行ぞ。又道ふ、佛行と。那の僧は是れ會し了つて問ふか、會し了らずして問ふか、請ふ斷し看よ。)

僧、卻つて問ふ、「如何なるか是れ沙門の行。」師曰く、「頭長三尺、頸短二寸。」乃ち侍者をして此の語を持して、三聖の然和尚に問はしむ。聖、侍者の手上に於て、招一招す。者、回つて師に擧似す、師之を肯ふ。師、僧に問ふ、「甚の處より來る。」云く、「三祖の塔頭より來る。」師曰く、「既に祖師の處より來る。又老僧を見んと要して甚麼にか作ん。」云く、「祖師は即ち別、學人と和尚と不別。」師曰く、「老僧、闍黎が本來の師

あり。
① 茶奠。鄂州茶奠山和尚は、池州南泉山將願禪師の法嗣。
② 覺。「さとる」と訓み、覺醒、覺悟の意なり。
③ 進語。躊躇せずして發言すること。
④ 幽州。支那の地名。
⑤ 新羅。古代朝鮮の一部。
⑥ 疑訛。訛は「あやまり」と訓む。
⑦ 點檢。検査、吟味すること、他人の道力、知見を検校すること。
⑧ 斷。判斷すること。
⑨ 三聖の然和尚。三聖院の慧然禪師、臨濟義玄の嗣。
⑩ 招は「ひれる」又は「つかむ」と訓ず。爪にてひれる也。
⑪ 三祖。僧璨禪師にして、支那の初祖達磨より三代目に當る故に三祖といふ。
⑫ 塔頭。寺中、寺内と云ふに同

を見んと欲す、還つて得るや否や。云く、「亦須らく和尚の自ら出頭し来るを待つて始めて得ん。」師曰く、「老僧、適來暫時在らず。問ふ、「如何なるか是れ。空劫已前の自己。」師曰く、「白馬蘆花に入る。官人問ふ、「人有り修行せんや否や。」師曰く、「公の男子を作らんことを待つて即ち修行せん。」僧問ふ、「承る、古に言へること有り、相逢ふて攀げ出さず、意を擧げて便ち有ることを知ると、時如何。」師乃ち合掌、頂戴。

師、僧に問ふ、「世間何物か最も苦なる。」僧云く、「地獄最も苦なり。」師曰く、「然らず。云く、「師の意如何。」師曰く、「此の衣線下に在つて大事を明めざる、是れを最も苦と名づく。」

師、僧に問ふ、「名は何ぞ。」僧曰く、「某甲。」師曰く、「阿那箇か是れ闍黎が主人公。」僧云く、「見に祇對する。」次、師曰く、「苦なる哉、苦なる哉、今時の人、例して皆此の如し。只だ是れ驢前馬後底を認得して將て自己となす。佛法平沈、此れ是れなり。資中の主、尙ほ未だ分たず、如何ぞ主中の主を辨得せん。」僧便ち問ふ、「如何なるか是れ主中の主。」師曰く、「闍黎自ら道取せよ。」云く、「某甲道得せば即ち是れ資中の主。」(雲居代つて云く、

「某甲道取せば、是れ資中の主にあらず。）」

「如何なるか是れ主中の主。」師曰く、「慙麼に道ふことは即ち易く、相續することは大いに難し。師遂に頷を示して曰く、「嗟き見る今時の學道流、千千萬萬門頭を認む。恰も似たり。京に入り、聖主に朝せんとして、祇意關に到つて便即ち休するに。」

師、因に僧問ふ、「如何なるか是れ青山は白雲の父。」師曰く、「森森ならざる者は是。」云く、「如何なるか是れ白雲は青山の兒。」師曰く、「東西を辨せざる者は是。」云く、「如何なるか是れ白雲終日倚る。」師曰く、「去離することを得ず。」云く、「如何なるか是れ青山總に知らず。」師曰く、「願視せざる者は是。」乃ち頷に曰く、「青山は白雲の父。白雲は青山の兒。白雲終日倚る。青山總に知らず。」問ふ、「清河の彼岸、是れ甚麼の草ぞ。」師曰く、「是れ不萌の草。」問ふ、「如何なるか是れ西來意。」師曰く、「大いに駭鷄犀に似たり。」問ふ、「蛇、蝦蟆を吞む、救ふが則ち是か、救はざるが則ち是か。」師曰く、「救ふ時は則ち雙目瞎す、救はざる時は則ち形影彰れず。」僧あり、大慈を辭す。慈曰く、「什麼の處にか去る。」僧云く、「暫く江

① 一山内にある小院をいふ、又祖師の塔のある所をいふ、三祖の塔は潯山縣西北二十里に在りといふ。
② 祖師。祖は初なり、始なり、一宗一派の開山又は一宗一派の系統に列し、世代に數へらるゝ人を云ふ、今は後者の意なり。
③ 適來。「さきほど」といふ意。
④ 空劫。以前の自己、空劫とは成、住、壞、空の四劫の一、空劫以前の自己とは世界の未だ成立せざる前の自己なり。
⑤ 白馬蘆花に入る。白いものと白いもので見分けがつかぬこと。
⑥ 時如何。時は「是」の意なり。
⑦ 地獄。六趣の一、八寒八熱等の苦處なり、地下にあれば地獄といふ。
⑧ 衣線下。袈裟下といふに同じ、袈裟を着けた沙門の身と

いふ意。
⑨ 祇對。應對、答語のこと。
⑩ 次。一本に「者」に作る。
⑪ 驢前馬後。隨處に主となること能はず、常に人の後に從つて居ること。今は妄想分別を指す。
⑫ 頷。梵語、偈陀の譯、支那に於て聖王明主の禮得を頷揚する韻文を頷といふ。印度の偈陀は韻語にして、經論文にあるもの、多く佛語を頷讚せるものなれば、偈陀を譯して頷とし、或は梵漢無學して偈頷ともいふ。
⑬ 京。「みやこ」玉城の地をいふ。
⑭ 朝。朝に種々の義あれど今は君に謁するをいふ。
⑮ 潯山。陝西省同州府華陰縣の東山西、河南兩省の境に位し、渭水の黄河に朝する附近にある重險。

西に去る。慈曰く、「我れ汝を勞す。一段の事あり、得てんや否や。」僧云く、「和尚、什麼の事か有る。」慈曰く、「老僧を將ち取り去れ。」僧云く、「更に和尚に過ぎたるものあり、亦將ち得去ること能はず。慈便ち休す。其の僧、後師に舉似す。師曰く、「闍黎爭か慈麼に道ふ合き。」僧云く、「和尚作麼生。」師曰く、「得。」法眼別して云く、「和尚若し去らば某甲、笠子を提げん。」師、又其の僧に問ふ、「大慈、別に什麼の言句か有る。」僧云く、「有る時、衆に示して云く、一丈を説得するは一尺を行取するに如かず、一尺を説得するは一寸を行取するに如かずと。」師曰く、「我れは慈麼に道はず。」僧云く、「作麼生。」師曰く、「行不得底を説取し、説不得底を行取す。」(雲居云く、「行の時は説路なく、説の時は行路無し、不説不行の時什麼の路を可行すべし。」) 樂普云く、「行説俱に到らず、即ち本事在り。」

舉す、藥山、僧に問ふ、「甚の處より來る。」僧云く、「湖南より來る。」山曰く、「洞庭湖、水満つるや也た未だしや。」云く、「未だし。」山曰く、「許多時の雨水、甚麼としてか満たざる。」僧無語。師代つて曰く、「甚麼の劫中にか會て増減し來る。」道吾代つて云く、「滿てり。」雲巖云く、「湛湛地。」

① 森森。木の高く聳ゆる貌。
 ② 駭難。驚き見ても驚き却る事。
 ③ 如きものなりと。
 ④ 大慈。杭州大慈山寶中禪師、百丈懷海の嗣。
 ⑤ 江西。江は揚子江。
 ⑥ 一段の事。「一つの事柄」といふ程の意なり、一事件一問題といふほどの意。こゝでは悟道をさす。
 ⑦ 法眼。清涼寺文益禪師、羅漢桂琛の法嗣。
 ⑧ 笠子。子は助字、笠に同じ。
 ⑨ 樂普。洛浦に同じ、洛浦元安禪師、夾山善會の嗣。
 ⑩ 湖南。洞庭湖の南一帯の地をいふ。
 ⑪ 洞庭湖。支那湖南省に在り、支那第一の大湖にして、風景殊に絶佳なり。
 ⑫ 劫。梵語大時と譯す、通常の年月日時を以て算し能ざる遠

師舉し、衆に示して曰く、「藥山と雲巖先師と遊山す。腰間の刀響く。巖問ふ、「甚麼物か聲を作す。」山、刀を抜き、巖口に研る勢を作す。」師曰く、「看よ、他の藥山、身を横へて這箇の事を爲す、今時の人、向上の事を明めんと欲せば、須らく此の意を體して始めて得べし。」

舉す、五洩の默禪師、石頭の處に到つて云く、「一言に相契はす即ち住せん、契はずんば即ち去らん」と。頭據坐す。洩便ち行く、頭、後に隨つて召して曰く、「闍黎、闍黎。」洩、首を回す。頭曰く、「生より死に到るまで祇是れ這箇、首を回し腦を轉じて作麼かせん。」洩、忽然として、契悟し、乃ち拄杖を拗折して棲止す。師曰く、「當時是れ五洩先師にあらずんば大いに承當し難し、然も是の如くなりとも雖も、猶ほ途に涉ることあり。」

舉す、無着和尚因に日晩る、遂に文殊に問うて云く、「一宿を抄せん」と擬す、得てんや否や。」殊云く、「爾に執心の在る有り、此に宿することを得ず。」著云く、「某甲執心無し。」殊云く、「爾、受戒するや否や。」著云く、「受戒すること久し。」殊云く、「爾若し執心なくんば何ぞ受戒することを用ひん。」著遂に辭し退く。均提童子、著を送つて出づ。著云く、「適來和尚道ふ、

大の時節をあらはす稱なり、但し今は「時節」といふ程に見て可なり。
 ① 巖口。巖地或は巖面と殆んど同意。
 ② 向上の事。向上の一大事の界にして、佛師所説の一大事、宇宙の眞理を指していふ。蓋し向上とは向下の對、絶對平等の境をいひ、又最上の意にも用ふ。
 ③ 五洩の默。婺州五洩山雲默禪師、馬祖道一の嗣。
 ④ 石頭。希遷禪師、青原行思の嗣。
 ⑤ 忽然。「たちまち」の意。
 ⑥ 契悟。契は「かなふ」、悟は「さと」とり」と訓す。自己胸中の分別妄想を脱却して、宇宙の眞理を悟るをいふ、開悟と同意。
 ⑦ 拗折。「れちなる」こと。
 ⑧ 承當。自ら會得領悟するをいふ。

前三三後三三とはれ多少ぞ。童子召して云く、「大徳。」著、首を回す。童子云く、「是れ多少ぞ。」師曰く、「其の父を觀んと欲せば、先づ其の子を觀よ。」

擧す、文殊大士、無著と茶を喫する次、乃ち、玻璃盞を拈起して、無著に問うて曰く、「南方に還つて這箇なりや否や。」著云く、「無。」文殊曰く、「尋常甚麼を將つてか茶を喫す。」著、無對。師代つて手を展べて曰く、「有無は且く置く、這箇を借取し、看得んや否や。」

石霜因に僧問ふ、「三尺の間甚と爲てか師顔を觀ざる。」霜曰く、「我れは道ふ、偏界會て藏さすと。」僧、後雪峯に問ふ、「偏界會て藏さざる意旨如何。」峯云く、「什麼の處か是れ石霜にあらざる。」僧、回つて霜に舉似す。霜曰く、「這の老漢、什麼の、死急かある。」師聞いて曰く、「土地を笑殺す。」西園一日自ら開浴する次、僧問ふ、「何ぞ、沙彌を使はざる。」園乃ち掌を撫すること三下す。師曰く、「一種に是れ時節因縁、中に就いて西園精妙なり。」

擧す、盤山寶積禪師上堂、「夫れ心月孤圓にして、光、萬象を吞む、光

境を照すにあらず、境も亦存するにあらず、光、境俱に亡す、復た是れ何物ぞ。」師曰く、「光境、未だ亡せず、復た是れ何物ぞ。」

師、衆に示して曰く、「唯だ、佛菩提あり、是れ眞に、歸仗の處」と。復た喝一喝して曰く、「猶ほ、者箇、去就の在るあり。」

擧す、鄧隱峯、石頭に在り、頭、草を刻る次、峯、頭の左の側に在つて又手して立つ、頭、刻子を飛ばし、峯の前に向つて一抹の草を刻る、峯云く、「和尚、祇這個を刻得して那箇を刻得せず。」頭、刻子を提起す、峯、接得して便ち草を刻る勢を作す。頭曰く、「汝祇那箇を刻得して這箇を刻得することを解せず。」峯、無對。師代つて曰く、「還つて、堆阜ありや。」

擧す、南泉、僧に問ふ、「不思議、不思議、總に生ぜざる時、我れに本來の面目を還し來れ。」僧云く、「容止の露る可きなし。」師曰く、「還つて曾て人に將ち示さんや。」陸、巨大夫南泉に問うて云く、「弟子家中に一片の石あり、或時は坐し或時は臥す、如今鐫つて佛と作さんと擬す、還つて得んや否や。」泉曰く、「得てん。」陸曰く、「得ざることを莫しや否や。」泉曰く、「得ず。」師曰く、「坐せざる時は即ち佛、坐する時は即ち佛にあらず。」南泉、

①無著。姓は董氏、永嘉の人、年十二、州の龍泉寺の律師に從つて出家す、後に牛頭山忠禪師に參す、大曆三年夏五臺山に詣せりといふ。

②執心。執着心のこと、或る一物を心に確く執持して離さざるをいふ。

③受戒。師より弟子が戒法を受くるを云ふ、戒に五戒、十戒、四十八戒、二百五十戒、五百戒等の種類あり。

④大徳。門下のものより長上の者を呼ぶ尊號、即ち總高き僧の意。

⑤玻璃盞。「ガラス」製の碗杯なり。

⑥拈起。拈は「つまむ」と訓す、拈起は拈出と殆んど同意。

⑦三尺。咫は八寸、尺は十寸、即ち距離の極めて近きを云ふ。

⑧偏界不曾藏。宇宙の當相即實

相なるをいふ、山の突兀、海の漫々、皆法身佛の露現なるをいふ。

⑨死急。火急と云ふに同じ、極めて急用の意なり。

⑩開浴。浴室を開いて入浴するをいふ。

⑪沙彌。始めて落髮して佛道に入る男子のこと。

⑫盤山寶積禪師。馬祖道一に嗣法す。

⑬佛菩提。菩提は梵語、智、道、覺等と譯す。

⑭歸仗。仗は「よる」と訓す。

⑮者箇。者は此の義、這箇と同じく「この」又は「これらの」意なり。

⑯鄧隱峯。五臺山の鄧隱峰禪師、姓は鄧氏、時に鄧隱峰と稱す、馬祖道一の嗣。

⑰又手。もと支那の俗禮にして合掌(印度の禮)に次ぐとも、又は印度の禮なりともいふ。

① 神山に問ふ、「什麼をか作す。」對へて云く、「羅を打す。」泉曰く、「手打か脚打か。」神山云く、「請ふ和尚道へ。」泉曰く、「分明に記取して、作家に舉似せよ。」師、別して曰く、「脚手なき者始めて羅を打すことを解す。」

僧、僧の章敬に問ふ、② 心法雙べ亡す、指歸何れの所ぞ。敬曰く、③ 野人汚無し、徒らに運斤に勞す。云く、師に不返の言を請ふ。敬曰く、即ち返句なしの語を擧して師に問ふ、師曰く、「道ふことは即ち甚だ道ふ、作家に遇ふこと罕なり。」

師、衆に示して曰く、「五洩先師一日、沐浴して香を焚き、④ 端坐して衆に告げて曰く、「法身圓寂なり、去來有ることを示す、⑤ 千聖源を同じうす、萬靈一に歸す、吾れ今瀉散す、胡ぞ

手を相續ふるもにて、其の續ふるに左手の親指を中に入れて拳を作り、高き胸の邊に置き、右手の五指を以て覆ふをいふ。但し現時の又手法は左手の中指を風し、他の四指を以て覆ひ、更に右手を以て之を覆ひ胸に當つるなり。

② 剎子。子は助字、剎子は謙なり。
③ 堆阜。小高き土山。唐書に「地和せず堆阜出づ。」
④ 容止。動止に同じ、「ふるまひ」の意。孝經に「容止見るべし。」

⑤ 陸巨大夫。字は景山、吳郡の人。御史大夫たり、南泉普願に參じて大いに得るところあり、居士中逸群の士なり。
⑥ 弟子。門人、門弟、徒弟に同じ、學は師の後にあるが故に弟といひ、解は師に依りて生ずるが故に子といふ、即ち教

を受くるものこと。
⑦ 神山。神山の僧密禪師、靈巖曇巖に嗣法す、洞山良介、常に密師伯と稱して尊敬せり。
⑧ 羅。銅鑼なり、樂器の名。
⑨ 作家。唐代に於て詩文に巧なる人を作家といふ。轉じて禪林、冷閑の人を呼ぶに用ふるなり。
⑩ 章敬。京兆府章敬寺の懷禪師、馬祖道一の法嗣。
⑪ 心法。心は體操の主觀をいひ、法は所緣の客觀をいふなり。

⑫ 野人。莊子の故事、野人鼻端に墨(しらつこ)の蠅の羽ほどつきて汚れてあるを、匠石が斤(をの)を揮ひ風をなして翫り取りたりといふ、今はその反對にて菩提の自性、本來清淨、迷悟の論に涉るべきにあらざることをいふ。

⑬ 沐浴。沐は髪を洗ふこと、浴は身を洗ふこと。
⑭ 端坐。端は正の義、坐は坐禪の時、威儀を整へ作法に依つて正しく坐すること。
⑮ 法身。三身の一、此れに三義ありと雖も今は眞如、法性、佛性等の語と同意にて、吾人凡夫に具有する理性をいふ。
⑯ 千聖。聖とは佛祖のことにて、千聖とは三世歴代の佛祖をいふ。
⑰ 萬靈。詳しくは三界萬靈といひ、欲、色、無色の三界の一切精靈をいふ。
⑱ 正念。八正道の一、よく戒定慧の三學を思念し、之を任持して散亂顛倒せしめざるをいふ。
⑲ 頑固のこと。論語に「固なく必なく云々。」賤の意を兼ぬ。
⑳ 禪官。禪官齊安禪師のこと。主事。知事といふも同じ、釋

與衰を假らんや、自ら神を勞すること無れ、須らく正念を存すべし。若し此の命に遵はゞ、眞に吾が恩を報す、儻し固にして言に違せば吾が子にあらず。時に僧あり問ふ、「和尚甚廢の處に向つてか去る。」洩曰く、「去るに處なし。」云く、「某甲何ぞ見ざる。」洩曰く、「眼の視る所にあらず。」師曰く、「作家」と。

人有り、擧して一僧に問うて云く、「禪官の會下に一りの主事の僧あり、忽ち一鬼使の來り追ふを見る、僧告げて曰く、「某甲身、主事となり、未だ修行に暇あらず、乞ふ七日を容し得てんや否や。」使曰く、「待て、王に白すること爲さん、若し許さば即ち七日後に來らん、然らずんば、須臾に便ち至らん」と言ひ訖つて見えず。七日後に至つて復た來つて其の僧を覓む

るに了に得べからず。若し 覓著せられん時、如何が他を 抵擬せん。師代つて曰く、「他に覓得せらる。」

江陵の僧 大川に參ず、川問ふ、「幾時か江陵を發足するや。」僧 坐具を提起す。川曰く、「子が遠來を謝す、下り去れ。」僧 禪牀を繞ること一市して便ち出づ。川曰く、「若し不恁麼ならば争か眼目の 端的を知らん。」僧、掌を拊つて曰く、「人を苦殺す、幾ど錯つて諸方の 老宿を判す。」川曰く、「甚だ 禪宗の道理を得たり。」僧、丹霞に舉似す。霞曰く、「大川の法道に於ては即ち得たり、我が這裏は然らず。」云く、「未審し此間作麼生。」霞曰く、「猶は大川の三步に較ることあり。」僧禮拜す、霞曰く、「錯つて諸方を判する者多し。」師曰く、「是れ丹霞にあらすんば、玉石を分ち難し。」

雲居到り參ず、師問ふ、「甚麼の處よりか來る。」居曰く、「翠微より來る。」師曰く、「翠微何の言句あつてか 徒に示す。」居云く、「翠微 羅漢を供養す、某甲問ふ、羅漢を供養す、羅漢還つて來るや否や。微曰く、爾毎日箇の甚麼をか唾ふと。」師曰く、「實に此の語ありや否や。」云く、「有り。」師曰く、「虚りに作家に參見し來らず。」

師、雲居に問ふ、「汝名は甚麼ぞ。」云く、「道膺。」師曰く、「向上更に道へ。」云く、「向上は即ち道膺と名づけず。」師曰く、「老僧が雲巖にありし時の祇對と異なることなし。」

雲居問ふ、「如何なるか是れ祖師意。」師曰く、「闍黎他後 把茅頭を蓋ふこととあらんに、忽ち人あつて問はゞ、如何が祇對せん。」居云く、「道膺が罪過。」

師、雲居に謂つて曰く、「吾れ聞く 思大和尚 倭國に生れ王と作ると、是なりや否や。」居云く、「若し是れ思大ならば佛とも亦作らず。」師之を然りとす。

師、雲居に問ふ、「甚麼の處にか去來す。」居云く、「山を躡み來る。」師曰く、「那箇の山か住するに堪へたる。」居云く、「那箇の山か住するに堪へざらん。」師曰く、「恁麼ならば則ち國內總に闍黎に占卻せらる。」居云く、「然らず。」師曰く、「恁麼ならば則ち子、箇の入路を得ず。」居云く、「路なし。」師曰く、「若し路なくんば争か老僧と 相見することを得ん。」居云く、「若し路あらば即ち和尚と山を隔て去らん。」師、乃ち曰く、「此の子已後千人萬人」

侶六物の一にして坐下に敷くものなり。

① 端的。端は正、的は明白の義、故に正確分明の意なり。

② 老宿。老年宿徳の時にて、長上の人を尊崇する語。

③ 禪宗。坐禪を専らにするより世人他の宗派と簡別して用ひし名稱なり。禪宗の名は何れの時代より初まりしか、明かならざれど、始めは宗派的觀念を以てしたるにあらざるは諸種の經典によつて明かなり、佛法の總府堂に斯の如きの名當るべけんや。

④ 丹霞。子淳禪師、劍州の人、芙蓉道楷禪師の嗣。

⑤ 翠微。京兆終南山の無學禪師、丹霞天然に嗣法す。

⑥ 徒衆なり、會下雲衲のこと。

⑦ 羅漢。阿羅漢の略、梵語、無學、不生、無生、殺賊又は應

供と譯す、聲聞四果の極位、再び生死の境界に生れざるが故に無生或は不生といひ、煩惱の賊を盡滅するが故に殺賊といひ、此處に至れば更に學ぶべき法なきが故に無學といひ、此處に至れば無量の功徳を具して他の供養に應ずるの資格あるが故に應供といふ。

⑧ 把茅蓋頭。一把の茅で頭を蓋ふだけの小き草庵を結んで住するといふこと。

⑨ 思大和尚。南嶽の慧思、姓は李氏、元魏南豫州武津の人、徧く禪徳に親しみ、摩訶衍を學ぶ、常は林野に居して經行修禪す。

⑩ 檢圖。支那にて日本を呼ぶ稱。聖德皇太子は南嶽の化身といふ。

⑪ 相見。對面すること、拜顔、拜眉などいふも同じ、但し祖門下の相見は只だ眉目相見のみならず、師資能所を絶し

把不住にして去ることあらん。」

雲居、師に随つて水を渡る次、師問ふ、「水深きこと多少ぞ。」居云く、「不濕。」師曰く、「蠶人。」居云く、「請ふ、師、道へ。」師曰く、「乾かす。」

師、雲居に謂つて曰く、「昔、南泉、彌勒下生經を講ずる僧に問うて曰く、「彌勒什麼の時か下生す。」云く、「見に天宮にあり、當來下生す。」南泉曰く、「天上に彌勒なく、地下に彌勒なし」と。時に居遂に師に問うて曰く、「只だ天上に彌勒なく、地下に彌勒なきが如きんば、未審し誰が與に字を安す。」師、直に得たり。禪牀を震動すること。乃ち曰く、「膺闍黎、吾れ雲巖にあつて曾て老人に問ふ、直に得たり、火爐震動すること。今日、子に一間せられて、直に得たり通身汗流るることを。」

雲居、庵を三峯に結び、日を経て、堂に赴かず、師問ふ、「子、近日何ぞ齋に赴かざる。」居云く、「毎日自ら天神の供を送る有り。」師曰く、「我れ將に謂へり、汝は是れ箇の人なりと、猶ほ這箇の見解を作すことあり、汝晩間に來れ。」居、晩に至る、師、「膺庵主」と召す。居、應諾す。師曰く、「不思議不思議、是れ甚麼ぞ。」居庵に回り、寂然として、宴坐す。

天神此より竟に尋ねれども見えず。此の如く三日にして乃ち絶ゆ。

雲居、膳を合する次、師、問ふ、「什麼をか作す。」居曰く、「膳を合す。」師曰く、「多少の鹽をか用ふ。」云く、「旋入る。」師曰く、「何の滋味をか作す。」居云く、「得たり。」

師、雲居に問ふ、「大闡提の人は父を殺し、母を害し、佛身血を出し、和合僧を破る。是の如く種々の孝養何にかある。」居云く、「始めて孝養を得たり。」

雲居、作務の次、悞つて蚯蚓を刺殺す、師曰く、「這箇輩。」居云く、「他死せず。」師曰く、「二祖、鄴都に往く、又作麼生。」居無對。

師、扇上に佛の字を書す。雲居見て卻つて不の字を書す、師又改めて非の字と作す、雪峯見

て一體なるを眞の相見とはいふなり。

把不住。把住し得ざることを、把住とは取つて動かざるの義なり。

彌勒下生經。具には彌勒下生成佛經といひ、彌勒が下生成佛することを説きたるものなり。

彌勒。又提提闍黎ともいひ、慈氏と譯す。姓は阿逸多といひ、無能勝と譯す。南天竺の婆羅門にして兜率天に上生し、未來五十六億七千萬歳の後、此土に出現し、釋尊に代つて衆生を渡度するを云ふ。

これを彌勒下生といふ、故に彌勒を當來下生彌勒尊佛と云ふ。

火爐。火を焚く爐なり、山國の農家に在る圍爐裏にて、圍んで暖を取る所なり。

庵。葉落を離れて野外に有且

に作りたる屋舎をいふ。
① 堂。僧堂を指す。
② 齋。潔斎と熟字して、身口意の三業をつしむことなれども、轉じて佛事の時の供養の食事をいふに至れり、但し普通は齋といひて午時の飯食をいふ。
③ 天神。地祇に對し、天に屬する神をいふ。
④ 箇の人。佛祖の大道を會得したる人をいふ。
⑤ 見解。知見解會の時、見聞覺知に依りて解了したる知識といふ程の意なり。
⑥ 庵主。一庵の主をいふ。現今地方に依りて比丘尼の異稱として用ひらるることあれども、庵主は必ずしも尼に限るに非ず。
⑦ 寂然。さびしき説。
⑧ 宴坐。宴は安なり、肅なり、「やすむ」と訓す。

⑨ 雲。雲は「みそ」と訓す、晴明に同じ、膳を合すとは膳を製するをいふ。
⑩ 旋。旋は「や」と訓す、稍と同義。
⑪ 大闡提。梵語、斷善根、又は信不具と譯す、本來解脫の因を缺きて到底成佛する能はざるものをいふ。
⑫ 作務。作樂勞役を云ふ。
⑬ 這箇輩。支那宋代の俗語にして、是れはどうしたることかといふ程の意。
⑭ 鄴都。二祖慧可、法を僧徒に付し、正勸寺に往いて説法す、船和法師、邑宰韋仲侃に誘り師に加ふるに非法を以てす、是れより先き環に謂つて曰く、吾れ宿業あり、今當に之を償ふべしと、往いて鄴縣に到り、怡然として委頓す。
⑮ 雪。雪は「うつは」と訓す、佛道を傳ふるに足る人材として意ん

て乃ち一時に除卻す。

曹山來つて師に謁す。師問うて曰く、「闍黎、名は何ぞ。」對へて曰く、「本寂。」師曰く、「向上更に道へ。」曹云く、「道はず。」師曰く、「什麼と爲てか道はざる。」曹云く、「本寂と名づけず。」師深く之を器とす。

曹山 行脚の時、烏石の靈觀禪師に問ふ、「如何なるか是れ毗盧の師、法身の主。」石曰く、「我れ若し偏に向つて道はゞ即ち別にあるなり。」曹、師に舉示す。師曰く、「好箇の話頭、祇進語を缺く、何を甚麼と爲てか道はざると問はざる。」曹卻り來つて前語を進む。石曰く、「若し我れ不道と言はゞ即ち我が口を瘖卻す、若し我れ道と言はゞ即ち我れ舌を瘖卻す。」曹歸つて師に舉示す。師深く之を肯ふ。

曹山親しく師の室に入つて、密に所解を印せらる、盤桓すること數載、乃ち師を辭す、師問ふ、「什麼の處にか去る。」云く、「不變異の處に去る。」師曰く、「不變異の處豈に去ることあらんや。」曹云く、「去るも亦不變異。」師又曰く、「子歸らば飛鷹嶺を過ぐるを打することなしや。」曹曰く、「是。」師曰く、「來時飛鷹嶺より來ることを打することなしや。」曹云く、

するをいふ。
① 行脚。本師の膝下を離れ、書友良師を尋ねて諸方を遊行し、山川を跋渉するをいふ。
② 烏石の靈觀禪師。福州烏石山靈觀禪師、黃髮希運に嗣法す。

③ 曹却。どもりにすること。
④ 密。密は秘密の密に非ず、親密の密なり。
⑤ 印。印可の時、印は信なり、可は許可なり、印可とは信認して證明を與ふるの意なり。
⑥ 盤桓。躊躇低徊すること。
⑦ 飛鷹嶺。山の名、支那新城縣の東七十里に在り。
⑧ 打。或、爲の義なり。

⑨ 寶鏡三昧。寶は尊重の義、鏡は明鑑の義、人に具足の不昧なる妙心は不生不滅、不垢不淨にして、萬物を照鑑し、毫もたがはざること明鏡の如し、但しこれ吾人凡夫常に然

「是。」師曰く、「一人あり、飛鷹嶺より過ぐることを打せずして、便ち此間に到る、子還つて知るや。」曹云く、「渠彼に往くなし。」師曰く、「子甚の道理を見て便ち渠彼に往くなしと道ふ。」曹云く、「若し這の田地に到らずんば争か恣麼に道ふことを解せん。」師遂に囑して曰く、「吾れ雲巖先師の處にあつて、親しく寶鏡三昧を印せらる。事、窮めて的要なり、今汝に付す。」其の詞は尾に出す。師又曰く、「末法の時代、人多くは乾慧なり、若し眞偽を辨驗せんと要せば三種の滲漏あり、一に曰く、見滲漏。機、位を離れずんば毒海に墮在す。二に曰く、情滲漏。向背に滞在すれば見處偏枯なり。三に曰く、語滲漏。妙を究むれば宗を失し、機、終始を味ます。濁智流轉は此の三種を出でず、子宜しく之を知るべし。」

道全(第二世の住、亦中洞山と云ふ)。師に問ふ、「如何なるか是れ出離の要。」師曰く、「闍黎足下、煙生す。」全、當下に契悟し、更に他に遊ばず。雲居、進語して云く、「終に敢て和尚の足下煙生するに孤負せず。」師曰く、「歩々玄なる者は即ち是れ功到。」

龍牙因に翠微に參じ、乃ち問ふ、「學人、和尚の法席に到りしより一箇

りといふには非ず、佛祖單傳の三昧に往する時、此の妙用をあらはすなり、故に三昧を喩ふるに寶鏡を以てするなり。三昧とは坐禪のことなり。
⑩ 末法。佛滅後一千年を正法といひ、更に其の後千年を像法といひ、其の後一萬年を末法といふ、末法の世には正師少く、佛法は漸次に衰滅するが故に此の名あり。
⑪ 乾慧。理に偏したる智慧。
⑫ 滲漏。不覺の中に自ら流注する微細なる煩惱をいふ。
⑬ 見滲漏。已見尙ほ存するの意にて、機、位を守つて佛見法見の未だ全く消滅せざるを云ふ。
⑭ 情滲漏。情識尙ほ存し取捨の念未だ全く滅せざるを云ふ。
⑮ 語滲漏。語句の妙を極むるも語路に滞在して、未だ宗旨に

月餘、一法の示誨を蒙らず、意何にかある。微曰く、「甚麼をか嫌ふ。」僧あり、擧して師に問ふ。師曰く、「閻黎爭か老僧を怪み得ん。」龍牙又「徳山に謁し、問うて曰く、「遠く聞く、徳山一句の佛法と。到來するに及んで未だ曾て和尙、一句の佛法を説くことを見ず。」徳山曰く、「什麼をか嫌ふ。」牙、肯はず。乃ら師の法席に造り、前の如く之を問ふ、師曰く、「争か老僧を怪み得ん。」

龍牙、徳山に問ふ、「學人、鏡鐙の劍に仗つて師の頭を取らんと擬する時如何。」山頭を引ぶ、龍牙云く、「頭落ちぬ。」山、微笑す。牙、後に師に參じ、前語を擧す。師曰く、「徳山什麼とか道ひし。」云く、「徳山無語。」師曰く、「道ふこと莫れ、無語と、且く徳山落つる底の頭を將つて老僧に呈似せよ。」牙、過を省して、懺謝し、遂に師の席に止り、衆に隨つて參請す。

龍牙問ふ、「如何なるか是れ祖師意。」師曰く、「洞水の逆流せんを待つて、即ち汝に向つて道はん。」牙、始めて厥の意を悟る。

華嚴問ふ、「學人、未だ理路を見ず、未だ情識を免れず。」師曰く、「汝

合せざるをいふ。
①道全。洞山の第二世、又は中洞山ともいふ、洞山良价の法嗣。
②出離。迷界を離るゝの意。出離生死、「出離三界」等の語あり。
③當下。直下に同じ、直ちにの意。
④龍牙。海南龍牙山居通禪師、洞山に嗣法す。
⑤徳山。朗州徳山宣鑿禪師、澧州龍潭崇信に嗣法す。
⑥鏡鐙劍。干將と共に支那古寶劍の名。
⑦呈似。似は示と同じく、指し示すこと。
⑧懺謝。悔は梵語、懺悔の略、悔過と譯す、謝は「わびる」と訓じ、即ち謝する意なり。
⑨參請。參問し請益すること、學人が師家に隨事して尋問を發し、師家の提撕を受くるを

還つて理路を見るや也た無や。」云く、「理路なきことを見る。師曰く、「什麼の處よりか情識を得來る。」云く、「學人、實に問ふ。」師曰く、「慙麼ならば須らく萬里無寸艸の處に向つて立つべし。」云く、「無寸艸の處、還つて立つことを許すや、也た無や。」師曰く、「直に須らく慙麼にし去るべし。」
華嚴柴を搬ぶ次、師、柴を把住して問ふ、「狹路、相逢ふ時作麼生。」云く、「反仄せば何の幸かあらん。」師曰く、「汝、吾が言を記せよ。汝南に向つて住せば一千人あらん、若し北に向つて住せば即ち三二百のみならん。」

九峯見ゆ、師曰く、「掌に神珠あり、白晝に人に示す、人且に劍を按せんとす、況んや玄夜をや、子貴ぶべし」と。峯云く、「但だ珠を識らざる者のみ、之を識らば亦晝夜なからん。」師之を稱して「俊士となす。」
(師、没して塔の傍に、應す、中和の始めに至つて、乃ち塔を辭して北遊す。)

青林到り參す、師問うて曰く、「近離什麼の處ぞ。」林云く、「武陵。」師曰く、「武陵の法道此間と何似ぞ。」云く、「胡地、冬、筈を抽く。」師曰

いふ。
①華嚴。京兆華嚴寺の休靜禪師、洞山良价に嗣法す。
②情識。凡夫迷情の見解ないふ。
③反仄。反は「かへる」と訓じ、仄は「かたぶく」と訓す、今反仄とは「かたへに寄る」といふ意味なり。
④九峰。蜀州九峰普滿禪師、洞山の法嗣。
⑤神珠。神は天のけみのことなれど、轉じて靈妙不思議の意に用ひらる、今もその意なり、珠はもと眞珠のことなりしが、轉じて一般に圓き玉をいふ。
⑥劍を按す。劍を抜かんとすして手をかくること。
⑦玄夜。翁は暗夜、深夜のことし。
⑧俊士。智、千人に過ぐるを俊といふ。

く、「別飯に、香飯を炊ぎ、此人を供養せよ。」林、拂袖して便ち出づ。師曰く、「此の子、向後、天下の人を走殺することあらん。」

青林、洞山にあつて松を栽うる次、劉翁なる者あり、偈を求む、偈を作つて曰く、「長々三尺餘り、鬱々として青草を覆ふ。知らず何れの代の人ぞ。此の松の老いたるを見ることを得ん。」劉、偈を得て師に呈す。師謂つて曰く、「此れは是れ、第三代洞山の主人なり」と。

青林、師を辭す。師曰く、「子甚麼の處に向つてか去る。」林云く、「金輪隠れざる的、徧界、紅塵を絶す。」師曰く、「善く自ら、保任せよ。」林、珍重して出づ。師門送して、青林に謂つて曰く、「恁麼にし去る、一句作麼生か道はん。」林曰く、「歩々紅塵を踏み、通身影像なし。」師良久す。林云く、「老和尚何ぞ速かに道はざる。」師曰く、「子恁麼に性急なることを得たり。」林云く、「某甲が罪過。」便ち禮辭す。

北院、師を辭し嶺に入り去らんと擬す。師曰く、「善く爲せよ。飛猿嶺峻なり、好く看よ。」院、沈吟良久す。師曰く、「通閣黎。」院應諾す。師曰く、「何ぞ嶺に入り去らざる。」此に因つて省悟し、更に嶺に入らずして師に師

事す。(時に、饅頭通と號す。)

師、疎山に問ふ、「空劫無人の家、是れ甚麼人の住處ぞ。」疎云く、「不識。」師云く、「人還つて意旨ありや也たなしや。」云く、「和尚何ぞ他に問はざる。」師曰く、「現に問ふ。」次いで、云く、「是れ何の意旨ぞ。」師對へず。

① 欽山の還、師に參す、師問ふ、「甚麼の處よりか來る。」對へて云く、「大慈より來る。」師曰く、「還つて大慈を見るや。」欽云く、「見る。」師曰く、「色前に見るか色後に見るか。」欽云く、「色の前後にあらずして見る。」師、默して置く。欽乃ち曰く、「師を離るること太だ早し、師の意を盡さず。」(法眼云く、「師の意を盡さずんば、他に承嗣し得易からず。)

② 巖頭、雪峯、欽山坐する次、師、茶を行き來る。欽乃ち眼を閉づ(或は開眼に作る)。師曰く、「甚麼の處にか去來す。」欽云く、「定に入り來る。」師曰く、「定、本門なし、何れよりしてか入る。」

雪峯、到り參す。師問ふ、「甚れの處よりか來る。」云く、「天台より來る。」師曰く、「智者を見るや否や。」云く、「義存鐵棒を喫するに分あり。」雪峯、會下にあつて、飯頭となる、米を淘る次、師問ふ、「沙を淘つて米

② 處。「はかりすまひ」のこと、故に尸を書く、それより轉じて一般に粗屋の地名に用ふ。

③ 中和。唐の僖宗皇帝中の年號なり。

④ 青林。洞山師處禪師、洞山の第三世なり。良价の法嗣。

⑤ 近羅什麼の處。俗語に「どこ、から来たか」といふことにて、師家が學人の脚下點檢の語として屢々用ひらる。

⑥ 武陵。今の湖南省常德府武陵縣の四方にありて、有名なる仙地なり。

⑦ 胡地。武陵のこと、南越に屬する故に胡地といふ、土地硬にして冬時猶ほ笄を生ずと。

⑧ 別飯。飯は瓦製の炊ぐ器なり、釜と見て差支なし、別は特別なり。

⑨ 香飯。香穢國に於ける飯の意より轉じて、佛に供する飯をいひ、更に化して一般僧侶に

供する飯をいふ、蓋し清淨にしてなき意歟。

⑩ 偈。梵語偈陀の譯、單句に句を結びて宣唱する韻文をいふ、大智度論三十三に、「一切の偈を祇夜と名づく、六句三句五句、句の多少不定なり云云」といへり。

⑪ 金輪。四輪の一、金輪王が現れて何處にも隠れざるの意。

⑫ 紅塵。浮世のちり、煩はしき世の中に喩ふ。

⑬ 保任。保任持して失はざるをいふ。

⑭ 北院。北院の通禪師。

⑮ 沈吟。思ひ入りて考ふること。

⑯ 饅頭通。通この時、饅頭の役を勤めて居たるを以て斯く稱したるなり。

⑰ 欽山の還。潭州欽山文遠禪師、洞山真价に嗣法す。

⑱ 大慈。杭州大慈山。

を去るか、米を淘つて沙を去るか。峯云く、「沙米一時に去る。師曰く、「大衆個の什麼をか喫せん。」峯、遂に米盆を覆卻す。師曰く、「因縁に據るに徳山にあるべし。」

師、一日雪峯に問ふ、「甚麼をか作し來る。」峯云く、「槽を斫り來る。」師曰く、「斫斧にか斫り成す。」峯云く、「一斧に斫り成す。」師曰く、「猶ほ是れ這箇の事、那邊の事作麼生。」峯云く、「直に得たり手を下す處なきことを。」師曰く、「猶ほ是れ這邊の事、那邊の事作麼生。」峯休し去る。

雪峯、飯を蒸す次、師問ふ、「今日蒸すこと多少ぞ。」峯云く、「二石。」師曰く、「足らざること莫しや。」峯云く、「中に於て喫せざる者あり。」師曰く、「忽然として總に喫せば又作麼生。」峯無對。(先雲居代つて云く、「總に喫せば即ち足らざるものあることを見ず。」)

師、雪峯の來るを見て曰く、「門に入り來らば須らく語あることを得べし、蚤く箇の了と道ふことを得ざれ。」峯云く、「某甲口なし。」師曰く、「口なきことは即ち且く従く、我れに眼を還し來れ。」峯便ち休す。(先雲居云く、「某甲口あらんことを待つて即ち道はん。」長慶云く、「與麼ならば則ち某甲謹んで

①色。色は質礙の義、五根五境等一切の色法をいふ。

②巖頭。支那泉州全盛師師、徳山宣鑑に嗣法す。

③定。三學の一、六度の一、定は靜慮、靜慮の義にて禪定の事、心一處に住して種々の妄念分別を起さず、不動靜の境界をいふ。

④天台。支那浙江省天台縣の西に在り、隋の智者大師此の山に依つて一宗を闡揚す、天台宗是れなり。

⑤智者。天台の智者大師なるも、今は自己本來の面目を指していふ。

⑥巖存。巖峰の説。

⑦飯頭。叢林に於て典座の下にあつて、大衆に供する粥飯を掌る役名。

⑧覆却。古來これを解するに米盆を覆却したるなりと云ふ説と、米盆を衣の袖位にて覆ひ

退かん。雲居 微して云く、「祇雪峯與麼に道ふが如きは、是れ入門の語か、是れ入門ならざる語か。」

雪峯、師を辭す。師曰く、「子甚れの處にか去る。」峯云く、「嶺中に歸り去る。」師曰く、「當時、甚麼の路より出づ。」峯云く、「飛猿嶺より出づ。」師曰く、「今回るに甚麼の路に向つてか去る。」峯云く、「飛猿嶺より去る。」師曰く、「一人あり、飛猿嶺より去らず、子還つて識るや。」峯云く、「識らず。」師曰く、「甚麼としてか識らざる。」峯云く、「他、面目なし。」師曰く、「子既に識らず、争か面目なきことを識らん。」峯、無對。

巖頭、徳山に參す、頭、方丈の門に入り、身を側て、問ふ、「是れ凡か是れ聖か。」山、便ち喝す。頭、禮拜す。人あり、師に舉似す。師曰く、「若し是れ 叢上座にあらずんば、大いに承當し難からん。」頭曰く、「洞山老人、好惡を識らず、錯つて名言を下す。我れ當時 一手擡一手搦。」瑯琊の覺云く、「巖頭、人の 問着するなければ、奇特なることを妨げず、

纒に洞山に腰後に一銚せられて、直得に瓦解冰消す。」

たるなりと云ふ説とあれど、蓋し前者當を得たるものならん。

①據于因縁云々。この八字、一本に「子、他後別見人去在」に作る。

②槽。槽とは家畜を養ふ飼桶なるを本義とす、今は牛馬食をいふ歟。

③忽然。思ひかけなくの意。

④先雲居。先雲居とは道階を指す歟、蓋し道階以後雲居山に住して名ある者約二十人あり、先の字はそれらと簡別するために特に用ひたるならん。

⑤微。微は微語の意、これ汾陽十八問の微問に當る、微問とは師家を問詰するをいふ。

⑥飛猿嶺。福州にある山の名。

⑦方丈。方一丈の居室の意にて、寺院住持の居處をいふ。

⑧凡。凡夫のこと、聖者に對す、

來つて什麼をかたす。云く、「和尚に孝順し來る。師曰く、「世間什麼物か最も孝順なる。侍者、無對。」

師、不安。沙彌をして雲居に傳語せしむ、乃ち囑して曰く、「他或は問はん、和尚安樂なりや否やと。但だ道へ雲巖の路、相次絶せりと、汝此の語を下し須らく遠く立つべし、恐らくは他、汝を打せん。」沙彌、旨を傾じ去つて傳語す、聲未だ絶えざるに、早く雲居に一棒を打せらる。沙彌、無語。(同安の顯、代つて曰く、「慙麼ならば則ち雲巖の一枝墜ちず。雲居の錫云く、「上座、且く道へ、雲巖の路絶するか絶せざるか。」崇壽の稠云く、「古人此の一棒を打する意作麼生。」)

師、將に圓寂せんとなす、衆に謂つて曰く、「吾れに開名の世にあるあり、誰人が吾がために除き得ん。」衆、無對。時に沙彌出でて云く、「和尚の法號。師曰く、「吾が間名已に謝す。」(石霜云く、「人の他を肯ふことを得るなし。雲居云く、「若し間名あれば、吾が先師にあらず。曹山云く、「古より今に至るまで人の辨得するなし。」疎山云く、「龍に水を出づるの機あり、人の辨得するなし。」)

智慧滝くして愚痴なる衆生をいふ、教家に於ては見道以前をすべて凡夫とし、三菩提位を内凡、三賢位を下凡、以下を底下の凡夫といふ。

① 聖。聖者の略、凡夫に對し煩惱を斷盡したる人をいふ、聖人といふも同じ、小乘にては見道初果以上をいひ、大乘にては無明を斷破せる地上の菩薩をいふ。

② 上座。巖頭、詠を全該といふ。

③ 一手擡一手搦。片手にて擡げ片手にて搦へること、即ち一擡一抑、一擡一壓と云はんが如し。

④ 理耶の覺。滁州瑯琊山慧覺禪師、汾陽の善昭の法嗣。

⑤ 問着。着は意味を強める時用ふる語、問はるゝの意なり。奇特。めづらしくすぐれたること。宋書に曰く、「風骨奇

僧問ふ、「和尚、遠和還つて病まざる者ありや也たなしや。師曰く、「有り。云く、「病まざる者還つて和尚を看するや否や。師曰く、「老僧他を看するに分あり。云く、「未審し和尚如何が他を看す。」師曰く、「老僧看する時、病あることを見す。」

師、僧に問ふ、「殺漏子を離れ、甚麼の處に向つてか吾れと相見す。僧、無對。遂に頰を示して曰く、「學者恒沙一悟なし。過は他の舌頭の路を尋ぬるにあり。形を忘れ蹤跡を混ずることを得んと欲せば、努め力めて慙懃にせよ空裏に歩せよ。」

師、咸通十年己丑三月朔旦を以て、命じて髪を剃り、身を深ひ、衣を披き鐘を聲さしめ、衆を辭し儼然として坐化す。時に大衆、號

特。孝順。孝はよく親に事ふる

こと、順は「したがふ」と訓す。

⑦ 囑。委囑、付囑の囑にして、己の願望を先方に寄せ告ぐる意。

⑧ 領。領得のこと、物事をのみこむこと。

⑨ 圓寂。涅槃の新譯にして、圓滿寂滅の意なり。

⑩ 問名。虛名と同意。

⑪ 法號。佛門に入りたる人につくる名、後世は死者の諡號をいふ、戒名、法諱と云ふも同じ。

⑫ 謝。絶又は退の意。

⑬ 遠和。四大和合に違ふの意にして、四大の調和を失つて病となること也。

⑭ 殺漏子。四大色身をいふ。恒沙。恒河沙數の時、恒河の沙程の數といふ意にて無數と

いふも同じ。

⑮ 混。混亡、或は混滅と熟字し、無の意。

⑯ 慙懃。俗に「れんごろ」といふこと、丁寧親切の意なり。

⑰ 咸通十年。咸通は唐の宣宗皇帝中の年號、同十年は佛紀一三五四年、西紀八六九年に當る。

⑱ 儼然。壯なる貌、きつぱりといかめしきこと。

⑲ 大衆。大は多の義、多衆の人といふこと、叢林にて、四方より集り來れる雲衲を總じて大衆といふを常とす。

⑳ 昏。は「ひかげ」と訓す、日影のことなり。

㉑ 愚癡。大衆の愚癡を戒むる會なり。

㉒ 臨行。涅槃の行に臨むをいふ。

㉓ 號。法號にして出家してより

の年毒をいふ。

①唐の懿宗皇帝の賜ひし諡號。

勤^① 暑^②を移して止まず、師^③忽ち目を開いて衆^④に謂つて曰く、「夫れ出家^⑤の人は心物に依らざる、是れ眞^⑥の修行なり、生^⑦に勞し死^⑧に息はゞ、悲^⑨みに於て何かあらん。」乃ち主事の僧^⑩を召して、愚癡齋^⑪一普^⑫を辨せしむ。蓋し其の戀情^⑬を責むるなり。衆^⑭、猶ほ戀慕^⑮して止まず、延いて七日に至つて食具^⑯、方に備る。師^⑰も亦隨つて齋^⑱し畢つて曰く、「僧家^⑲、大率^⑳臨行^㉑の際、噴動^㉒斯の如きことを事とすること勿れ」と。八日^㉓に至り浴^㉔し訖つて端坐^㉕して長往^㉖す。壽^㉗六十有三^㉘、臘^㉙四十二^㉚、敎^㉛して、悟本^㉜大師^㉝と諡^㉞す。塔^㉟を慧覺^㊱と曰ふ。(師^㊲、昔泐潭^㊳に在り、大藏^㊴を尋釋^㊵して、大乘^㊶經要^㊷一卷^㊸、并に道俗^㊹を激勵^㊺する偈^㊻・頌^㊼・誡^㊽等を纂^㊾出す。諸方^㊿に流布^㊽す。)

行由

師^①幼歲^②、師^③に従つて因^④に般若心經^⑤を念^⑥す、「無眼耳鼻舌身意^⑦」の處^⑧に至つて、忽ち手を以て面^⑨を捫^⑩でて師^⑪に問うて曰く、「某甲^⑫に眼耳鼻舌等有り、何が故ぞ、經^⑬に無と言ふや。」其の師^⑭、駭然^⑮として之^⑯を異なりとして云く、「吾れは汝^⑰が師^⑱に非ず」と、即ち指して、五洩山^⑲に往いて靈默禪師^⑳を禮せしむ。

師^①、遊方^②、首^③に南泉^④に謁し、馬祖^⑤の諱辰齋^⑥を修するに値ふ。泉^⑦、衆^⑧に問うて曰く、「來日^⑨、馬祖^⑩の齋^⑪を説く、未審^⑫し馬祖^⑬還つて來るや否や。」衆^⑭、皆無對^⑮。師^⑯乃ち對へて曰く、「伴^⑰あらんを待つて即ち來らん。」泉^⑱曰く、「此の子^⑲、後生^⑳なりと雖も、甚だ雕琢^㉑するに堪へたり。」師^㉒曰く、「和尚^㉓、良を厭^㉔して賤^㉕と爲すこと莫^㉖れ。」

師^①、洞山^②に參じ問うて曰く、「頃南陽^③の忠國師^④、無情說法^⑤の話^⑥有るを聞く、某甲^⑦未だ其の微^⑧を究めず。」洞^⑨曰く、「聞黎^⑩記得^⑪すること莫^⑫しや。」師^⑬曰く、「

國譯洞山悟本禪師語錄

- ①行由。行狀緣由の時、履歷のこと。
- ②師。幼時の受業の師。
- ③駭然。驚く貌。
- ④五洩山。婺州に在り、馬祖道一の法嗣靈默禪師在住す。
- ⑤馬祖。道一禪師、支那漢州の人、南岳懷讓禪師に參じ、心印を傳ふ。
- ⑥諱辰齋。年忌法要なり。
- ⑦後生。先生に對する語、少年にいふこと。
- ⑧雕琢。刻彫琢磨にて、專心辨道することはいふ。
- ⑨厭。厭と同意。
- ⑩洞山。靈祐禪師、支那福州の人、百丈懷海の嗣、洞仰宗の祖なり。

く、「記得す。」鴻曰く、「子試みに擧すること一徧せよ、看ん。」師、遂に擧す。僧問ふ、「如何なるか是れ古佛心。」國師曰く、「牆壁瓦礫是なり。」僧曰く、「牆壁瓦礫、豈に是れ無情にあらざらんや。」國師曰く、「是。」僧曰く、「還つて説法を解するや否や。」國師曰く、「常説熾然、説無間歇。」僧云く、「某甲甚麼としてか聞かざる。」國師曰く、「汝自ら聞かず、他の聞く者を妨ぐ可からず。」僧云く、「未審し甚麼人か聞くことを得。」國師曰く、「諸聖聞くことを得。」僧云く、「和尚還つて聞くや否や。」國師曰く、「我れ聞かず。」僧云く、「和尚既に聞かず、争か無情の説法を知らん。」曰く、「頼に我れ聞かず、我れ聞かば即ち諸聖に齊し、汝即ち我が説法を聞かず。」僧云く、「恁麼ならば則ち衆生無分にし去るや。」國師曰く、「我れ衆生の爲に説く、諸聖の爲に説かず。」僧云く、「衆生聞いて後如何。」國師曰く、「即ち衆生に非ず。」僧云く、「無情説法何の典教にか據る。」國師曰く、「灼然、言、典を該ねざれば君子の所談に非ず、汝豈ぞ見ざる。華嚴經に曰く、刹説衆生説、三世一切説と。」師、擧し了る。鴻山曰く、「我が這裏も亦有り、祇是れ其の人に遇ふこと罕なり。」師曰く、「某甲未だ明めず、乞ふ師、指示せよ。」鴻山、拂子

① 忠國師。支那西京光宅寺の慧忠國師、六祖慧能に嗣法す。
 ② 無情説法の話。慧忠國師、雲巖を訪ひし時の問答なり、無情は非情といふに同じ、有情に對す、一切の動物即ち人犬鬼畜等の心算あるものを有情と稱するに對し、草木金石等の一切心算なきものをいふ。
 ③ 常説熾然。常に熾んに説法して居てやめるときなし。
 ④ 衆生無分。衆生には其の説法を聞く分際がないかといふ意。
 ⑤ 典教。典經と殆んど同意、聖人の書をいふ。
 ⑥ 灼然。明かなる説。
 ⑦ 刹。梵語刹摩の略、國、土、田等と譯す。
 ⑧ 衆生。梵語、薩埵の譯、一切生物に名づく。
 ⑨ 三世一切。三世は過去、現在及び未來なり、三世一切とは

を擧起して曰く、「會すや。」師曰く、「不會。請ふ、和尚説け。」鴻曰く、「父母所生の口終に子が爲に説かず。」師曰く、「還つて師と同時に道を慕ふ者有りや否や。」鴻曰く、「此を去つて。澄陵攸縣は石室相連る、雪巖道人といふ有り、若し能く撥草瞻風せば、必ず子が所重と爲らん。」師曰く、「未審し此の人如何。」鴻曰く、「他曾て老僧に問ふ、學人師に奉じ去らんとする時如何、老僧、他に對して道ふ、直に須らく滲漏を絶して始めて得べし、他道ふ還つて師の旨に違はざることを得んや也た無や。老僧道く、第一、老僧這裏にありと道ふことを得ざれ。」師、遂に鴻山を辭し、徑に雲巖に造る。前の因縁を擧し了つて便ち問ふ、「無情説法、甚麼人か聞くことを得ん。」巖曰く、「無情聞くことを得。」師曰く、「和尚聞くや否や。」巖曰く、「我れ若し聞かば汝即ち吾が説法を聞かず。」師曰く、「某甲甚麼としてか聞かざる。」巖、拂子を擧起して曰く、「還つて聞くや。」師曰く、「聞かず。」巖曰く、「我が説法汝尙は聞かず、豈に況んや無情の説法をや。」師曰く、「無情説法、何の典教をか該ぬ。」巖曰く、「豈ぞ見ざる。彌陀經に云く、水鳥樹林悉皆念佛念法と。」師此に於て省あり、乃ち偈を述べ。

時間的にも空間的にもあらゆるものといふ意なり。
 ③ 澄陵攸縣。澄陵は國名、攸縣は土地の名なり。
 ④ 撥草瞻風。深山幽谷に入り、草を撥つて宗師を探り道を問ふこと。
 ⑤ 他。雲巖を指す。
 ⑥ 省あり。省悟、覺醒の義。
 ⑦ 也。太奇。「也た太だ奇なり」と訓む、俗に「奇妙々々」といふに同じ。
 ⑧ 餘習。習氣にして煩惱の習慣の殘れるをいふ。
 ⑨ 聖諦。諦は眞實の義にて、佛道といふ程のこと、佛法には眞諦と俗諦とありて眞諦は非有の理を明し、俗諦は非空の理を明す、然しこの兩面は表裏不離の關係を有するが故に、この二を融歸して眞俗不二となりたる所を聖諦といふ。

「**也**太奇、**也**太奇、無情說法不思議、若し耳を將て聽かば終に會し難からん、眼處に聞く時、方に知る可し。」

師、雲巖に問ふ、「某甲、除習あり、未だ盡さず。巖曰く、「汝曾て甚麼をか作し來る。」師曰く、「聖諦すら亦爲さず。」巖曰く、「還つて歡喜するや也た未だしや。」師曰く、「歡喜することは則ち無きにあらず、糞掃堆頭に一顆の明珠を拾ひ得たるが如し。」

師、雲巖に問ふ、「相見せんと擬欲する時如何。」曰く、「通事舍人に問取せよ。」師曰く、「見に問ふ。」次いで、曰く、「汝に向つて甚麼とか道はん。」

雲巖、擧して師に問ふ、「藥山、僧に問ふ、見説らく汝算を解すること虚か實か。云く、不敢。山曰く、汝試みに老僧を算せよ看ん。僧無對。汝作麼生。」師曰く、「請ふ、和尚の生日。」

藥山、夜參燈を點せず、山、垂語して曰く、「我れに、一句子有り、特牛の兒を生せんを待つて、即ち汝に向つて道はん。」時に僧有り、曰く、「特牛兒を生せり、何を以てか道はざる。」山曰く、「侍者燈を把つて來れ。」其の僧、身を抽んで、衆に入る。雲巖、師に擧似す。師曰く、「其の僧御つて會す。只だ是れ肯ふて禮拜せず。」

雲巖、鴻山に到る。鴻、問ふ、「大保任底の人、那箇か是れ一か是れ二か。」巖曰く、「一機の絹、是れ一段か、是れ兩段か。」師、聞いて曰く、「人の樹を接ぐが如し。」

一日、雲巖、衆に謂つて曰く、「箇の人家の兒子有り、問著するに道不得底有ることなし。」師問ふ、「他の屋裏に多少の典籍か有る。」巖曰く、「一字も也た無し。」師曰く、「爭か恁麼に多知なることを得たる。」巖曰く、「日夜會て眠らず。」師曰く、「一段の事を問はん、還つて得るや否や。」巖曰く、「道ひ得ば御つて不道。」

雲巖鞋を作る次、師問ふ、「師に就いて、眼睛を乞ふ、未審し還つて得るや也た無や。」巖曰く、「汝底、阿誰にか與へ去る。」師曰く、「良价は無し。」巖曰く、「設し有るも汝什麼の處に向つてか著けん。」師、無語。巖曰く、「眼睛を乞ふ底、是れ眼なりや否や。」師曰く、「眼に非ず。」巖之を咄す。

雲巖、尼衆に問ふ、「汝が爺在りや。」云く、「在り。」巖曰く、「年多少ぞ。」云く、「年八十。」巖曰く、「汝、箇の爺有り、年八十ならず、還つて知るや否や。」云く、「是れ恁麼にし來る者なることなしや。」巖曰く、「猶ほ是れ兒孫なること有り。」師曰く、「直に是れ恁麼にし來らざる者も亦是れ兒孫。」

院主石室に遊んで回る、雲巖問うて曰く、「汝去つて石室の裡許に到り、甚麼と爲てか便ち回る。」

① 通事舍人。取次の者、支度といふ程の意。

② 不敢。いやどういたしましてといふ程の意。

③ 夜參。又は小參、晚參ともいひ、夜間、師家大衆を集めて訓誨辯達するをいひ、場所は定所なく、寢堂、法堂等、晚參牌を懸けて之れを報す。

④ 垂語。垂詢に同じ、師家の學人に對して教示の語を垂るなり。

⑤ 一句子。子は助字也。

⑥ 特牛。獸三歳を特といふ、特牛は牛の子なり。

⑦ 大保任底の人。佛法を保護保持する大人の意で、佛道の極意に到達したる人。

⑧ 眼睛。目の玉のこと、如來因地に於て人の求めに因つて眼を施せし事あるよりして、今新く曰ひ來りしなり。

⑨ 咄。叱と同じく人を呵し罵る時に發する語。

⑩ 院主。百丈清規に「都寺、監寺、副寺等を院主といひ、一院の萬端を管理す」と。

主、無語。師代つて曰く、「彼の中、已に人有り占め了る。」巖曰く、「汝更に去つて作麼かせん。」師曰く、「人情斷絶し去る可からず。」

師、雲巖を辭す、巖曰く、「甚麼の處にか去る。」師曰く、「和尚を離ると雖も、未だ所止を卜せず。」曰く、「湖南に去ること莫しや。」師曰く、「無し。」曰く、「郷に歸り去ること莫しや。」師曰く、「無し。」巖曰く、「早晚卻回す。」師曰く、「和尚の住處有らんを待つて即ち來らん。」曰く、「此より一別、相見を得難し。」師曰く、「不相見を得難し。」

師行くに臨んで又雲巖に問ふ、「和尚百年の後、忽ち人有つて、還つて師の眞を、遷得するや否やと問はんに、如何か祇對せん。」巖曰く、「但だ伊れに向つて道へ、只だ這箇是と。」師、沈吟す。巖曰く、「價開黎、箇の事を承當せば、大いに須らく審細にすべし。」師、猶ほ疑に涉る、後水を過ぎて影を視るに因つて、大いに前旨を悟る。因に偈あり、

「切に思む他に從つて覓むることを。 迢々として我れと疎なり。我れ今獨り自ら往く。處々渠に逢ふことを得たり。渠今正に是れ我れ。我れ今是れ渠にあらず。應に須らく 與麼に會して、方に始めて如々に契ふべし。」

師、魯祖寶雲禪師に到り參す、禮拜して侍立し、少頃あつて出づ、卻つて再び入り來る。祖曰く、

「祇恁麼、祇恁麼、所以に此の如し。師曰く、「大いに人有りて肯はず。」祖曰く、「作麼汝が口辯を取らん。師、便ち禮拜す。乃ち奉侍すること數月。僧、魯祖に問ふ、「如何なるか是れ不言の言。」祖曰く、「汝が口甚麼の處にか在る。」云く、「口無し。」祖曰く、「甚麼を將てか飯を喫す。」僧、無對。師代つて曰く、「他飢ゑず、甚麼の飯をか喫せん。」

師、南源(道明禪師)に到る、方に法堂に上る。源曰く、「已に相看し了れり。」師、便ち下り去る。明日に至つて卻つて上り、問うて曰く、「昨日已に和尚の慈悲を蒙る、知らず什麼の處か是れ某甲と相看の處。」源曰く、「心々無間斷にして、性海に流入す。」師曰く、「幾ど放過す。」

師、南源を辭し去る。源曰く、「多く佛法を學んで、廣く利益を作せ。」師曰く、「多く佛法を學ぶことは即ち問はず、如何なるか是れ廣く利益を作すこと。」源曰く、「一物も違ふこと莫き即ち是なり。」

師、樟樹に到る、樟樹問うて曰く、「來つて什麼をか作す。」師曰く、「和尚に親近す。」樟樹曰く、「若し是れ親近せば、兩片皮を動かすことを用ひて作麼かせん。」師無對。(曹山後に聞いて乃ち云く、「一子親み得たり。」)

師初め 京兆の興平和尙を禮す。平曰く、「老朽を禮すること莫れ。」師曰く、「

國譯洞山悟本禪師語錄

① 迢々。遙は親と同じ、象(かたどる)なり。
② 價開黎。洞山真价を指す。
③ 與麼會。新様(に)會得してといふこと。
④ 魯祖寶雲。魯山の寶雲禪師、馬祖道一の嗣。

⑤ 南源。道明禪師、馬祖道一の法嗣。
⑥ 法堂。說法堂の義にして、大法を闡揚し、宗旨を演說する等、一切の法式を行ふ處をいふ、現今寺院の本堂之れなり。
⑦ 相看。相見と同じ。
⑧ 性海。佛性海の義、平等一如の涅槃を大海に喩へたるなり。
⑨ 樟樹。神州樟樹慧覺禪師、藥山惟嚴に嗣法す。
⑩ 兩片皮。唇のこと、徒らに口舌を弄することを兩片皮を動かすといふ。
⑪ 京兆の興平和尙。京兆は京尹と同じく首府のこと、興平和尙は馬祖道一の法嗣。

く、「老朽にあらざるを禮す。」平曰く、「渠禮を受けず。師曰く、「渠曾て禮せず。師卻つて問ふ、「如何なるか是れ古佛心。」平曰く、「既に汝が心是なり。師曰く、「然も此の如くなりと雖も、猶ほ是れ某甲が疑處。」平曰く、「若し恁麼ならば即ち木人に問取し去れ。師曰く、「某甲に一句子有り、諸聖の口を借らす。」平曰く、「汝試みに道へ看ん。師曰く、「是れ某甲にあらず。」

師、平和尙を辭す。平曰く、「甚麼の處にか去る。師曰く、「流に沿ふて定止すること無し。」平曰く、「法身流に沿ふか、報身流に沿ふか。」師曰く、「總に此の解を作さず。平、乃ち掌を拊つ。(保福云く、「洞山自ら是れ一家。」乃ち別して云く、「幾人をか覓め得たる。」)

師、薯山に到る、薯曰く、「汝已に一方に住す、又這裏に來つて作麼かせん。師、對へて曰く、「良价疑を奈何ともすること無し、特に來つて和尙に見ゆ。」薯、「良价」と召す、師、應諾す。薯曰く、「是れ什麼ぞ。」師、無語。薯曰く、「好箇の佛、只だ是れ光燭無し。」

師、泐潭に在つて、初首座の語あることを見るに曰く、「也太奇、也太奇、佛界、道界不思議。師、遂に問うて曰く、「佛界道界をば即ち問はず、

①法身。無色無形の理佛のこと、所謂眞如を人格化して法身といふ。
 ②報身。因位の順行に酬報して成就したるもの萬徳圓滿の佛身をいふ。
 ③保福。從展禪師、福州の人、雪峰義存に嗣法す。
 ④薯山。慧超禪師、支那吉州の人、湖南の如會に嗣法す。
 ⑤泐潭。支那江西省鄱陽湖の附近なる洪州に在り、古より禪僧多く此の地に住して化門を張れり。
 ⑥初首座。初首座の譯未だ詳ならず、傳燈錄には「初上座」に作る。
 ⑦道界。六道界のこと、衆生界にして佛界に對す、界とは種

祇佛界道界と説く底の如き、是れ甚麼人ぞ。初、良久無對。師曰く、「何ぞ速かに道はざる。」初曰く、「争ふことは即ち得ず。師曰く、「道ふとも也た未だ曾て道はず、甚麼の争ふことは即ち得すと説かん。」初、無對。師曰く、「佛と道と俱に是れ名言、何ぞ、教を引かざる。」初曰く、「教に甚麼とか道ふ。」師曰く、「意を得て言を忘す。」初曰く、「猶ほ教意を將て心頭に向はば、病を作すことぞ在らん。」師曰く、「佛界道界と説く底の病大か小か。」初、又無對。次の日忽ち遷化す。時に師を稱して首座を問殺する。价となす。

師、密師伯と經由する次、谿に菜葉を流すを見る、師曰く、「深山、人無くんば何に因つてか菜有らん、流に隨はゞ、道人の居あること莫からんや。」乃ち共に議して草を撥ふ。谿行五七里の間、忽ち羸形異貌の人を見る。乃ち龍山和尙是れなり(亦隱山とも云ふ)。行李を放下して問訊す。龍曰く、「此の山に路無し、閻黎何れの處よりか來る。」師曰く、「路無きとは且く置く、和尙何れよりか入る。」龍曰く、「我れ雲水より來らず。師曰く、「和尙此の山に住すること多少の時ぞ耶。」龍曰く、「春秋に涉らず。師曰く、「和尙、先に住するか、此の山、先に住するか。」龍曰く、「知らず。師曰く、「

①族、應等の義あり。
 ②教。佛教の時。
 ③良价。良价の時。
 ④密師伯。神山僧密禪師、雲巖慧成禪師の法を嗣ぐ、洞山とは法眷にして山常に師伯と呼ぶ、故に世に密師伯といふ。
 ⑤經由。道を歩行すること。
 ⑥道人。佛道を修する人。
 ⑦羸形。羸はもと羊の瘦せることなれど、轉じて人にも用ふ。
 ⑧龍山。支那潭州の人、又隱山ともいふ、馬祖道に嗣法す。
 ⑨行李。行装の資子、荷物のこと。
 ⑩問訊。他に對して合掌低頭して、語を述ぶることなるも、現今にては但た單に合掌致意することはいふ。
 ⑪人天。人間界天上界の時。
 ⑫閻黎の泥牛。有無迷悟生佛正偏等の待對の見が、悉く眞實

く、「甚麼として知らざる。」龍曰く、「我れ人天より來らず。師曰く、「和尚何の道理を得てか便ち此の山に住す。」龍曰く、「我れ兩箇の泥牛、鬪つて海に入るを見る、直に今に至つて消息を絶す。師、始めて威儀を具し、禮拜して即ち問ふ、「如何なるか是れ主中の賓。」龍曰く、「青山、白雲を覆ふ。師曰く、「如何なるか是れ主中の主。」龍曰く、「長年、戸を出でず。師曰く、「主賓相去ること幾何ぞ。」龍曰く、「長江水上の波。」師曰く、「賓主相見何の言説か有る。」龍曰く、「清風白月を拂ふ。」師辭し退く。

師、一日、密師伯と水を渡る。師曰く、「錯つて脚を下すこと莫れ。」伯云く、「錯たば即ち過ぐることを得ず。」師曰く、「錯らざる底の事、作麼生。」云く、「長老と共に水を過ぐ。」

師、密師伯と茶園を鋤く。師、鋤頭を擲下して曰く、「我れ今日困す、一點の氣力も也た無し。」伯曰く、「若し氣力なくんば、争か恁麼に道ひ得ることを解せん。」師曰く、「汝將に謂へり、氣力有る底是なり」と。

密師伯、因に把針する次、師問ふ、「什麼をか作す。」伯云く、「把針す。」師曰く、「把針の事、作麼生。」伯云く、「針々相似たり。」師曰く、「二十年同行して這箇の語話を作す、豈に與麼の工夫有らんや。」伯曰く、「長老又作麼生。」師曰く、「大地、火を發する底の道理の如し。」他日、師に問ふ、「知識通ずる所遊踐せずといふこと莫し、徑截の處、師の一言を乞ふ。」師曰く、「伯の意、何ぞ功を取ることを得たる。」伯、斯れに因つて頓に下語の非常なることを覺る。

師、密師伯と行く次、忽ち白兔の走り過ぐるを見る。伯曰く、「俊なる哉。」師曰く、「作麼生。」伯云く、「大いに白衣の相に拜せらるゝに似たり。」師曰く、「老々大々として這箇の説話を作す。」伯云く、「汝、作麼生。」師曰く、「積代の簪纓、暫時落薄。」

師、密師伯と木橋を過ぐ、師先づ過ぎ了つて、木橋を拈起して曰く、「過ぎ來れ。」伯云く、「价閑黎。」師便ち木橋を放下す。

法性海に歸入するを見たといふので、自分悉くかゝる差別の見を離れてしまつたことをいふ。
威儀。威儀とは、行住坐臥一舉一動善く規矩に今し、人をして畏敬の念を起さしむる容儀をいふ。
主中の賓。正中の偏、平等中の差別といふと同じ。
長江。揚子江の別名。
長老。道眼を具へ智徳ある人の意にして、小比丘より大比丘を尊稱して呼ぶに用ふ。

①把針。裁縫すること。
②同行。同參修行の略。
③徑截。徑は直の意、截は断の意。
④俊。俊快の義、俗に「すばしい」といふ程の意。
⑤白衣。無官下賤なる者ないふ。
⑥簪纓。簪は「かんざし」のこと、纓は「冠のひも」のことにして、轉じて高位高官の人をいふに至る。
⑦落薄。落魄に同じ、「おちぶれる」こと。
⑧三祖。鑑智僧理禪師、禪宗支那相承の第三祖。二祖慧可大師に嗣法す。
⑨信心銘。三祖大師の著、四言一百四十六句、五百八十四字より成る韻語にして、佛祖傳の禪要を述ぶ。
⑩弟子。官人自らをいひしなり。

ん。(法眼代つて云く、「恁麼ならば則ち弟子註せず。」)

師、密師伯と百顔の首禪師の處に到る。顔、問ふ、「甚れの處よりか來る。師曰く、「湖南より來る。顔曰く、「觀察使姓は甚麼ぞ。」師曰く、「姓を得ず。顔曰く、「名は甚麼ぞ。」師曰く、「名を得ず。顔曰く、「還つて事を理むるや也た無や。師曰く、「自ら」庶幕の在る在り。顔曰く、「還つて出入するや否や。師曰く、「出入せず。顔曰く、「豈に出入せざらんや。師便ち拂袖して出で去る。顔、來日、早を侵し、堂に入りて師を召す、師、近前す。顔曰く、「昨日」上座に祇對する話、老僧が意に愜はず、一夜安からず。今請ふ、上座別に一轉語を下せ、若し老僧が意に愜はゞ、即ち粥を開き相伴ふて夏を過さん。師曰く、「却つて請ふ和尚問へ。顔曰く、「出入せずといふ是れ如何。師曰く、「太尊貴生。」顔乃ち粥を開き同じく夏を過す。師、密師伯と行く次、路傍の一院を指して曰く、「裏面に人有り、心と説き性と説く。伯曰く、「是れ誰ぞ。師曰く、「師伯に一間せられて、直に得たり。去死十分。」伯曰く、「心と説き性と説く底は誰ぞ。師曰く、「死中活を得たり。」

- ①百顔。一本に柏巖に作る、支那鄂州柏巖明哲禪師、藥山惟顔に嗣法す。
- ②觀察使。各地に遣はして政治の狀態官吏の勤怠などを觀察させたる使者をいふ。今洞山「湖南より來る」と答へしを以つて、抑草の意を含めて洞山を呼ぶに此の語を以てしたるなり。
- ③庶幕。幕僚と同じ、屬官のこと。
- ④上座。梵に悉多思羅、又長老とも譯し、上座の義にして沙門中の老宿を尊稱せる名なり、現今には出家得度後入衆したる者を皆上座と呼ぶ。
- ⑤夏。夏安居のこと、夏季九旬なり。
- ⑥太尊貴生。生は助字、太は「はなはた」と訓す。えらい者也。
- ⑦去死十分。死にきつたといふこと。

歌頌

寶鏡三昧歌

如是の法、佛祖密に附す。汝今之を得たり。宜しく善く保護すべし。銀盤に雪を盛り、明月に鷺を藏す。類して齊しからず。混する則んば處を知る。意言に在らざれども、來機亦赴く。動すれば窠臼を成し、差へば願佇に落つ。背觸共に非なり。大火聚の如し。但文彩に形せば、即ち染汚に屬す。夜半正明、天曉不露。物の爲に則となる。用ひて諸苦を抜く。有爲に非すと雖も、是れ語無きにあらず。寶鏡に臨んで、形影、相視るが如く、汝是れ渠にあらず。渠正に是れ汝。世の嬰兒の、五相完具す

圓澤洞山悟本禪師語錄

- ①歌頌。歌頌は共に韻語の一體なり。
- ②寶鏡三昧歌。本歌は四言九十四句三百七十六字より成り、主として偏正回互の妙旨を説き、同時に修行の方法、化導の要旨をも示さる。古來禪門五家七宗の間に重要視され、特に曹洞宗にては最も之を重じ、朝夕誦誦されつゝあり、寶鏡三昧の語義前註に詳かなり、看よ。
- ③如是の法。佛祖の大法をいふ。
- ④密。親密の義。
- ⑤銀盤に雪。銀盤、雪、共に同一白色、然れども同一物に非ず、平等差別正偏回互の旨に喩ふ。

- ①明月に鷺。銀盤に雪を盛ると同様なり。
- ②來機。法を問ひに來る人のこと。
- ③窠臼。土中の穴のこと。
- ④願佇。思慮定まらず、進退決せざる義。
- ⑤五相。起、住、去、來及び語なり。
- ⑥嬰兒。和々。嬰兒の言葉の分明ならざるをいふ。
- ⑦重離六及。偏正回互、重離とは易の離の卦を重ねたのないう。一及、三離、三三重離。六及の及は易の葭木一本のこと、離の卦は三及であるが之を重ねれば六本になる故六及といふ。偏は明、差別、事等

るが如し。不去不來、不起不住。婆々和々、有句無句。終に物を得ず。語未だ正しからざるが故に、重離六爻、徧正回互。疊んで三と成り、變じ盡きて五と成る。莖草の味の如く、金剛の杵の如し。正中妙挾、敲唱雙べ舉ぐ。宗に通じ途に通ず。挾帶挾路、錯然なる則んば吉なり。犯忤すべからず。天真にして妙なり。迷悟に屬せず。因縁時節、寂然として昭著す。細には無間に入り、大には方所を絶す。毫忽の差、律呂に應せず。今頓漸あり。宗趣を立するに縁つて、宗趣分る。即ち是れ規矩なり。宗通じ趣極るも、眞常流注。外寂に内搖くは、繋げる駒伏せる鼠。先聖之を悲んで、法の檀度となる。其の顛倒に隨つて、緇を以て素となす。顛倒想滅すれば、

に當り、正は時、平等、理等に當る、此の二者は互に不二なるを回互といふ。龍の八卦若し重れて六爻を得れば自ら回互の象あり、徧正回互の義に似たるをいふ。
① 疊三疊五。重離の六爻若し疊めば巽の三爻三となる、而れば本の離三の卦と合すれば都合三卦となる、これを疊三といふ。而して重離を疊んで得たる兌の卦の下は自ら巽の卦となる、次に兌を上三三を得、巽を上三三を得、并ぶれば風澤中孚三三を得、斯くの如く離の卦二つに依り五種の卦を成す、而して更に疊まんとすれば、再び重離の卦となる故に、變じ盡きて五となる」といふなり。
② 莖草の味。一名五味子といひ、此草の實は五味を具ふ、

一より五を此じ五は即ち一に歸す、五一不二の理を示す。
③ 金剛の杵。五結の其の中は一木にして兩端は各々五に分るなり、五一不異の理を示す。
④ 正中妙挾。平等の本體の中に自然に千差萬別の妙用を挾持して居るをいふ。
⑤ 敲唱雙べ舉ぐ。學人が師家は法を問ひ、師家が之に答ふるをいふ。
⑥ 宗、途。宗は「むね」と訓じ、俗に云ふ、目的のこと、途は其の目的に達する手段をいふ、途中の意なり。
⑦ 挾帶挾路。挾帶して宗に通じ、挾路にして途に通ずるの意。
⑧ 錯然。交錯敬慎の貌。
⑨ 天真。造作にあづからず、變更なきの意。
⑩ 律呂。支那音樂の六律六呂のこと。

① 背心自ら許す。古轍に合はんと要せば、請ふ、前古を觀せよ。佛道を成するに垂として、十劫樹を觀す、虎の缺けたるが如く、馬の馬の如し。下劣あるを以て、寶几珍御、驚異あるを以て、狸奴白牯、弄は巧力を以て、射て百歩に當つ。箭鋒相値ふ。巧力何ぞ預らん。木人方に歌ひ、石女起つて舞ふ。情識の到るに非ず、寧ろ思慮を容れんや。臣は君に奉し、子は父に順す。順せざれば孝に非ず、奉せざれば輔に非ず。潛行密用は、愚の如く魯の如し。只だ能く相續するを、主中の主と名づく。
② 玄中銘 并に序
竊に以れば、絶韻の音は、玄唱を假つて以て宗を明し、入理の深談は、無功を以て旨を會す。體用を混然し、偏圓を宛轉す。亦猶は

① 頓漸。慧能門下を南頓と稱し、神秀門下を北漸と稱し、相對峙せるを指す、頓は一超直入如來地の意、漸は漸々修學悉當成佛の意。
② 宗趣。宗は宗旨の義、趣は趣向の義にて、宗旨に趣向する道程をいふ。
③ 眞常流注。眞如常住の境界に迷するも、微細の煩惱は絶えず流れ出でて止まぬこと。
④ 法の檀度。檀度とは具には檀那波羅密といひ、檀那は布施、波羅密は度彼岸と譯す。
⑤ 緇、素。緇は黒色、素は白色、即ち有無、色空、淨穢、苦樂等のことをいふ。
⑥ 背心。自己の心に領會すること。
⑦ 十劫樹を觀す。大通智度佛將に佛道を證得せんとするも能はず、更に十劫の同樹下に端

坐し、觀念して漸く佛果を證得せしむるをいふ。
⑧ 虎の缺。「玄義」に虎の人を傷づくること一度すれば、耳に一缺を生ずといふ、缺は傷の意。
⑨ 馬の駒。駒は束羈なり、馬の羈束を受けて自由ならぬをいふ。
⑩ 寶几珍御。金銀珠玉等にて飾り立てし几、几は足をのせかかる道具なり、御は天子御用ひらるゝ衣食のこと、珍御は衣服調度の美なるを云ふ。
⑪ 弄。弓の名人の名をいふ。
⑫ 潛行密用。潛は「ひそむ」と訓じ、表面より見えぬこと、密は秘密、秘密の義、外に神異奇行の相をあらはさず、内に深沈穩密の行をたつをいふ。
⑬ 玄中銘。銘は文の一體にして物の功を記銘し、又警戒するの辭なり、今、玄銘は四言五

① 刃を投じ、斤を揮つて、輪扁手に得るがごとし。虚玄犯さず、廻互傍参す。② 鳥道に寄つて寥空なり。立路を以て該括す。然も空體寂然なりと雖も、群動に乖かす。有句中の無句に於て、妙體前に在り。無語中の有語を以て、廻塗復た妙なり。是を以て用にして動かす、寂にして疑らず。清風草を偃せども搖かす。皎月天に普けれども照すに非ず。③ 蒼梧丹鳳を棲ましめず、激潭。豈に紅輪を墜さんや。獨にして孤ならず、無根にして永固なり。雙つながら明にして韻を齊しうし、事理俱に融ず。是れを以て、高く雪曲を歌へば、和する者還つて稀なり。④ 布鼓軒に臨む、何人が鳴撃せん。旨、妙に達せざれば、幽微を措き難し。儻し或は用にして功なく、寂にして虚しく照し、事理雙べ明し、體用滯無くんば、玄中の旨、其れ斯に在り。

大陽門下、日々三秋。明月堂前、時々九夏。森羅萬象、古佛の家風。碧落青霄、道人の活計。靈苗瑞草、野父芸るを愁ひ、露地の白牛、牧人牧ふに懶し。龍、枯骨に吟じて、異響聞き難く、木馬嘶く時、何人が聴くと道はん。夜明簾外、古鏡徒らに耀き、空王殿中、光光那ぞ照さん。

十六句、二百二十四字の韻語。洞山、學人を警醒するたに詠出する所なり。

⑦ 無功。功動五位中の功々に同じ、無功は大切にして無我の往來、脱落の境界をいふ。

⑧ 投刃。揮斤、輪扁共に莊子にある故事。

⑨ 鳥道。玄路。前注を見よ。

⑩ 蒼梧丹鳳。鳳凰は蒼梧に棲むもの、然るに棲まずといふ、其の位を守らざるに喩ふ。

⑪ 激潭。紅輪は大陽のこと、大陽は激潭に沈むやうに見ゆるけれども、遂に水中に没するにあらず、是れ亦停滯せざるに喩ふ。

⑫ 雪曲。陽春白雪は最も高尚の曲にして、人の之れに和する者甚だ少し。

⑬ 布鼓。布で造つた大鼓、故に鳴らない。

⑭ 三秋。秋三ヶ月をいふ。

激源湛水、尚ほ孤舟に棹し、古佛の道場、猶ほ車子に乗す。無影樹下、永劫清涼。觸目荒林、年を論じて。放曠たり。舉足下足、鳥道殊なること莫し。坐臥經行、玄路にあらざることを莫し。向つて道ふ去ること莫れと、歸り來れば父に背く。夜半正明、天曉不露。先行到らず、末後甚だ過ぐ。没底の船子、無漏にして堅固なり。碧潭の水月、隱々沈め難し。青山白雲、無根にして卻つて住す。峰巒秀異なれども鶴、機を停めず。靈木迢然たれども、風依倚すること無し。徒らに布鼓を敲く、誰か是れ知音。空を撃つて聲を成す、何人が掌を撫せん。胡笳曲子は、五音に墮ちず。韻、青霄に出づ、君が吹唱するに任す。

新豊吟

古路坦然、誰か足を措かん。人の還郷の曲を唱ふることを解する無し。清風月下、株を守るの人、涼免漸く遙にして春草綠なり。天香襲うて、芬馥を絶す、月色凝つて照觸するに非ず、玄を行するも猶ほ是れ崎嶇に渉る。妙を體すれば茲に因つて延足に背く。殊に然らず何ぞ展縮せん。縦ひ然ることを得るも混泥の玉なり。獅豸欄を同じて辨する者嗤

① 九夏。一夏九句のこと。

② 活計。一なりはひと訓じ、境界の義。

③ 露地の白牛。法華譬喩品の説に基く、無漏實相の妙智に譬へしもの。

④ 夜明簾。初學記に曰く、秦金玉を以て簾となし、珠璣を以て箔となす、晝夜長に明なり云々し。

⑤ 車子。子は助字。

⑥ 放曠。放は縦なり、曠は空なり潤なり。

⑦ 没底の船子。没は絶なり無なり、子は助字。無底船といふに同じ、底なき船のことにて、一切執著を離れたる解脱の意に用ふ。

⑧ 無漏。無爲の義なり、造作變遷に渉らざるをいふ。

⑨ 天香。有るが如く、無きが若くはつきりせぬこと。

⑩ 迢然。高き貌。

ふ。薰蕕處を共にして、須らく郁しきことを分つべし。長天の月は巖谷に徧く、不斷の風松竹を偃す。我れ今此に到つて、從容たることを得たり。吾が師は我が隨逐することを叱す。新豐の路、峻しくして仍ほ敵かなり。新豐の洞湛然として沃ぐ。登る者は登つて動搖せず。遊ぶ者は遊んで急速すること莫し。荆榛を絶し、蕪蕪を罷む。馨香を飲み清肅を味ふ。重を負ふて登陸し、屣を脱いで廻る。他を看るに早く是れ空しく、擔翰す。來つて肩に親して芳躡を履む。至つて心を散ましめ去つて目を凝す。亭堂有りと雖も到る人稀なり。林泉長せず尋常の木。道、鏽離せざれども、曲親なるに非ず。跣人歩を進む何ぞ、瞻矚せん。工夫到らざれば方圓ならず。言語通せざれば眷屬に非ず。事

①知音。眞に心を知り合ふたる女をいふ、知己に同じ。
②胡笳の曲。予は例の助字、胡笳の曲とは蘆葉を巻きて吹く笛の曲、胡子の吹く笛なり、その曲は尋常の音楽と異なり、音律に入らざるものなるより、佛祖相傳の宗風、判釋等の外なるに喩ふ。
③五音。音律にて宮、商、角、徵、羽といふ。
④新豐吟。吟は歌と殆んど同意、洞窟新豐山に於ける作なるが故に此の名あり、七言三十六句の古體にして、前の賣饅三昧歌、玄中銘等と同調なり。
⑤古路。佛祖の履行せる道のこと、即ち佛祖の行へる大道をいふ。
⑥遊蕩曲。本家終に歸り穩坐する歌曲といふこと、即ち中途に住著せず、一色空邊に止まり續なり。

らざることを。株を守るの人。韓非子に出づ、愚人の意、宋人田を耕すに、兔あり來つて田中の株に觸れて死す、他の宋人之を見、耕を釋め株を守つて兔の來り死するを待つに、卒に得ることなかりきといふ。
⑦涼兔。涼月に同じ。
⑧芬蘭。かたること。
⑨時。山崎平かならざる貌。
⑩辨。麝香の時の瑞獸にして、辨は雄、豕は雌なり、雌雄同形にして辨じ難し。
⑪薰蕕。香のよき草と惡しき草となり。
⑫從容。舉動詳密、閑雅の貌。
⑬敵。淨と同じ。
⑭湛然。水の澄んで、少しも曇かざる貌。
⑮荆榛。いばらなどの雜草の生ひしげれるところ。
⑯蕪蕪。新は切なり、斷は斬な

然らすんば、詎ぞ冥旭せん。我れ然らすんば何ぞ斷續せん。感愍に爲に報す道中の人。若し玄關を懸はす即ち拘束せられん。

綱要頌 三首

① 敲唱俱行
② 金鉞雙鎖備り、叶路隠かに全く該ぬ。寶印空に當つて妙なり。重重錦縫開く。
③ 金鎖玄路
交互す明中の暗。功齊しうして轉た難きことを覺ゆ。力窮つて進退を忘れ、金鎖網、鏡々。不墮凡聖。
事理俱に涉らす。回照絶だ幽微。風に背いて功拙なし。電火、燦として追ひ難し。
④ 五位
正位卻つて偏、偏に就いて辨得すれば、是れ

① 敲唱俱行。敲は則なり。
② 曲線。曲つて居ること、親とばうなじなり。
③ 玄關。春秋戰國時代の楚の都、荊州府。
④ 懸。共に「みる」と訓す。
⑤ 玄關。玄妙なる道に進み入る辯詰の意、轉じて一般に家の入口のこと。
⑥ 綱要。宗旨の大綱的要なり、今洞山之を分つて三種となし、頌を以てあらはすなり。
⑦ 敲唱俱行。敲は學人が問話の爲めに師家の門を敲きて教を乞ふこと。唱は師家が學人の問話に對して答ふること。俱行は俱に行はれて親密なるをいふ、即ち敲唱俱行は學人と

師家との境地親密にして二面なきをいふなり。
⑧ 金鉞。金鉞雙鎖備は、正偏、智行雙へ備はりて圓なることに喩ふ。
⑨ 金鎖玄路。金鎖は佛傳法縛をいふ、菩提涅槃は黄金の美なるが如きも、之に縛せらるれば苦むが故に、金鎖といふ、玄路は玄々微妙の路にして向上の一路をいふ、されば佛に縛せられ法に縛せられ、又向上の一路に滞るは即ち其の身の束縛なることを示すがこの頌なり。
⑩ 鏡々。覆ひ隠す貌。
⑪ 不墮凡聖。凡聖は凡夫聖人のこと、凡聖、生佛迷悟、是非等の二見の生ずるはこれ三界輪廻の根本の故に、一切の對待を絶し、二見に墮せざれば三界を出離し、涅槃寂靜を示すがこの頌なり。

① 兩意を圓にす。偏位偏なりと雖も、亦兩位を圓にす。緣中に辨得すれば、是れ有語中の無語。或は正位中來なるものあり、是れ無語中の有語。或は偏位中來なるものあり、是れ有語中の無語。或は相兼帶來なる者あり、這裏有語無語を説かず。這裏直に須らく正面にして去るべし。這裏圓轉ならざることを得ざれば、事須らく圓轉すべし。然れば途にあるの語は總に是れ病なり。夫れ當人先づ須らく語句を辨得して、正面にして去るべし。有語是れ恚麼に來り、無語是れ恚麼に去る、作家中、言語無きにあらず、有語無語に涉らず。這裏を喚んで兼帶の語と作す、全く的的なし。他の智上座、遷化の時に臨んで入に向つて道ふ、「雲巖有ることを知らず、我れ悔らくは當初に伊に向つて説かざりし

② 標。かがやく観。
③ 五位。五位に四種あり、正偏五位、功勳五位、君臣五位、王子五位これなり、但し後の二は前二を譬喩的に説明したるものなり、この五位なる所説極めて簡なれども、禪宗哲學の大意を概括して餘蘊なければ、臨濟の四料簡と共に古來禪門に於て廣く用ひられ、參禪の要術、工夫の標準として重要なものなり。
④ 兩意を圓にす。兩意とは正位と偏位をいふ、正は平等なり、眞如なり、萬法の本體なり、偏とは差別なり、個々獨立の萬法の現象をいふ。現象せる萬物個々の外に本體なきの意を示す、これを正中偏とも偏中正ともいふなり。
⑤ 中來。證に入る過程をいひしものにして直に本體界を徹見して大悟するものと、個々萬

有の道理を究めて悟入するものとあり、前者を正位中來（正中來）後者を偏位中來（偏中來）といふ。
⑥ 相兼帶來。普通之を兼中到といふ、正偏、來至悉も聖嚴なく互に融攝し、自由自在の妙用を顯現する位なり、兼帶は圓滿總收の意にて前四位は只だ是れこの一位の所變なりとす。
⑦ 蔡子。蔡は法の義、法子と云ふも同じ。
⑧ 異類中行。異類即ち畜生の中に行くの意、發願利生の大乗の菩薩が成佛得脱の後、涅槃に安住せず、生死の迷界に却來して、六道に輪廻して一切有情を濟度するをいふ。
⑨ 密閑黎。密師伯のこと。
⑩ 正中偏。正は平等一如の本體界をいふ、宇宙の本體は常住不變にして時間空間を超越

ことを。然も是の如くなりと雖も、且く樂山の蔡子に違せず」と。看よ他の智上座、合に恚麼生か老婆なる。南泉喚んで、異類中行と作す、且つ密閑黎知らず。

五位頌 五首

① 正中偏。三更 初夜月明の前。怪むこと莫れ相逢ふて相識らざることを。隱々として猶ほ懐く舊日の嫌。
② 偏中正。失曉の老婆古鏡に逢ふ。分明觀面更に他無し。更に頭に迷ふて猶ほ影を認むることを休めよ。
③ 正中來。無中路有り塵埃を出づ。但だ能く當今の諱に觸るゝこと莫くんば、也た勝る前朝斷舌の才。
④ 兼中至。兩刃鋒を交へて避くることを須

し、因果の範疇を以て律すべからず、即ち眞空なり、然らば全く無相なるやといふに然らず、吾人の眼前に顯現する現象界の事物一々本體の現れにして、萬有の外に別に眞如あるなし、是の道理を正中偏といふ、偏とは偏頗の意にして起滅變現極りなき差別の現象界をいふ。
② 三更。よなき、夜の十二時。
③ 初夜。夕方より八時頃迄のこと。
④ 隱々。不明朗の貌。
⑤ 嫌々。一に厭に作る。
⑥ 偏中正。是は前の正中偏を反對に云ひ來りしに過ぎず、千變萬化の差別界即平等の實在界なりとす。
⑦ 失曉。破曉と同じ、あけがたのこと。
⑧ 觀面。猶ほ親見といはんが如し。

① 正中來。正偏に基づける修行の工夫を明せるものなり、即ち其の究極は正偏兼帶の一位にあれども、其に到達する功夫に於て、正中より來るあり、偏中より至るありて自ら二方面あり、今兼中至といふは即ち偏中至のことなり。
② 當今。今上陸下のこと。
③ 前朝斷舌の才。隋の時辯士あり、李知章と名づく、辯論ある毎に衆皆舌を結（ま）く、故に時人之心を號して斷舌の才とす。
④ 火裏の蓮。火中の蓮のことに喩て、思慮分別の及ばざるに喩ふ。
⑤ 宛然。さながらといふこと。
⑥ 衝天の氣。一本に冲天と作る。
⑦ 兼中到。正偏等には毫も曇礙することなく、互に融攝して蹤跡を絶し、自由自在の妙用

ひす。好手は猶ほ火裏の蓮の如し。宛然として自ら衝天の氣有り。象中到。有無に落ちず誰か敢て和せん。人人盡く常流を出でんと欲す。折合して還つて炭裡に歸して坐す。

功勳頌(異本、上堂の次、問話の僧に示す頌に作る。)

問ふ、「如何なるか是れ向。」師曰く、「力を得て須らく飽くことを忘すべし、糧を休めて更に饑ゑず。」

聖主由来。帝堯に則る。人を御するに禮を以て。龍腰を曲ぐ。有る時間市頭邊を過ぐれば、到る處文明にして。聖朝を賀す。

問ふ、「如何なるか是れ奉。」師曰く、「只だ朱紫の貴きを知つて本來人に學負す。」

淨洗濃粧阿誰が爲ぞ。子規聲裏人を勸めて歸らしむ。百花落ち盡きて啼いて盡くること無し。更に亂峯深き處に向つて啼く。

問ふ、「如何なるか是れ功。」師曰く、「手を撒して端然として坐す、白雲深き處問なり。」

枯木花開く。劫外の春。倒に玉象に騎つて麒麟を趁ふ。而今高く隠る千峰

の外。月皎く風清し好日の辰。

問ふ、「如何なるか是れ共功。」師曰く、「素粉跡を沈め難し、長安久しく居らす。」

衆生諸佛相侵さす。山は自ら高く水は自ら深し。萬別千差底事をか明す。鷓鴣啼く處百花新なり。

問ふ、「如何なるか是れ功功。」師曰く、「混然として諱む處なし。此の外更に何をか求めん。」

頭角幾かに生すれば已に堪へず。心を擬して佛を求む、好し、羞慚するに。迢々たる空劫人の識る無し。南に向つて五十三を詢ぬるを肯はんや。

王子頌 五首

誕生

天然の貴胤本功に非ず。徳、乾坤に合くして

を顯現する位を云ふ。自福生佛、迷悟修證の論すべきなき境界なり。

功勳頌。功勳五位のことにして功勳五位とは、問、奉、功、共功、功々をいふ。果實則れ實踐哲學の標準たるべきものにして、功の進修を明かしたるものなり、其の一々に就いては前註を見るべし。

帝堯。支那古代の皇帝のこと、幾天下を治むること五十年、天下の治まるか治まらざるを知らずと云ふ、世之を無爲にして化すと稱す。

龍腰。天子の腰を尊んで云ふなり、龍腰と云ふに例す。

文明。世の開け行くに云ふ。

聖朝。聖天子の朝廷といふこと。

學負。學は音「さい」、罪と同字、或「華」の寫誤ならん乎、事負はそむくの意にて、孤負

と同意。杜鵑のこと、又鳴聲より不如歸とし書く。

劫外春。劫外とは成住壞空四劫の外といふことにて、陰陽不到の春光、即ち常住不變の別天地の意。

素粉。白き粉のことにて、おしろいのこと。

長安久しく居らす。長安は支那秦、漢、唐時代の帝都にして、最も繁華なる地なり、されど久しく住すれば却つて都會の惡風に染むが故に、久居すべからずといふ、是れは向上法身邊に住著すれば、却つて是れ病となるが故に、其の位を轉じて向下に却來すべきに喩ふ。

鷓鴣。鴉に似て稍や大、支那の南方に産し、一名越雉といふ。

進々。はるかなる貌。

南に向つて五十三を詢ぬ。華嚴經入法界品に出づ、普賢童子南方に向ひ、德雲比丘に參じて後、展轉して普賢菩薩に至る迄百十城を經、五十三の善知識に參すとあり、つまり修行行脚といふことなり。

王子頌。王子五位頌のことなり、本録之を載すと雖も、古來作者に異説あり、或は洞山と云ひ、或は曹山と云ひ、又或は石霜なりといふ、但しこは偏正五位に倣ひ、王子の譬喩を以て修行の歷程を説けるものなり。

誕生。誕生王子のこと、本願國王の正嫡に生れ出でたる太子にして、善人の初發心の時、直ちに正覺を成じ、少しし功用を假らすして佛果位に至ることを示す、正中來に近し。

普漢。普元と同じ、おほざらのこと。

青勢隆なり。始末一期雜種無し。宮を六宅に分つて它宗にあらず。上に和し下に睦じうして陰陽順ひ、共氣連枝、器量同じ。誕生王子の父を識らんと欲せば、鶴、^①雲漢に騰つて銀籠を出づ。

◎朝生

苦學情を論じて世群ならず。出で來つて凡事已に倫を超ゆ。詩は五字を成す。三冬の雪。筆は分毫を落す四海の雲。萬卷の積功聖代を彰し、一心の忠孝明君を輔く。^②鹽梅は是れ生れながら知得するにあらず。金榜何ぞ勞せん至勳を顯すことを。

◎末生

久しく巖嶽に棲んで功夫を用ふ。^③草榻柴扉志を守つて孤なり。寸鐵の見聞心自ら委

◎朝生。朝生王子のこと、王宮に生れて臣位に在る太子にして、一度は王位に上り得るも、必ずしも直ちに王位に上るには非ず即ち宰相位なり、吾人の日常修行の功成り、佛果位に到るも必ずしも直ちに佛果位に至るには非ず、漸々修學悉當成佛をいふ、偏中正に近し。
◎三冬。冬の三ヶ月間をいふ。
◎鹽梅。よき程の味に加減すること、轉じて君を輔佐するにいふ。
◎末生。末生王子のこと、天子の末子にして、必ずしも王位に就かざるに非ざるも、專ら臣位に在つて王を輔佐するをいふ、吾人の機根鈍くして容易に佛果に達せざるも、修行の間に傾に成仰することあらんし、專ら菩薩位に在つて衆生を度するをいふ、偏中正に近し。

◎草榻。榻は「ゆか」と訓す、床のこと。
◎衣籠。籠は「かりぎぬ」と訓す、衣籠は着物のこと。
◎三秋の思。待ち遠くして暫時の間も長く感ずること。
◎化生。化生王子のこと、王宮に生れたる王子なれども、全く臣位に在つて衆生濟度の化他門に在るをいふ、吾人が一度回光返照すれば、佛果位に達せらるるも、全く佛たらんとせずして唯だ衆生を教化するをいふ、正中偏に近し。
◎分門。分門の義、又は當面、又は當體などの意に用ふ。
◎内生。内生王子のこと、生れながら天子にして若宮のこと、誕生王子と異なる所は誕生王子は太子の位にあるも、内生王子は生れながら王位にあるをいふ、吾人本末生れな

す。一身の冬夏衣履無し、澄凝として慈看る。三秋の思。清苦して名を高う上哲の圖。業就つて魏科極志に酬ゆ。比來臣相途に當らず。

◎化生

傍帝化を分つて傳持を爲し、萬里の山河政威を布く。紅影の日輪下界に凝り、碧油風冷し暑炎の時。高低豈に尊卑の奉を廢せんや。五袴途を蘇め遠近知る。妙印手に持して煙霧靜なり。^④當陽那を背て織機を露さん。

◎内生

九重、深密にして復た何をか宣べん。弊を掛けて繇ひ來つて妙傳を顯す。祇一人天地の貴きに奉じ、從他あれ諸道自ら權を分つことを。紫羅帳合して君臣隔り、^⑤黃閣簾垂れて禁制全し。汝方に隅官屬の戀ふるが爲に、遂に^⑥黃葉止啼の鏡を將てす。

◎眞讚

這箇の影像を以て、洞山の主人と爲さば、たゞに紙と墨とを見る。是れ山中の人にあらず。

◎三秋の思。清苦して名を高う上哲の圖。業就つて魏科極志に酬ゆ。比來臣相途に當らず。
◎紅影の日輪下界。紅影は佛の影をいふ、佛に對しては佛なるをいふ、佛中對に況し。
◎五袴途。支那にて天子の位を九天に喰ふるより、紫羅の別稱。
◎紫羅帳。紫色のうすぎぬのこと。
◎黃閣。黃門に同じ、禁門は黃閣なり、故にいふ。
◎黃葉止啼鏡。涅槃經嬰兒行品にある喩、幼兒の啼くを見て、母親は黃楊の葉を與へて此は鏡なりと云へば、幼兒は眞の鏡なりと思ひて啼を止む、方便說法の義に喩ふ。
◎眞讚。眞影を讚美する語。

附載

自誠

名利を求めず 榮を求めず。只麼に縁に随つて此の生を度る。三寸氣消せば誰か是れ主。百年身後謾に虚名。衣裳破れて後重々に補ひ、糧食無き時、旋旋に營む。一個の幻軀能く幾日ぞ。他の問事の爲に無明を長せんや。

規誠

夫れ沙門 釋子は、高上を宗と爲す。既に攀縁を絶す、宜しく淡薄に従ふべし。父母の恩愛を割き、君臣の禮儀を捨て、髮を剃り衣を染め、巾を持し鉢を捧げ、出塵の徑路を履みて、入聖の階梯に登り、潔白なること霜の如く、清淨なること雪の若し。龍神欽敬し、鬼魅歸降す。心を專にして意を用ひ、佛の深恩に報じ、父母の生身、方に利益に當はん。豈に門徒を結託し、朋友に追隨し、筆硯を事持し、文章を馳騁し、區區たる名利、

役役たる趨塵、戒律を思はず、威儀を破卻し、一生の容易を取り、萬劫の艱辛と爲すことを許さんや。若し毀つて斯の如くんば、徒らに釋子と稱するならん。

北堂を辭する書

伏して聞く、諸佛の出世、皆父母に従つて身を受く、萬彙の興生、盡く天地を假りて覆載す。故に父母に非ざれば生せず、天地無くんば長せず。盡く養育の恩に沾ひ、俱に覆載の徳を受く。嗟夫れ一切の含識萬象の形儀は、皆無常に屬す、未だ生滅を離れず。則ち乳哺の情至り、養育の恩深しと雖も、若し世路を把つて供養せば、終に報答し難し。血食を作つて侍養せば、安んぞ久長を得ん。故に孝經に云く、「日三牲の養を用ふ」と雖も、猶ほ孝にあらざるなり。相牽いて沈没し、永く輪廻に入る。罔極の深恩に報いんと欲せば、出家の功德に若くはなし。生死の愛河を截り、煩惱の苦海を越ゆれば、千生の父母に報じ、萬劫の慈親に答ふ。三有四恩報せずといふこと無し。故に經に云く、「一子出家すれば九族天に生す」と。良价、今世の身命を捨て、誓つて家に還らず、永劫の根塵を將て

國譯洞山悟本禪師語錄

- ①附載。附錄と同じ。
- ②自誠。洞山自ら讀むる辭。
- ③名利。名聞利養の時。
- ④榮。榮達の時。
- ⑤三寸。舌のこと。
- ⑥消。消盡の意。
- ⑦旋々。廻轉往還の貌。
- ⑧問事。むだごとの意。
- ⑨無明。明に對す、煩惱妄想のこと、蓋し吾人の煩惱妄想は般若の智慧を味まし、眞理を明らむること能はざらしむるが故に無明といふなり。
- ⑩規誠。訓誡の辭なり。
- ⑪釋子。釋氏といふに同じ、蓋し佛は釋迦種族、佛の法中に入れば、佛の族人なるが故に

- 佛弟子は釋を以て姓となす。
- ②淡薄。薄は泊と同じ、淡泊は怡靜無爲の貌。
- ③巾、鉢。巾は手巾、鉢は鉢盂、共に僧十八種物の一なり。
- ④北堂。北堂は母の在す處なり、故に母のことを北堂といふ。
- ⑤萬彙。萬彙の品彙。
- ⑥含識。又は含靈ともいひ、有情のこと、即ち一切の生物界悉くを指す。
- ⑦世路。世間普通の送りもの。
- ⑧三牲。牛と羊と豕となり。
- ⑨沈没。苦界(六趣四生)に沈没するを云ふ。
- ⑩輪廻。六趣四生の間に出生入死して窮まりなきこと、宛も車輪の廻轉して窮りなきが如きに喩へていふ。
- ⑪罔極。罔は「なし」と訓す、無極と同じ。
- ⑫三有、四恩。前註を見よ。

頓に一般若を明む。伏して惟れば父母、心喜捨を聞いて、意攀緣すること莫れ。淨飯の國王を學び、摩耶の聖后に効へ。他時異日、佛會に相逢はん、此の日今時且つ相離別す。良に違に甘旨に違するに非ず、蓋し時、人を待たず、故に云ふ、「此の身今生に向つて度せずんば、更に何れの時に向つてか此の身を度せん」と。伏して冀はくは、尊懷相寄憶すること莫れ。頌、二首

未だ心源を了せず數春を度る。翻つて嗟す浮世謾に。遠巡すること。幾人か道を得空門の裏、獨り我れ淹留して世塵にあり。謹んで尺書を具へて眷愛を辭す。愿はくは大法を明めて慈親に報せん。涙を洒いで頻に相憶ふことを須ひされ。譬へば當初我が身無きに似よ。

巖下の白雲、常に伴を作し、峯前の碧障以て鄰を爲す。干むることを免る世上の名と利と、永く別る人間の愛と憎と。祖意は直に言下をして曉さしむ。玄微は須らく句中の真に透るべし。合門の親戚相見んと要せば、直に當來證果の因を待つべし。

後に北堂に寄する書
良价 甘旨を離れしより、杖錫、南に遊び、星霜已に十秋を換ふ、岐路俄に萬里を經たり。伏して

- ①九族。高祖父、曾祖父、祖父、父母、己、子、孫、曾孫、玄孫是れなり。
- ②般若。梵語、智慧と譯す、世間の智慧に擇んで、法界の事理を照らし、一切の真理に通達する聖智をいふ、又佛法のことなれいふ。
- ③淨飯。釋尊の父。
- ④摩耶。釋尊の母。
- ⑤遠巡。行いて進まざる貌。
- ⑥淹留。久しく留ること。
- ⑦尺書。極めて簡單な手紙。
- ⑧祖意。教意に對す、祖師意の略、祖師とは多く達磨を指す、今は達磨西來の意旨をいふ。

惟みれば、孃子、心を收め道を慕ひ、意を攝して空に歸し、離別の情を懐くことを休めよ、倚門の望を作すこと莫れ。家中の家事、但だ且く時に隨ふ、轉たあれば轉た多く、日に煩惱を増す。阿兄は勤めて孝順を行じ、須らく冰裏の魚を求むべし。小弟は力を竭して奉承し、亦霜中の筍に泣くべし。夫れ人の世上に居る、己を修し孝を行すれば、以て天に合ひ、僧は空門に在つて、道を慕ひ禪に參じ、而して慈德に報ゆ。今則ち千山萬水杳かに二途を隔つ、一紙八行、聊か意を伸ぶ。頌、名利を求めず。儒を求めず。空門を。愿樂して俗徒を捨つ。煩惱盡くる時愁火滅し、恩情を斷する處愛河枯る。六根の戒定香風引き、一念の無生慧力扶く。爲に北堂に報す悵望することを休め、譬へば死了するが如く譬へば無きが如くせよと。

孃の回書を附す

吾と汝と夙に因縁有り、始めて母子恩愛の情分を結ぶ。懷孕せしより神佛を祈り、願はくは男子を生せんと。胞胎月満ちて、性命絲の如くに懸る。愿心を遂ぐることを得て珠寶を惜むが如し。糞穢だも臭惡を嫌はず、乳哺だも辛勤に倦まず、稍人と成りしより、遂に習學せしむ。或は

- ①孃子。母のことを指していふ。
- ②倚門の望。戰國策に出づ、王孫賈の母の故事なり、王孫賈の母曰く、「汝、朝に出てて晩に来る時は、吾れ門に倚つて望む、汝暮に出てて、還らざる時は、吾れ門に倚りて望む云々」と。
- ③阿兄。阿は助字。
- ④冰裏の魚。晉の王祥は至孝、繼母朱氏、寒天に魚を欲す、鮮衣を解いて氷を割いて魚を求めんとす、氷忽ち自ら解けて雙鯉躍り出づ。
- ⑤霜中の筍。晉の孟宗の後母、冬月笋を求む、宗竹林中に入

暫くも時を逾えて歸らざれば、便ち倚門の望を作す。來書に堅く出家を要すといふ。父亡じ母は老い、兄は薄く弟は寒く、吾何れにか依頼せん。子は娘を抛つの意有り、娘は子を捨つるの心無し。一たび汝が他方に往きしより、日夜常に悲涙を洒ぐ。苦なる哉、苦なる哉、今既に誓つて郷に還らす。即ち汝が志に従ふを得ん。敢て汝が王祥が氷に臥し、丁蘭が木を刻みしが如きことを望むにあらず、但願はくは汝目連尊者の如く我を度し、下、沈淪を脱し、上、佛果に登らんことを。如し其れ然らずんば、幽譴の在る有らん、切に宜しく體悉すべし。

つて泣笑す、筭之れがために生ず。
① 儒。優しく柔かなることを本義とす、轉じて孔子の教學を奉ずる學者又は其の教學、或は廣く學者の總稱に用ふ。
② 惡。惡は謹なり、敬なり、惡、樂共に「れがふ」と訓ず。
③ 六根。眼耳鼻舌身意。
④ 丁蘭。丁蘭、母に事へて孝なり、母近いて、木を刻みて母

となして之に事へたり。
① 目連尊者。目連の母、地獄に墮して苦しむ、連、佛に従つて、施餓鬼法會を修して、母の苦を拔濟す。
② 幽譴。幽は深、遠、隱等の義を兼ね、譴は責なり、怒なり、冥罰といふほどの意。
③ 體悉。悉は悉知、體は體得と熟語する字にて、自己の身心に徹して明了に會得すると。

〇七

洞山悟本禪師語錄之餘

① 屬者、予、山陰に遊び、書を得て之を讀むに、皆祖語なり、問予の未だ嘗て採らざるもの有り、
② 片玉なりと雖も、崑岡に出づるが故に後に附す。

日本沙門 宜默玄契 校勘

師、雲巖に問ふ、「和尚の眞を寫さんと擬す、得てんや也た無や。」巖云く、「幾くか成ずることを得る。」師曰く、「尋常に眞を寫すこと七八を得。」巖云く、「猶ほ是れ失することあり。」師曰く、「失せざる時如何。」巖云く、「直に十成なることを得。」師曰く、「古人道ふ、直に十成を得るも似ずといふ時如何。」巖云く、「他に成數なし。」
雲巖、師と共に蓋地を鋤く次、先徳の事に就いて師問ふ、「此の人、什麼の處にか去る。」巖、良久して云く、「作麼、作麼。」師曰く、「太遲生也。」
師、雲巖に問ふ、「未だ陰界に有らざる時、還つて道ひ得てんや否や。」

① 餘。「あまり」と訓じ、「残り」のこと、古來編輯されし洞山語錄の殘餘の意なり。
② 屬者。近時の義。
③ 山陰。山陰道のこと。
④ 祖語。洞山大師の語なる意。
⑤ 崑岡の片玉。崑岡は崑崙山をいふ、事文類聚に曰く、「天下第一となす、猶ほ桂林の一技、崑山の片玉のごとし」とあり、今の意推して知るべ

巖云く、「爾今還つて有りや否や。」
雪峰、柴を般ぶ次、乃ち師の面前に于て一束を抛下す。師曰く、「重きこと多少ぞ。」峯云く、「盡大地の人提不起。」師曰く、「争か這裏に到ることを得。」峯、無語。

壽山解禪師行脚の時、師の法席に造る。師曰く、「閻黎の生縁何れの處ぞ。」云く、「和尚若し實に問はゞ某甲は即ち是れ。」閻中の入。師曰く、「爾が父の名は何ぞ。」云く、「今日、和尚の此の一間を致すことを蒙つて、直に得たり忘前失後なることを。」

師、僧を勸して曰く、「心法雙び忘すれば性即ち真なり、第幾座ぞ。」
僧云く、「第二座。」師曰く、「什麼に因つてか他の第一座を與へざる。」無對。
一人有り、代つて云く、「心に非ず、法に非ず。」師曰く、「心法雙び忘すれば即ち是れ非法。何ぞ更には是の如く道ふや。」無對。師自ら代つて曰く、「真に座を得ず。」
衆に示して曰く、「有ることを知る底の人は地獄に入ることを解す、有ることを知らざる底の人は門外に走過す。」

① 十成。十分成就の意。
② 太遲生也。生は助字なり、太は「はなはだ」と訓ず、おそいおそいといふ程の意。
③ 陰界。陰は色、受想行識の五陰、界は六根、六境、六識の十八界。五陰は吾人色身の總稱、之れより開展したるものが界なり。
④ 壽山解禪師。福州壽山師師師、大安禪師に嗣法す。
⑤ 閻中。閻とは東越の別名、今の福建省の古稱なり。
⑥ 勸。勸辨と熟語し、しらべあきらかにすること。

師、新羅の僧に問ふ、「未だ海を過ぎらざる時、什麼の處にか在る。」無對。自ら代つて曰く、「祇今海を過ぎる、也た什麼の處にか在る。」

師曰く、「今時の學者、學を得んと欲せば、直に須らく佛向上の人を體取して始めて得べし。如今の學者只だ十方諸佛あることを知つて、十方諸佛出身の處有ることを知らず、空しく佛有ることを知つて成佛を得ず。」

師、僧に問ふ、「三人同行して一人は語を解し、一人は語を解せず、那箇の一人は何れ什麼ぞ。」對へて云く、「此れ豈に是れ主客を辨得せざらんや。」師曰く、「是なり。」云く、「如何が是れ客。」師曰く、「語と不語と俱に是れ客。」又曰く、「人の珠を弄することを解するが如き、手に觸れず地に落ちず、即今、往來底、喚んで什麼と作してか即ち得ん。」無對。師自ら代つて曰く、「不得不得。」

師、上座來つて師を禮拜するを看て曰く、「來つて什麼をか作す。」云く、「和尚の爲に來らす。」師曰く、「若し尊者を禮せば、某甲は則ち偏に坐せん。」
慎微長老、手に拄杖を把る、一僧指して云く、「這箇の拄杖、何れの處よりか出づ。」微云く、「雪地より出づ。」師肯はず、自ら代つて曰く、「如今出づ、也た人の辨得する有りや。」

① 佛向上の人。佛向上事を體得したる人の意、即ち本分の納僧をいふ。
② 體取。體得に同じ、身心に徹して會得領悟するをいふ。
③ 尊者。梵に阿利耶といひ、尊者又は聖と譯す、尊ぶべき人の意にて、智徳ある人に附する敬稱なり。
④ 拄杖。僧の携ふる杖のこと、禪僧之を携ふる所以は行脚の

① 黃藥、鹽官より三百衆を領じて南泉に到る、毎に三百人の爲に説法する次、南泉便ち説法の處に到つて云く、「此の道場を借つて還つて一問を許さんや否や。」衆云く、「便ち請ふ。」泉問ふ、「定慧等しく學び、明かに佛性を見るも此の理如何。」衆云く、「十二時中一物に依倚せず。」泉云く、「是れ長老の見處なること莫しや。」衆云く、「不敢。」泉云く、「醬水錢は即ち且く置く、草鞋錢什麼人をしてか還さしむ。」僧有り、師に舉似す、師曰く、「責状し了つて棒を喫せしめよ。」

師、僧に問ふ、「儒の名は何ぞ。」僧云く、「請ふ和尚安名せよ。」師卻つて良价と稱す。僧無對。雲居、代つて云く、「恁麼ならば則ち出頭の處無し。」又云く、「恁麼ならば則ち總に和尚に占卻せらる。」
延慶の端禪師に人有り問ふ、「蚯蚓斬つて兩段と爲す、兩頭俱に動く、佛性阿那頭にか在る。」慶、兩手を展ぶ、師別して曰く、「即今問ふ底阿那頭にか在る。」

師、田畔に到る、僧有りて挿田す、一僧有りて倒挿す。師問ふ、「闍黎什麼に因つてか倒挿す。」對へて云く、「心中活することあり。」師、言はずして院に歸る、翌日、衆僧普請して出づる次、日先づ出で、昨日倒に挿田するの僧の出で來るを候問す、其の僧末後に門を出づ。師問ふ、「闍黎、昨日東園に竹を斫るは誰ぞ。」其の僧測ること罔くして云ふ、「知らず」と。師曰く、「闍黎何れの處の人ぞ。」云く、「鄂州の人。」師曰く、「老僧行脚の時、曾て往過し來る。」

僧、師に問うて云く、「承る、和尚刮骨の禪を説くと、請ふ、和尚四方八面に刮れ。」師曰く、「刮處勿し。」云く、「和尚幸に是れ好手、什麼としてか刮不得。」師曰く、「爾還つて道ふことを聞かや、世醫手を拱くと。」問ふ、「如何なるか是れ善知識の眼。」師曰く、「昏燃油無し。」問ふ、「十二時中何を將つてか奉獻せん。」師曰く、「無物。」問ふ、「身命、急切の處如何。」師曰く、「雜種すること莫れ。」云く、「何を將つてか奉獻せん。」師曰く、「虚空を將つて奉獻せよ。」云く、「虚空と非空と將ち來るに相似せず。」師曰く、「相似と道ふも也た得たり、不相似と道ふも也た得たり。」云く、「如何が是れ相似。」師曰く、「目前。」云く、「如何なるか是れ不相似。」師曰く、「目前不是。」問ふ、「本に返り源に還る時如何。」師曰く、「一片の雪の如し、天より降下するは絲髮の大きさの如く、物掛著する

時、危に乗じ險を渉るに力を扶くるがためなり。
① 黃藥。支那黃藥山希運禪師、百丈懷海に嗣法す。
② 鹽官。支那洪州鎮國海昌院齊安禪師、馬祖道一に嗣法す。
③ 定慧等學、明見佛性。涅槃經の文なり。
④ 醬水錢。遺元禪師は「こんずのあたひ」といへり、或は「おちらし」なりと云ふ説もあれど、つまりは飯料のことなり。
⑤ 草鞋錢。行脚して參師問法するために、草鞋を買ふ金の意にて、俗に云ふ「わらじ錢」なり。
⑥ 端禪師。支那襄州延慶山法稱禪師、洞山靈祐に嗣法す。
⑦ 阿那頭。阿那箇頭ともいふ、何處の義、即ち「ドナラ」といふこと。
⑧ 師信。この師の字有る所以詳ならず。
⑨ 日先出。一本に「自先出」に作る、是なり。
⑩ 鄂州。河南省新蔡縣。
⑪ 刮骨の禪。刮骨は換骨と義稍同じ。
⑫ 紙燃。かんぞよりのこと、「紙燃無油」は「縁に對せずして照し、物に觸れずして知る」と同意。
⑬ 無切。縁は古の隱字なり、隱は痛なり。
⑭ 臭。臭に同じ、惡氣なり。
⑮ 法嗣。法統を嗣續せる弟子の意、師の印可を受けて傳法せるものをいふ。
⑯ 機語。語録のこと。
⑰ 傳法正宗記。佛日契高の著、高祐七年を以て成る、全部九卷。
⑱ 大鑿。曹溪山慧能禪師。

時は則ち地に到らず。問ふ、「暫時も在らざれば死人に如同すと、如何。」師曰く、「好し埋卻するに。」又曰く、「鼻なり。」又曰く、「命絶す。」

師の法嗣、其の史傳に出づる者二十七人、其の機語有る者十有九人。傳法正宗記に曰く、「大鑿の六世、筠州洞山の良价禪師といふ。其の出す處の法嗣凡そ二十六人。一は雲居の道膺と曰ふ者（敕して弘覺禪師と謚す、塔を圓寂と曰ふ、洞山の上足なり）。一は撫州の本寂と曰ふ者（敕して元證禪師と謚す、塔を福圓と曰ふ）。一は洞山道全と曰ふ者（第二世中洞山）。一は龍牙の居遁と曰ふ者。一は京兆の休靜と曰ふ者。敕して寶智大師、無爲の塔と謚す、華嚴寺に住す）。一は京兆の蜆子和尙と曰ふ者。一は筠州の普滿と曰ふ者。一は台州の道幽と曰ふ者。一は洞山の師虔と曰ふ者（第三世、後洞山青林和尙と號す）。一は洛京の遁儒と曰ふ者。一は越州の乾峯和尙と曰ふ者。一は吉州の禾山和尙と曰ふ者。一は天童の咸啓と曰ふ者（先に蘇州寶華山に住す）。一は潭州の寶益山和尙と曰ふ者。一は益州の通禪師と曰ふ者（北院に住し、敕して證真大師と謚す）。一は高安白水の本仁と曰ふ者。一は撫州疎山の光仁と曰ふ者。一は澧州欽山の文選と曰ふ者。一は天童の義禪師と曰ふ者。一は太原の方禪師と曰ふ者。一は新羅の金藏和尙と曰ふ者。一は益州の白禪師と曰ふ者。一は潭州の文殊和尙と曰ふ者。一は舒州の白和尙と曰ふ者。一は邵州の西湖和尙と曰ふ者。一は青陽の通玄和尙と曰ふ者」と。日本人瓦屋能光禪師も亦其一なり。（師は本朝高僧傳に曰く、「海に航して唐に入り、洞山价禪師に參じて親し

く法印を承く」と）。

國譯洞山悟本禪師語錄 終

國譯洞山語錄の尾に書す

龍の物たる、其れ非常なるか。邪人能く觀るもの寡し。丹青以て畫き、人に告ぐるに龍を以てすれば、人其の龍たることを知る。信せざるものは未だ之れ有らざるなり。後眞龍を見て之に告ぐるに龍を以てすれば、人且つ怪む。今の世に方つて、孰れか法を説かざる。露々たる其の教、似たることは似たり、眞なるときは否なり。彼の畫龍の如く然り。惟り畫龍の雲を興し、霖を爲さざるのみに非ず。間朱を翫ひ、幾んど病を爲す。戲懼るべし。屬者、禪人宜默なる者あり、再び洞山の語要を編集し、來り以て予に告ぐ。予、燕香稽首、看讀すること一過、之に謂つて曰く、「近世支那の禪師瑞白雪公言へること有り、曰く、『洞山古刹は我等が祖基、傾頽已に久し瓦礫存せず。今幸に孤漚上座住持す。重ねて祖塔を新にせんと欲す。我輩は洞上の兒孫たり、烏んぞ坐視すべけんや』と。是に由つて之を觀れば、知んぬ、

重ねて 業蔭を彼の土に修することを。今や子に於ける亦祖錄を我が國に資始す。宜なるかな、遑ふ所を知れることを。吾が 儕苟くも遑裔を辱うす。安んぞ喜躍せざらんや。工に命じて梓に鏡み以て其の傳を廣め、參學の者をして丹青の外寔に神龍あり、雲行き雨施すこと千古此の如きことを知らしむ。請ふ怪むこと莫れ。

元文己未三月の八日

鷹峯 源光主人 覺城 叟 請詢 和南拜撰

- ① 實録。たすけばじむること。
- ② 儕。輩に同じ、同輩のこと。
- ③ 遑裔。裔は「あとつぎ」と訓す。子孫、末葉の義なり。
- ④ 元文己未。櫻町天皇元文四年に當る。
- ⑤ 鷹峯。山城國愛宕郡にあり。
- ⑥ 源光。寺名、卍山の住せし寺なり。
- ⑦ 叟。「おきな」と訓じ、老人の稱。
- ⑧ 和南。梵語、稽首、禮拜、敬禮と譯す。

- ① 當。叙と殆んど同意。
- ② 丹青。赤と青のことにして、繪の具にて彩色したる繪畫をいふ。
- ③ 霖々。感しき貌。
- ④ 霖。三日以上降り續く雨をいふ。
- ⑤ 燕香。燕は燒なり、燒香に同じ。
- ⑥ 利。具には剎摩といふ梵語、塔、廟、寺宇、伽藍等と譯す。
- ⑦ 祖基。祖は始なり、今は祖師の意、基は「もとゝ」と訓じ、根據、土臺の意。
- ⑧ 住持。住職といふに同じ、一寺に住して佛法を久住護持する意なり。
- ⑨ 業蔭。業は甘棠(コリンゴ)のこと、周の召伯の故事、祖先の居た處といふ義に用ふ。

洞山悟本大師語錄序

從上宗乘爲物垂言，一如搗塗毒鼓，聞者皆喪，絕後乃重甦，無舌而解語，湖南正服青石濫觴，五傳迄乎新豐，一瀉千里，百谷朝宗，法性波瀾渺無涯涘，矧夫文章富贍，家法縝密，高懸寶鏡，善赴來機，自非入室神足，阿誰敢窺影，鞭門外遊人，逡巡退縮，歐峯奔逸，絕塵荷玉，步趨繼踵，以至二八賢謁，執轡並馳，駸駸乎其壯矣哉，其片言隻字，崑壁南金，雖多載陳編，未見有全錄，僉曰：祖庭闕典，莫同心不浩歎，宜默禪人爲之慷慨髮指，纂錄惟懋，采摭殆盡，乃釐作壹局，昔者湛然澄禪師，得山林居士等，涉獵叢書，鈔錄玄沙語，味際天浴日之海，鹹於一滴，以慰禪者之渴心，今也宜默傲其故事者乎，可謂勤矣，若夫一家雲仍，因標見月，得意忘言，箇箇臣奉君，人人子就父，則洞水逆流，瀾漫乎四海，被其沾丐者，孰敢不隨喜，因叙緒言，弁諸卷端。

元文之戊午百鐘吉旦

住林泉沙門元趾稽首拜題

重集洞山悟本大師語要自序

吾大雄氏之於心印淵淵浩浩於戲大哉在昔此教也發機靈山達乎少林燈燈繼明奕葉纓綬以及乎我然年世寢遠其勢也不能無同異而已矣最其昭昭莫若靈山靈山以還莫若少林少林以還莫若曹溪曹溪一脈流為兩派涇流之大沛然其波瀾狂矣方此時也障而東之者是乃出乎濟上洞上之二家二家各有其所存者師師幾語相與嚶其垂誨於千載之下雖然其語縝密其機高尚譬之郢中之歌其曲彌高其聲彌奇所謂國中屬而和者不過數人而已所以如洞山語錄其傳絕矣其語雖存浮沈春池與礫相混其故何也杜撰之輩妄以凡情改易古語也最其甚者如觀察使之語皆改易如渠今正是我我今不是渠之語有更正是作不是者或有改不是作正是者是以不能其脈不斷絕者乎又如也勝前朝斷舌才之句易前作知則其義不了者乎是以雖居士無盡未嘗無不解本據之問也大凡類此予以為居今之世志古之道孟浪猶然况後昆哉於是焉溫尋古本竊竊乎校讎同異纂集成矣人或謂予曰祖佛言教似生冤家始有參學分此是弗洞山大師語耶曰唯然有之曰奚為非耶予曰將謂無祖佛况亦言教哉或問予言茫乎無對予曰已乎已乎苟有不者此語之於編修今也區區其可再乎

是歲戊午仲春十五日

日本國沙門

玄契涉筆于歌浦瑞龍精舍

洞山悟本禪師語錄

參學沙門 玄契 編次

師供養雲巖真次僧問先師道祇這是莫便是否師曰是云意旨如何師曰當時幾錯會先師意云未審先師道知有也無師曰若不知有爭解恁麼道若知有爭肯恁麼道長庚云既知有又云發于方知又恐

雲巖諱曰師營齋僧問和尚於雲巖處得何指示師曰唯在彼中不蒙指示云既不蒙指示又用說齋作甚麼師曰爭敢違背他云和尚初見南泉為甚麼卻與雲巖設齋師曰我不重先師道德亦不為佛法祇重他不為我說破僧云和尚為先師設齋還肯先師也無師曰半肯半不肯云為甚麼不全肯師曰若全肯即孤負先師也問欲見和尚本來師如何得見師曰年牙相似即無阻矣僧擬進語師曰不躡前蹤別請一問僧無對雲居代云恁麼則不見和尚本來師也人恁麼道問答又

上堂曰還有不報四恩三有者麼衆無對又曰若不體此意何超始終之患直須心心不觸物步步無處所常無間斷始得相應直須努力莫閒過日僧問寒暑到來如何回避師曰何不向無寒暑處去云如何是無寒暑處師曰寒時寒殺閻黎熱時熱殺閻黎

上堂曰祖教佛教似生冤家始有參學分若透祖佛不得即被祖佛謾去

上堂曰坐斷主人公不落第二見北院出衆云須知有一人不合伴師曰猶是第二見院便掀倒禪牀師曰老兄作麼生院云待某甲舌頭爛即向和尚道

早參疎山仁出問未有之言請師示誨師曰不諾無人肯疎云還可功也無師曰備即今還功得麼疎云功不得即無諱處

上堂曰欲知此事直須如枯木生花方與他合疎山問一切處不乖時如何師曰闍黎此是功勳邊事幸有無功之功子何不問云無功之功豈不是那邊人師曰大有人笑子恁麼問云恁麼則迢然去也師曰迢然非迢然云如何是迢然師曰喚作那邊人即不得云如何是非迢然師曰無辨處

夜參不點燈有僧出問話退後師令侍者點燈乃召適來問話僧出來其僧近前師曰將取三兩粉來與這箇上座其僧拂袖而退自此省發遂罄捨衣資設齋得三年後辭師曰善爲時雪峯侍立問云祇如這僧辭去幾時卻來師云他祇知一去不解再來其僧歸堂就衣鉢下坐化雪峯上報師師曰雖然如此猶較老僧三生在

上堂曰有一人在千人萬人中不背一人不向一人備道此人具何面目雲居出云某甲參堂去

師示衆曰體得佛向上事方有些子語話分僧便問如何是語話師曰語話時闍黎不開云和尚還問否師曰待我不語話時即問僧問如何是正問正答師曰不從口裏道云若有人問師還答否師曰也未曾問問如何是從門入者非實師曰便好休問和尚出世幾人肯師曰竝無

一人肯云爲甚麼竝無一人肯師曰爲箇箇氣字如王

上堂曰道無心合人人無心合道欲識箇中意一老一不老後僧問曹山如何是一老山云枯木僧又學似道遙思忠云三從六義又曰此事直須妙會事在其妙體在妙處

解夏上堂曰秋初夏末兄弟或東或西直須向萬里無寸草處去良久曰祇如萬里無寸草處作麼生去顧視左右曰欲知此事直須如枯木花開方與他合有僧到石霜霜問和尚有何言句示徒僧舉前話霜云有人下語否云無霜云何不道出門便是草僧回舉似師師曰此是一千五百人善知識語別云大唐國內能有幾人

上堂曰向時作麼生奉時作麼生功時作麼生其功時作麼生功功時作麼生僧問如何是向師曰喫飯時作麼生云如何是奉師曰背時作麼生云如何是功師曰放下饅頭時作麼生云如何是共功師曰不得色云如何是功師曰不共

師謂衆曰擬心是犯戒得味是破齋曹山曰如今人如佛味細味盡爲淨者又曰擬心蚤差況復有言耶

示衆曰知有佛向上人方有語話分時有僧問如何是佛向上人師曰非佛保福別云佛非雲得所以言非法眼別云方便呼爲佛又曰塵中不染丈夫兒雲門云拄杖但喚作一切

問如何是立中又立師曰如死人舌問如何是毘盧師法身主師曰禾莖粟幹問三身之中阿那身不墮衆數師曰吾常於此切僧問曹山先師道吾常於此切意作麼生山云要頭便師洗鉢次見兩鳥爭蝦蟆有僧便問這箇因甚麼到恁麼地師曰祇爲闍黎

會下有老宿去雲巖回師問汝去雲巖作麼生宿云不會師代曰堆堆地又老宿拈袈裟角問

云父母未生時還有這箇麼師曰只今豈是有耶宿搖手師因看稻田次朗上座牽牛師曰這箇牛須好看恐喫稻去朗云若是好牛應不喫稻師問講維摩經僧曰不可以智知不可以識識喚作甚麼語云讚法身語師曰喚作法身早是讚也

示衆曰一大藏教只是箇之字

垂語曰直道本來無一物猶未消得他鉢袋子僧便問時時勤拂拭爲甚麼不得佗衣鉢未審

甚麼人合得師曰不入門者云只如不入門者還得也無師曰雖然如此不得不與佗

垂語曰直道本來無一物猶未消得他衣鉢這裏合下得一轉語且道下得什麼語有一上座

下語九十六轉不愜師意末後一轉始愜師意師曰闍黎何不早恁麼道別有一僧密聽祇不

聞末後一轉遂請益上座上座不肯說如是三年執待巾餅終不爲舉上座因有疾其僧曰某

甲三年請舉前話不蒙慈悲善取不得惡取去遂持刀向之曰若不爲某甲舉即便殺上座也

上座悚然曰闍黎且待我爲汝舉乃曰直饒將來亦無處著其僧禮謝

師因普請次巡察去見一僧不赴普請師問爾何不去僧云某甲不安師曰爾尋常健時何曾

去來

師問僧甚麼處來僧云遊山來師曰還到頂麼云到師曰頂上有人麼云無人師曰恁麼則不到

頂也云若不到頂爭知無人師曰我從來疑著這漢

冬節與秦首座喫果子次乃問有一物上拄天下拄地黑似漆常在動用中動用中收不得且

道過在甚麼處秦云過在動用中師安聽別師喚侍者撥退果卓

僧問卽今往來底喚作甚麼則得師曰不得不得有一僧在延壽堂不安要見師師遂往僧云

和尚何不救取人家男女師曰爾是甚麼人家男女云某甲大闍提人家男女師良久僧云四

山相逼時如何師曰老僧日前也向人家屋簷下過來云回互不回互師曰不回互云教某甲

向甚麼處去師曰粟畚裏去僧噓一聲云珍重便坐脫師以拄杖敲頭三下曰汝祇解與麼去不

解與麼來

師看病僧云火風離散時如何師曰來時無一物去亦任從伊云爭奈麻寮何師曰須知有

不病者云如何是不病者師曰悟則無分寸不悟則隔山坡云前程還許卜度也無師曰雖然

黑似漆成立在今時京兆七師令僧問師云那箇究竟作麼生師曰卻須問他始得

蟾首座問師佛眞法身猶若虛空應物現形如水中月作麼生說箇應底道理師曰如驢馱井

座云是則是只道得八成師曰首座作麼生座云如井觀驢

有庵主不安凡見僧便云相救相救多下語不契師乃去訪之主亦云相救師曰甚麼相救主

云莫是藥山之孫雲巖嫡子麼師曰不敢主合掌云大家相送便遷化僧問師云亡僧遷化向

甚麼處去師曰火後一莖茆

師示衆曰我有三路接人鳥道玄路展手僧問師尋常教學人行鳥道未審如何是鳥道師曰

不逢一人云如何行師曰直須足下無私去云祇如行鳥道莫便是本來面目否師曰闍黎因

甚顛倒云甚麼處是學人顛倒師曰若不顛倒因甚麼卻認奴作郎云如何是本來面目師曰

不行鳥道。
師問僧去什麼處來僧云製鞋來師曰自解依他僧云依他師曰他還指教汝也無僧曰允即不違。

師見幽上座來遽起向禪牀後立幽云和尚為甚麼回避學人師曰將謂闍黎不見老僧。

僧問茶莫如何是沙門行莫云行則不無有覺即乖別有僧舉似師師曰他何不道未審是甚

麼行僧遂進此語莫云佛行佛行僧回舉似師師曰幽州猶似可最苦是新羅東禪齊拈云此

若有且道甚麼處不得若無他又道最苦是新羅還點檢出麼他道行則不無

有覺即乖卻令再問是甚麼行又道佛行那僧是會了問不問了問請斷看

僧卻問如何是沙門行師曰頭長三尺頸長二寸乃師令侍者持此語問三聖然和尚聖於侍

者手上招一招者回舉似師師肯之。

師問僧甚處來云三祖塔頭來師曰既從祖師處來又要見老僧作甚麼云祖師即別學人與

和尚不別老僧欲見闍黎本來師還得否云亦須待和尚自出頭來始得師曰老僧適來暫時

不在僧問如何是空劫已前自己師曰白鳥入蘆花官人問有人修行否師曰待公作男子即

修行僧問承古有言相逢不擊出舉意便知有時如何師乃合掌頂戴。

師問僧世間何物最苦僧云地獄最苦師曰不然云師意如何師曰在此衣線下不明大事是

名最苦。

師問僧名什麼僧曰某甲師曰阿那箇是闍黎主人公僧云見祇對次師曰苦哉苦哉今時人

例皆如此只是認得驢前馬後底將為自己佛法平沈此之是也賓中主尚未分如何辨得主

中主僧便問如何是主中主師曰闍黎自道取云某甲道得即是賓中主雲居代云某甲道

得不是賓中主如何是主中主師曰恁麼道即易相續大難師遂示頌曰嗟見今時學道流千千萬萬認門頭恰

似入京朝聖主祇到渣關便即休。

師因僧問如何是青山白雲父師曰不森森者是云如何是白雲青山兒師曰不辨東西者是

云如何是白雲終日倚師曰去離不得云如何是青山總不知師曰不顧視者是乃頌曰青山

白雲父白雲青山兒白雲終日倚青山總不知問清河彼岸是甚麼草師曰是不萌之草問如

何是西來意師曰大似駭雞尾問蛇吞蝦蟆救則是不救則不救則雙目不瞎不救則形

影不彰。

有僧辭大慈慈曰去什麼處僧云暫去江西慈曰我勞汝一段事得否僧云和尚有什麼事慈

曰將取老僧去僧云更有過於和尚者亦不能將得去慈便休其僧後舉似師師曰闍黎爭合

恁麼道僧云和尚作麼生師曰得法眼別云和尚若師又問其僧大慈別有什麼言句僧云有

時示衆云說得一丈不如行取一尺說得一尺不如行取一寸師曰我不恁麼道僧云作麼生

師曰說取行不得底行取說不得底雲居云行時無說路說時無行路不說不行時

舉藥山問僧甚處來云湖南來山曰洞庭湖水滿也未云未山曰許多時雨水為甚麼未滿僧

無語師代曰甚麼劫中曾增減來。

師舉示衆曰藥山與雲巖先師遊山腰間刀響巖問甚麼物作聲山抽刀幕口作斫勢師曰看

他藥山橫身為這箇事今時人欲明向上事須體此意始得。

舉五洩默禪師到石頭處云一言相契即住不契即去頭據坐洩便行頭隨後召曰闍黎闍黎洩回首頭曰從生至死祇是這箇回首轉腦作麼洩忽然契悟乃拗折拄杖而棲止焉師曰當時不是五洩先師大難承當然雖如是猶涉途在

舉無著和尚因日晚遂問文殊云擬投一宿得否殊云爾有執心在不得此宿著云某甲無執心殊云爾受戒否著云受戒久矣殊云爾若無執心何用受戒著遂辭退均提童子送著出著云適來和尚道前三三後三三是多少童子召云大德著回首童子云是多少師曰欲觀其父先觀其子

舉文殊大士與無著喫茶次乃拈起玻璃盞問無著曰南方還有這箇否著云無文殊曰尋常將甚麼喫茶著無對師代展手曰有無且置借取這箇看得不

石霜因僧問咫尺之間爲甚不親師顏霜曰我道徧界不曾藏僧後問雪峯徧界不曾藏意旨如何峯云什麼處不是石霜僧回舉似霜霜曰這老漢有什麼死急師聞曰笑殺土地

西園一日自開浴次僧問何不使沙彌園乃撫掌三下師曰一種是時節因緣就中西園精妙舉盤山寶積禪師上堂夫心月孤圓光吞萬象光非照境境亦非存光境俱亡復是何物師曰光境未亡復是何物

師示衆曰唯有佛菩提是真歸仗處復喝一喝曰猶有者箇去就在

鄧隱峯在石頭頭刻草次峯在頭左側叉手而立頭飛刻子向峯前刻一株草峯云和尚祇刻得這箇不刻得那箇頭提起刻子峯接得便作刻草勢頭曰汝祇刻得那箇不解刻得這箇峯

無對師代曰還有堆阜麼

舉南泉問僧不思善不思惡思總不生時還我本來面目來僧云無容止可露師曰還會將示人麼陸亘大夫問南泉云弟子家中有一片石或時坐或時臥如今擬鐫作佛還得否泉曰得陸曰莫不得否泉曰不得師曰不坐即佛坐即非佛南泉問神山作什麼對云打羅泉曰手打腳打神山云請和尚道泉曰分明記取舉似作家師別曰無腳手者始解打羅

僧舉僧問章敬心法雙亡指歸何所敬曰郢人無汚徒勞運斤云請師不返之言敬曰即無返句之語問師師曰道即甚道罕遇作家

師示衆曰五洩先師一日沐浴焚香端坐告衆曰法身圓寂示有去來千聖同源萬靈歸一吾今瀉散胡假興哀無自勞神須存正念若遵此命真報吾恩儻固違言非吾之子時有僧問和尚向甚麼處去洩曰無處去云某甲何不見洩曰非眼所親師曰作家

師問石瀧曰几前一箇童子甚了事如今向甚麼處去也瀧云火焰上泊不得卻歸清涼世界去也

有人舉問一僧云鹽官會下有一主事僧忽見一鬼使來追僧告云某甲身爲主事未暇修行乞容七日得否使曰待爲白王若許即七日後來不然須臾便至言訖不見至七日後復來覓其僧了不可得若被覓著時如何抵擬他師代曰被他覓得也

江陵僧參大川亦曰大湖川問幾時發足江陵僧提起坐具川曰謝子遠來下去僧繞禪牀一匝便出川曰若不恁麼爭知眼目端的僧拈掌曰苦殺人幾錯判諸方老宿川曰甚得禪宗道理僧

舉似丹霞，霞曰：於大川法道，即得我這裏不然。云：未審此間作麼生。霞曰：猶較大川三步在。僧禮拜。霞曰：錯判諸方者多。師曰：不是丹霞難分玉石。

雲居到參，師問甚處來。居曰：翠微來。師曰：翠微有何言句示徒。居云：翠微供養羅漢，某甲問供養羅漢，羅漢還來否。微曰：爾每日噓箇甚麼。師曰：實有此語否。云：有。師曰：不虛參見作家來。師問雲居，汝名甚麼。云：道膺。師曰：向上更道。云：向上即不名道膺。師曰：與老僧在雲巖時祇對無異也。

雲居問：如何是祖師意。師曰：闍黎他後有把茅蓋頭，忽有人問如何祇對。居云：道膺罪過。師謂雲居曰：吾聞思大和尚生倭國，作王是否。居云：若是思大佛亦不作師然之。

師問雲居甚處去來。居云：蹋山來。師曰：那箇山堪住。居云：那箇山不堪住。師云：恁麼則國內總被闍黎占卻。居云：不然。師曰：恁麼則子得箇入路。居云：無路。師曰：若無路爭得與老僧相見。居云：若有路，即與和尚隔山。山或作生去也。師乃曰：此子已後千人萬人，把不住去在。

雲居隨師渡水次，師問水深多少。居云：不濕。師曰：蠢人居云：請師道。師曰：不乾。師謂雲居曰：昔南泉問講彌勒下生經，僧曰：彌勒什麼時下生。云：見在天宮。當來下生。南泉曰：天上無彌勒，地下無彌勒。時居遂問師曰：只如天上無彌勒，地下無彌勒，未審誰與安字。師直得禪牀震動，乃曰：膺闍黎吾在雲巖，曾問老人，直得火爐震動。今日被子一問，直得通身汗流。雲居結庵于三峯，經日不赴堂。師問：子近日何不赴齋。居云：每日自有天神送供。師曰：我將謂汝是箇人，猶作這箇見解在。汝晚間來。居晚至，師召膺庵主。居應諾。師曰：不思善，不思惡，是甚麼。居回菴，寂然宴坐。天神自此竟尋不見。如此三日乃絕。

雲居合醬次，師問作什麼。居曰：合醬。師曰：用多少鹽。云：旋入。師曰：作何滋味。居云：得。

師問雲居：大闍提人殺父母，出佛身血，破和合僧，如是種種孝養何在。居云：始得孝養。雲居作務次，悞刻殺蚯蚓。師曰：這箇孽。居云：他不死。師曰：二祖往鄴都，又作麼生。居無對。

師於扇上書佛字，雲居見，卻書不字。師又改作非字，雪峯見，乃一時除卻。

曹山來謁師，師問曰：闍黎名什麼。對曰：本寂。師曰：向上更道。曹云：不道。師曰：爲什麼不道。曹云：不名本寂，師深器之。

曹山行腳時，問烏石靈觀禪師：如何是毘盧師法身主。石曰：我若向爾道，即別有也。曹舉似師。師曰：好箇話頭，祇缺進語。何不問爲甚麼不道。曹卻來進前語。石曰：若言我不道，即瘧卻我口。若言我道，即瘧卻我舌。曹歸舉似師，師深肯之。

曹山親入師室，密印所解，盤桓數載，乃辭師。師問：什麼處去。云：不變異處去。師曰：不變異處豈有去耶。曹云：去亦不變異。師又曰：子歸鄉莫打飛鷲嶺過。曹曰：是。師曰：來時莫打飛鷲嶺來。麼。曹云：是。師曰：有一人，不打飛鷲嶺過，便到此間。子還知麼。曹云：渠無彼往。師曰：子見甚道理。便道渠無彼往。曹云：若不到這田地，爭解恁麼道。師遂囑曰：吾在雲巖先師處，親印寶鏡三昧，事窮的要，今付于汝。其詞出尾師又曰：末法時代人多乾慧，若要辨驗真僞，有三種滲漏。一曰：見滲漏，機不離位，墮在毒海。二曰：情滲漏，滯在向背，見處偏枯。三曰：語滲漏，究妙失宗，機昧終始，濁智流轉于此三種。子宜知之。

道全第二世住亦洞山問師如何是出離之要師曰闍黎足下煙生全當下契悟更不他遊雲居進語云終不敢孤負和尚足下煙生師曰步步玄者即是功到

龍牙因參翠微乃問學人自到和尚法席一箇餘月不蒙一法示誨意在於何微曰嫌甚麼有僧舉問師曰闍黎爭怪得老僧龍牙又謁德山問云遠聞德山一句佛法及乎到來未曾見和尚說一句佛法德山曰嫌什麼牙不肯乃造師法席如前問之師曰爭怪得老僧

龍牙問德山學人仗鏡錮劍擬取師頭時如何山引頸龍牙云頭落也山微笑牙後參師舉前語師曰德山道什麼云德山無語師曰莫道無語且將德山落底頭呈似老僧牙省過懺謝遂

止于師席隨衆參請龍牙問如何是祖師意師曰待洞水逆流或作泝流即向汝道牙始悟厥旨華嚴問學人未見理路未免情識師曰汝還見理路也無云見無理路師曰什麼處得情識來

云學人實問師曰恁麼須向萬里無寸艸處立云無寸艸處還許立也無師曰直須恁麼去華嚴搬柴次師把住柴問狹路相逢時作麼生云反仄何幸師曰汝記吾言汝向南住有一千人若向北住即三二百而已

九峯見師師曰掌有神珠白晝示人人且按劍况玄夜乎子可貴也峯云但不識珠者耳識之亦無晝夜師稱之爲俊士師沒處於塔傍至中和始乃辭塔北遊

青林到參師問曰近離什麼處林云武陵師曰武陵法道何似此間云胡地冬抽筍師曰別飢炊香飯供養此人林拂袖便出師曰此子向後走殺天下人在青林在山栽松次有劉翁者求偈作偈曰長長三尺餘鬱鬱覆青草不知何代人得見此松老

劉得偈呈師師謂曰此是第三代洞山主人

青林辭師師曰子向甚麼處去林云金輪不隱的徧界絕紅塵師曰善自保任林珍重而出師門送謂青林曰恁麼去一句作麼生道林曰步步踏紅塵通身無影像師良久林云老和尚何不速道師曰子得恁麼性急林云某甲罪過便禮辭

北院辭師擬入嶺去師曰善爲飛猿嶺峻好看院沈吟良久師曰通闍黎院應諾師曰何不入嶺去因此省悟更不入嶺師事於師時號嶺頭通

師問踈山空劫無人家是甚麼人住處踈云不識師曰人還有意旨也無云和尚何不問他師曰現問次云是何意旨師不對

欽山遼參師師問甚麼處來對云大慈來師曰還見大慈麼欽云見師曰色前見色後見欽云非色前後見師默置欽乃曰離師太早不盡師意法眼云不盡師意不易承嗣得他

巖頭雪峯欽山坐次師行茶來欽乃閉眼或作閉眼師曰甚麼處去來欽云入定來師曰定本無門從何而入雪峯到參師問從甚麼處來云天台來師曰見智者否云義存喫鐵棒有分

雪峯在會下作飯頭淘米次師問淘沙去米淘米去沙峯云沙米一時去師曰大衆喫箇什麼峯遂覆卻米盆師曰據子因緣合在德山

師一日問雪峯作甚麼來峯云斫槽來師曰幾斧斫成峯云一斧斫成師曰猶是這邊事那邊事作麼生峯云直得無下手處師曰猶是這邊事那邊事作麼生峯休去

又作麼生，峯無對。先雲居代云：總與不見，有不足者。

師見雪峯來，曰：入門來，須得有語，不得道蚤箇了。峯云：某甲無口。師曰：無口，即且從還我眼來。

峯便休。先雲居云：待某甲有口，即道是。長慶云：與麼則某甲還道。雲居云：祇如雪峯與麼道，是入門語，不是入門語。

雪峯辭師，師曰：子甚處去。峯云：歸嶺中去。師曰：當時從甚麼路出。峯云：從飛猿嶺出。師曰：今回

向甚麼路去。峯云：從飛猿嶺去。師曰：有一人，不從飛猿嶺去，子還識麼。峯云：不識。師曰：爲甚麼

不識。峯云：他無面目。師曰：子既不識，爭知無面目。峯無對。

巖頭參德山，頭入方丈門，側身問：是凡是聖。山便喝。頭禮拜，有人舉似師。師曰：若不是巖上座，

大難承當。頭曰：洞山老人不識好惡，錯下名言。我當時一手擡，一手搥。瑠那覺云：巖頭無人問者，一疑，直得瓦解冰消。

師問德山侍者：從何方來。云：德山來。師曰：來作什麼。云：孝順和尚來。師曰：世間什麼物最孝順，

侍者無對。

師不安，令沙彌傳語雲居，乃囑曰：他或問和尚安樂否，但道雲巖路相次絕也。汝下此語，須遠

立，恐他打汝。沙彌領旨去傳語，聲未絕，早被雲居打一棒。沙彌無語。同安顯代云：恁麼則雲巖一

道，雲巖路絕不絕，崇壽禪云：古人打此一棒，意作麼生。

師將圓寂，謂衆曰：吾有聞名在世，誰人爲吾除得。衆皆無對。時沙彌出云：請和尚法號。師曰：吾

聞名已謝。石霜云：無人得他肯，雲居云：若有聞名，非吾先師。曹山云：從古至今，無人辦得。疎山云：龍有出水之機，無人辦得。

僧問：和尚遠和還有不病者也無。師曰：有。云：不病者還看和尚否。師曰：老僧看他有分。云：未審

和尚如何看他。師曰：老僧看時不見有病。

師問僧：離穀漏子，向甚麼處與吾相見。僧無對。遂示頌曰：學者恒沙無一悟，過在尋他舌頭路，

欲得忘形泯蹤跡，努力慇懃空裏步。

師以咸通十年己丑三月朔旦，命剃髮澡身，披衣聲鐘，辭衆儼然坐化。時大衆號慟，移晷不止。

師忽開目，謂衆曰：夫出家之人，心不依物，是真修行。勞生息死，於悲何有。乃召主事僧，令辨愚

癡齋一普，蓋責其戀情也。衆猶戀慕不止，延至七日，食具方備。師亦隨齋畢，曰：僧家勿事大率，

臨行之際，喧動如斯。至八日，浴訖，端坐長往。壽六十有三，臘四十二。敕諡悟本大師。塔曰：慧覺。

師曾在洞潭，尋大藏，蓋出大衆經要一卷，并激勵道俗，備頌讚等，流布諸方。

行由

師幼歲從師，因念般若心經，至無眼耳鼻舌身意處，忽以手捫面，問師曰：某甲有眼耳鼻舌等，何故經言無？其師駭然異之，云：吾非汝師，即指往五洩山禮靈默禪師。師遊方，首謁南泉，值馬祖諱辰，修齋，泉問衆曰：來日設馬祖齋，未審馬祖還來否？衆皆無對，師乃出對曰：待有伴即來。泉曰：此子雖後生，甚堪雕琢。師曰：和尚莫厭良爲賤。師參潯山，問曰：頃聞南陽忠國師有無情說法話，某甲未究其微。潯曰：開黎莫記得麼？師曰：記得。潯曰：子試舉一徧看。師遂舉，僧問：如何是古佛心？國師曰：牆壁瓦礫是。僧曰：牆壁瓦礫豈不是無情？國師曰：是。僧曰：還解說法否？國師曰：常說熾然，說無間歇。僧云：某甲爲甚麼不聞？國師曰：汝自不聞，不可妨他聞者也。僧云：未審甚麼人得聞？國師曰：諸聖得聞。僧云：和尚還聞否？國師曰：我不聞。僧云：和尚既不聞，爭知無情解說法？國師曰：賴我不聞，我若聞，即齊於諸聖。汝即不聞，我說法也。僧云：恁麼則衆生無分去也。國師曰：我爲衆生說，不爲諸聖說。僧曰：衆生聞後如何？國師曰：即非衆生。僧云：無情說法，據何典教？國師曰：灼然言不該典，非君子之所談。汝豈不見華嚴經曰：刹說衆生說，三世一切說。師舉了，潯山曰：我這裏亦有，祇是罕遇其人。師曰：某甲未明，乞師指示。潯山豎起拂子曰：會麼？師曰：不會。請和尚說。潯曰：父母所生口，終不爲子說。師曰：還有與師同時慕道者否？潯曰：此去禮陵攸縣石室相連，有雲巖道人，若能撥草瞻風，必

爲子之所重。師曰：未審此人如何。潯曰：他曾問老僧，學人欲奉師去時如何。老僧對他道：直須絕滲漏，始得。他道：還得不？違師旨也。無老僧道：第一不得道。老僧在遠裏，師遂辭潯山，徑造雲巖。舉前因緣了，便問：無情說法，甚麼人得聞？巖曰：無情得聞。師曰：和尚聞否？巖曰：我若聞，汝即不聞。吾說法也。師曰：某甲爲甚麼不聞？巖豎起拂子曰：還聞麼？師曰：不聞。巖曰：我說法，汝尚不聞，豈況無情說法乎？師曰：無情說法，該何典教？巖曰：豈不見彌陀經云：水鳥樹林，悉皆念佛念法。師於此有省，乃述偈也。太奇也太奇，無情說法，不思議。若將耳聽，終難會。眼處聞時，方可知。師問雲巖：某甲有餘習未盡。巖曰：汝曾作甚麼來？師曰：聖諦亦不爲。巖曰：還歡喜也未？師曰：歡喜則不無，如糞掃堆頭，拾得一顆明珠。

師問雲巖：擬欲相見時如何？曰：問取通事舍人。師曰：見問。次曰：向汝道甚麼。

雲巖舉問師，藥山問僧，見說汝解算虛實，云：不敢。山曰：汝試算老僧看。僧無對。汝作麼生？師曰：請和尚生日。或作月。

藥山夜參不點燈，山垂語曰：我有一句子，待特。或作頓。牛生兒，即向汝道。時有僧曰：特牛生兒也，何以不道。山曰：侍者把燈來。其僧抽身入衆。雲巖舉似師，師曰：其僧卻會，只是不肯禮拜。

雲巖到潯山，潯問：大保任底人，與那箇是一是二？巖曰：一機之絹，是一段。是兩段。師問曰：如人接樹。

一日雲巖謂衆曰：有箇人家兒子，問著無言，道不得底。師問他屋裏有多少典籍。巖曰：一字也無。師曰：爭得恁麼多知。巖曰：日夜不曾眠。師曰：問一段事，還得否？巖曰：道得卻不道。

雲巖作鞋次師問就師乞眼睛未審還得也無巖曰汝底與阿誰去也師曰良价無巖曰設有汝向什麼處著師無語巖曰乞眼睛底是眼否師曰非眼巖咄之

雲巖問尼衆汝爺在云在巖曰年多少云年八十巖曰汝有箇爺不年八十還知否云莫是怎麼來者巖曰猶是兒孫在師曰直是不恁麼來者亦是兒孫

院主遊石室回雲巖問曰汝去到石室裏許爲甚麼便回主無語師代曰彼中已有人占了也巖曰汝更去作麼師曰不可人情斷絕去也

師辭雲巖巖曰甚麼處去師曰雖離和尚未卜所止曰莫湖南去師曰無曰莫歸鄉去師曰無曰早晚卻回師曰待和尚有住處即來曰自此一別難得相見師曰難得不相見

師臨行又問雲巖和尚百年後忽有人問還認得師真否如何祇對巖曰但向伊道只這箇是師沈吟巖曰价聞黎承當箇事大須審細師猶涉疑後因過水觀影大悟前旨因有偈切忌從他覓迢迢與我疎我今獨自往處處得逢渠渠今正是我我今不是渠應須與麼會方始契如

如

師到參魯祖寶雲禪師禮拜侍立少頃而出卻再入來祖曰祇恁麼祇恁麼所以如此師曰大有人不肯祖曰作麼取汝口辯師便禮拜乃侍奉數月僧問魯祖如何是不言言祖曰汝口在

甚麼處云無口祖曰將甚麼喫飯僧無對師代曰他不飢喫甚麼飯

師到南源道明方上法堂源曰已相看了也師便下去至明日卻上問曰昨日已蒙和尚慈悲不知什麼處是與某甲已相看處源曰心心無間斷流入於性海師曰幾放過

師辭南源去源曰多學佛法廣作利益師曰多學佛法即不問如何是廣作利益源曰一物莫

遠即是

師到樟樹樟問曰來作什麼師曰親近和尚樟曰若是親近用動兩片皮作麼師無對曹山乃云

師初禮京兆興平和尚平曰莫禮老朽師曰禮非老朽平曰渠不受禮師曰渠不會禮師卻問如何是古佛心平曰既汝心是師曰雖然如此猶是某甲疑慮平曰若恁麼即問取木人去師曰某甲有一句子不借諸聖口平曰汝試道看師曰不是某甲

師辭平和尚平曰甚麼處去師曰沿流無定止平曰法身沿流報身沿流師曰總不作此解平乃拈掌保羅云洞山自是一家乃別云覓得幾人

師到著山薯曰汝已住一方又來這裏作麼師對曰良价無奈疑何特來見和尚薯召良价師應諾薯曰是什麼師無語薯曰好箇佛只是無光焰

師在泐潭見初首座有語曰也大奇也大奇佛界道界不思議師遂問曰佛界道界即不問祇如說佛界道界底是甚麼人初良久無對師曰何不速道初曰爭即不得師曰道也未嘗道說

甚麼爭即不得初無對師曰佛之與道俱是名言何不引教初曰教道甚麼師曰得意忘言初曰猶將教意向心頭作病在師曰說佛界道界底病大小初又無對次日忽遷化時稱師爲問殺首座价

師與密師伯經由次見鬆流菜葉師曰深山無人因何有菜隨流莫有道人居否乃共議撥草

躬行五七里間忽見羸形異貌人乃龍山和尚是也。亦云：放下行李問訊龍曰：此山無路，闍黎從何處來？師曰：無路且置，和尚從何而入？龍曰：我不從雲水來，師曰：和尚住此山多少時？耶？龍曰：春秋不涉。師曰：和尚先住此山先住？龍曰：不知。師曰：爲甚麼不知？龍曰：我不從人天來，師曰：和尚得何道理便住此山？龍曰：我見兩箇泥牛闖入海，直至于今絕消息。師始具威儀禮拜，便問：如何是主中賓？龍曰：青山覆白雪。師曰：如何是主中主？龍曰：長年不出戶。師曰：主賓相去幾何？龍曰：長江水上波。師曰：賓主相見有何言說？龍曰：清風拂白月。師辭退。

過水。

師與密師伯鋤茶園，師擲下鋤頭曰：我今日困一點氣力也無。伯曰：若無氣力，爭解恁麼道得？師曰：汝將謂有氣力底是也。

師與密師伯過水次，乃問曰：過水事作麼生？伯曰：不濕腳。師曰：老老大大作這箇語話。伯曰：偏作麼生道？師曰：腳不濕。

密師伯因把針次，師問作什麼？伯云：把針。師曰：把針事作麼生？伯云：針針相似。師曰：二十年同行作這箇語話，豈有與麼工夫？伯曰：長老又作麼生？師曰：如大地火發底道理。他日問師，知識所通莫不遊踐徑，處處乞師一言。師曰：師伯意何得取功？伯因斯頓覺下語非常。

師與密師伯行次，忽見白兔走過。伯曰：俊哉。師曰：作麼生？伯云：大似白衣拜相。師曰：老老大大作這箇語話。伯云：汝作麼生？師曰：積代簪纓暫時落薄。

師與密師伯過木橋，師先過了，拈起木橋曰：過來。伯云：价闍黎，師便放下木橋。

師會一官人，官人曰：三祖信心銘，弟子擬註。師曰：纔有是非，紛然失心，作麼生註。法眼代云：恁麼則弟子不註。

師與密師伯到百顏，百顏禪師處，顏問甚處來？師曰：湖南來。顏曰：觀察使姓甚麼？師曰：不得姓。顏曰：名甚麼？師曰：不得名。顏曰：還理事也無？師曰：自有廊幕在。顏曰：還出入否？師曰：不出入。顏曰：豈不出入？師便拂袖出去。顏來，日侵早入堂，召師，師近前。顏曰：昨日祇對上座，話不愜老僧意，一夜不安，今請上座，別下一轉語。若愜老僧意，便開粥，粥相伴過夏。師曰：卻請和尚問。顏曰：不出入，是如何？師曰：太尊貴生。顏乃開粥，粥同過夏。此語諸本誤改易文字，連作混事，非語，又開粥下，加飯字，最不可也。

師與密師伯行次，指路傍一院曰：裏面有人，說心說性。伯曰：是誰？師曰：被師伯一問，直得去死十分。伯曰：說心說性，底誰？師曰：死中得活。

歌頌

寶鏡三昧歌

如是之法，佛祖密付，汝今得之，宜善保護。銀盤盛雪，明月藏鷲，類之弗齊，混則知處。意在不言，來機亦赴。勸成窠臼，差落顛佇，背觸俱非。如太火聚，但形文彩，即屬染污。夜半正明，天曉不露。爲物作則，用拔諸苦，雖非有爲，不是無語。如臨寶鏡，形影相覩，汝不是渠，渠正是汝。如世嬰兒，五相完具，不去不來，不起不住，婆婆和和，有句無句，終不得物，語未正故。如重離六爻，偏正回互，疊而爲三，變盡成五。如荳草味，如金剛杵，正中妙挾，敲唱雙舉，通宗通塗，挾帶挾路，錯然則吉，不可犯忤。天真而妙，不屬迷悟，因緣時節，寂然昭著，細入無間，大絕方所，毫忽之差，不應律呂。今有願漸緣立，宗趣宗趣分矣，即是規矩，宗通趣極，異常流注，外寂中搖，係駒伏鼠，先聖悲之。爲法檀度，隨其顛倒，以緇爲素，顛倒想滅，背心自許，要合古轍，請觀前古，佛道垂成，十劫觀樹，如虎之缺，如馬之馮，以有下劣，寶几珍御，以有驚異，驚奴白牯，羿以巧力，射中百步，箭鋒相值，巧力何預，木人方歌，石女起舞，非情識到，專容思慮，臣奉於君子，順於父，不順非孝，不奉非輔，潛行密用，如愚如魯，但能相續，名主中主。

玄中銘并序

竊以絕韻之音，假玄唱以明宗，入理深談，以無功而會旨，混然體用，宛轉偏圓，亦猶投刃揮

斤，輪扁得手，虛玄不犯，回互傍參，寄鳥道而寥空，以玄路而該括，然雖空體寂然，不乖群動，於有句中無句，妙在體前，以無語中有語，迴塗復妙，是以用而不動，寂而不凝，清風偃草而不搖，皓月普天而非照，蒼梧不棲於丹鳳，激潭豈墜於紅輪，獨而不孤，無根永固，雙明齊韻，事理俱融，是以高歌雪曲，和者還稀，布鼓臨軒，何人鳴擊，不達旨妙，難措幽微，僞或用而無功，寂而虛照，事理雙明，體用無滯，玄中之旨，其有斯焉。

大陽門下，日日三秋，明月堂前，時時九夏，森羅萬象，古佛家風，碧落青霄，道人活計，靈苗瑞草，野父慈雲，露地白牛，牧人懶放，龍吟枯骨，異響難聞，木馬嘶時，何人道聽，夜明簾外，古鏡徒耀，空王殿中，千光那照，激源湛水，尚棹孤舟，古佛道場，猶乘車子，無影樹下，永劫清涼，觸目荒林，論年放曠，舉足下足，鳥道無殊，坐臥經行，莫非玄路，向道莫去，歸來背父，夜半正明，天曉不露，先行不到，未後太過，沒底船子，無漏堅固，碧潭水月，隱隱難沉，青山白雲，無根卻住，峰巒秀異，鶴不停機，靈木迢然，鳳無依倚，徒敲布鼓，誰是知音，空擊成聲，何人撫掌，胡笳曲子，不墮五音，隨出青霄，任君吹唱。

新豐吟

古路坦然誰措足，無人解唱還鄉曲。清風月下守株人，涼兔漸遙春草綠。天香襲兮絕芬馥，月色凝兮非照燭。行玄猶是涉崎嶇，體妙因茲背延促。殊不然兮何展縮，縱得然兮混泥玉。獬豸同欄辨者嗟，蕭蕭共處須分郁。長天月兮獨谿谷，不斷風兮偃松竹。我今到此得從容，吾師叱我相隨逐。新豐路兮峻仍巖，新豐洞兮湛然沃。登者登臨不動搖，遊者遊兮莫忽絕。荊榛兮

罷斷斷飲馨香。今味清肅負重登。臨脫屣迴看他。早是虛擔鞠來。駕肩兮履芳躅。至激心兮去
礙目。亭堂雖有到人稀。林泉不長尋常木。道不鶻雕非曲類。郢人進步何瞻矚。工夫不到不方
圓。言語不通非眷屬。事不然兮詎冥旭。我不然兮何斷續。慙慙爲報道中人。若戀玄關卽拘束。

綱要頌 三首

敲唱俱行

金鍼雙鎖備。叶路隱全該。寶印當空妙。重重錦縫開。

金鎖玄路

交互明中暗。功齊轉覺難。力窮忘進退。金鎖網鞵鞣。

不墮凡聖

事理俱不涉。回照絕幽微。背風無巧拙。電火燦難追。

五位

正位卻偏就。偏辨得是圓。兩意偏位雖。偏亦圓。兩意緣中辨得。是有語中無語。或有正位中來者。是無語中有語。或有偏位中來者。是有語中無語。或有相兼帶來者。這裏不說有語無語。這裏直須正面而去。這裏不得不圓轉。事須圓轉。然在途之語。總是病。夫當人先須辨得語句。正西而去。有語是怎麼來。無語是怎麼去。作家中不無言語。不涉有語無語。這裏喚作兼帶語。全無的也。他智上座。臨遷化時。向人道。雲巖不知有我。悔當初不向伊說。雖然如是。且不達於藥山蔡子。看他智上座。合作麼。生老婆也。南泉喚作異類中行。且密聞黎不知。

五位頌 五首

正中偏。三更初夜月明前。莫怪相逢不相識。隱隱猶懷舊日嫌。
偏中正。失曉老婆逢古鏡。分明覩面更無他。休更迷頭猶認影。
正中來。無中有路出塵埃。但能莫觸當今諱。也勝前朝斷舌才。
兼中至。兩刃交鋒不須避。好手猶如火裏蓮。宛然自有衝天氣。
兼中到。不落有無誰敢和。人人盡欲出常流。折合還歸炭裏坐。

功勳頌

異本作。上堂次。示問語。悟頌。

問。如何是向師曰。得力須忘飽。休糧更不饑。

聖主由來法帝堯。御人以禮曲龍腰。有時鬧市頭邊過。到處文明賀聖朝。

問。如何是奉師曰。只知朱紫貴。豈負本來人。

淨洗濃粧爲阿誰。子規聲裏勸人歸。百花落盡啼無盡。更向亂峯深處啼。

問。如何是功師曰。撒手端然坐。白雲深處問。

枯木花開劫外春。倒騎玉象趁麒麟。而今高隱千峯外。月皎風清好日辰。

問。如何是共功師曰。素粉難沉跡。長安不久居。

衆生語佛不相侵。山自高兮水自深。萬別千差明底事。鷓鴣啼處百花新。

問。如何是功師曰。混然無諱處。此外更何求。

頭角纔生已不堪。擬心求佛好羞慚。迢迢空劫無人識。肯向南詢五十三。

王子頌 五首

誕生

天然貴胤本非功德合乾坤育勢隆始末一期無雜種分宮六宅不它宗上和下睦陰陽順共氣連枝器量同欲識誕生王子父鶴騰香漢出銀籠

朝生

苦學論情世不群出來凡事已超倫詩成五字三冬雪筆落分毫四海雲萬卷積功彰聖代一心忠孝輔明君鹽梅不是生知得金榜何勞顯至勳

末生

久棲巖嶽用功夫草榻柴扉守志孤十載見聞心自委一身冬夏衣緣無澄凝愁看三秋思清苦高名上哲圖業就巍科酬極志比來臣相不當途

化生

傍外帝化為傳持萬里山河布政威紅影日輪疑下界碧油風冷暑炎時高低豈廢尊卑奉五符蘇途遠近知妙印手持煙塞靜當陽那肯露機

內生

九重深密復何宜挂弊絲來顯妙傳祇奉一人天地貴從他語道自分權紫羅帳合君臣隔黃閣簾垂禁制全為汝方隅官屬戀途將黃葉止啼錢

真讚

以這箇影像為洞山主人徒觀紙與墨不是山中人

附載

自誠

不求名利不求榮，只歷隨緣度此生。三寸氣消誰是主，百年身後謾虛名。衣裳破後重重補，糧食無時旋旋營。一個幻軀能幾日，為他間事長無明。

規誠

夫沙門釋子，高上為宗，既絕攀緣，宜從淡薄。割父母之恩愛，捨君臣之禮儀。剃髮染衣，持巾捧鉢，履出塵之徑路，登入聖之階梯。潔白如霜，清淨若雪。龍神欽敬，鬼魅歸降。專心用意，報佛深恩。父母生身，方需利益，豈許結託門徒，追隨朋友。事持筆硯，馳騁文章。區區名利，役役趨塵。不思戒律，破卻威儀。取一生之容易，為萬劫之艱辛。若敷如斯，徒稱釋子。

辭北堂書

伏聞諸佛出世，皆從父母而受身。萬榮與生盡假，天地而覆載。故非父母而不生，無天地而不長。盡沾養育之恩，俱受覆載之德。嗟夫！一切含識，萬象形儀，皆屬無常。未離生滅，雖則乳哺情至，養育恩深。若把世賂供資，終難報答。作血食侍養，安得久長。故孝經云：雖日用三牲之養，猶不孝也。相牽沈沒，永入輪回。欲報罔極深恩，莫若出家功德。截生死之愛河，越煩惱之苦海。報千生之父母，答萬劫之慈親。三有四恩，無不報矣。故經云：一子出家，九族生天。良价捨今世之

身命，誓不還家。將永劫之根塵，頓明般若。伏惟父母心開，喜捨意莫。攀緣學淨飯之國王，効摩耶之聖后。他時異日，佛會相逢。此日今時，且相離別。良非違違甘旨，蓋時不待人。故云：此身不向今生度，更向何時度。此身伏翼尊懷，莫相寄憶。頌二首

未了心源度數春，翻嗟浮世謾逡巡。幾人得道空門裏，獨我淹留在世塵。謹具尺書辭眷愛，願明大法報慈親。不須洒淚頻相憶，譬似當初無我身。

巖下白雲常作伴，峯前碧障以為鄰。免干世上名與利，永別人間愛與憎。祖意直教言下曉，玄微須透句中真。合門親感要相見，直待當來證果因。

後寄北堂書

良价自離甘旨，杖錫南遊。星霜已換於十秋，岐路俄經於萬里。伏惟孃子收心慕道，攝意歸空。休懷離別之情，莫作倚門之望。家中家事，但且隨時轉多。日增煩惱，阿兄勤行孝順。須求冰裏之魚，小弟竭力奉承。亦泣霜中之笋，夫人居世上。修己行孝，以合天心。僧在空門，慕道參禪。而報慈德，今則千山萬水，杳隔二途。一紙八行，聊伸寸意。頌

不求名利不求儒，願樂空門捨俗徒。煩惱盡時愁火滅，恩情斷處愛河枯。六根戒定香風引，一念無生慧力扶。為報北堂休悵望，譬如死了譬如無。

附懷回書

吾與汝夙有因緣，始結母子恩愛情分。自從懷孕，禱神佛願生男兒。胞胎月滿，性命絲懸。得遂愿心，如珠寶惜。穠穠不嫌於臭惡，乳哺不倦於辛勤。稍自成人，遂令習學。或暫逾時不歸，

便作倚門之望來書堅要出家父亡母老兄薄弟寒吾何依賴子有拋娘之意娘無捨子之心一自汝往他方日夜常洒悲淚苦哉苦哉今既誓不還鄉即得從汝志不敢望汝如王祥臥冰丁蘭刻木但願汝如目連尊者度我下脫沈淪上登佛果如其不然幽譴有在切宜體悉

洞山悟本禪師語錄之餘

隱者子遊于山陰得書讀之皆祖語也問有子未嘗採者雖片玉出崑岡故附後

日本沙門 宜默玄契 校勘

師問雲巖擬寫和尚真得也無巖云幾得成師曰尋常寫真得七八巖云猶是失在師曰不失時如何巖云直得十成師曰古人道直得十成不似時如何巖云他無成數

雲巖共師鋤薑地次巖就先德事師問此人什麼處去也巖良久云作麼作麼師曰太遲生也師問雲巖未有陰界時還道得否巖云爾今還有否雪峰般柴次乃于師面前拋下一束師曰重多少峯云盡大地人提不起師曰爭得到這裏峯無語

壽山解禪師行腳時造師法席師問曰闍黎生緣何處云和尚若實問某甲即是闍中人師曰爾父名什麼云今日蒙和尚致此一問直得忘前失後

師勸僧曰心法雙忘性即真第幾座僧云第二座師曰因什麼不與他第一座無對有一人代云非心非法師曰心法雙忘即是非法何更是道無對師自代曰真不得座

示衆曰知有底人解入地獄不知有底人門外走過師問新羅僧未過海時在什麼處無對自代曰祇今過海也在什麼處

師曰今時學者欲得學直須體取佛向上人始得如今學者只知有十方諸佛且不知有十方諸佛出身處空知有佛不得成佛

師問僧三人同行一人解語一人不解語那箇一人是什麼對云此豈不是辨得主客也師曰是也云如何是客師曰語與不語俱是客又曰如人解弄珠不觸手不落地即今往來底喚作什麼即得無對師自代曰不得不得

師看上座來禮拜師曰來作什麼云不為和尚來師曰若禮尊者某甲則偏坐慎微長老手把拄杖一僧指云這箇拄杖出何處微云雪地出師不肯自代曰如今出也有入辨得麼

黃葉從鹽官領三百衆到南泉每為三百人說法次南泉便到說法處云借此道場還許一問否樂云便請泉問定慧等學明見佛性此理如何樂云十二時中不依倚一物泉云莫是長老見處麼樂云不敢泉云誓水鏡即且置草鞋錢教什麼人還有僧舉以師師曰責狀了喫棒

師問僧個名什麼僧云請和尚安名師卻稱良价僧無對雲居代云怎麼則無出頭處又云怎麼則總被和尚占卻也

阿那頭

師到田畔有師僧插田有一僧倒插師問閻黎因什麼倒插對云心中活在師不言歸院翌日衆僧普請出次日先出候問昨日倒插田僧出來其僧未後出門師問閻黎昨日東園斫竹誰其僧同測云不知師曰閻黎什麼處人云鄧州人師曰老僧行腳時曾往過來

僧問師云承和尚說刮骨禪請和尚四方八面刮師曰勿刮處云和尚幸是好手為什麼刮不得師曰偏還問道世醫拱手問如何是善知識眼師曰番然無泊問十二時中將何奉獻師曰無物問身命悉切處如何師曰莫雜種云將何奉獻師曰將虛空奉獻云虛空與非空將來不相似師曰道相似也得道不相似也得云如何是相似師曰目前云如何是不相似師曰目前不是問返本還源時如何師曰如一片雪從天降下若絲髮大物掛著則不到地問暫時不在如同死人如何師曰好埋卻又曰鼻也又曰命絕也

師法嗣其出史傳者二十七人其有幾語者十有九人傳法正宗記曰大鑿之六世曰筠州洞山良价禪師其所出法嗣凡二十六人一日雲居道膺者教證弘覺禪師塔一日撫州本寂者教證元證禪師塔一日洞山道全者第二世中洞山一日龍牙居遁者教證弘覺禪師塔一日京兆休靜者教證寶智大師無

一日京兆觀子和尚者教證元證禪師塔一日筠州普滿者教證弘覺禪師塔一日台州道幽者教證寶智大師無一日洛京通儒者教證元證禪師塔一日越州乾峯和尚者教證弘覺禪師塔一日吉州禾山和尚者教證寶智大師無

一日潭州寶蓋山和尚者教證元證禪師塔一日益州通禪師者教證弘覺禪師塔一日高安白水本仁者教證寶智大師無疎山光仁者教證元證禪師塔一日澄州欽山文遠者教證弘覺禪師塔一日天童義禪師者教證寶智大師無

一日益州白禪師者教證元證禪師塔一日潭州文殊和尚者教證弘覺禪師塔一日舒州白和尚者教證寶智大師無一日青陽通玄和尚者教證元證禪師塔日本人瓦屋能光禪師亦其一也師本朝高僧傳曰航海入唐

者師本朝高僧傳曰航海入唐

洞山悟本禪師語錄 終

書洞山語錄尾

龍之爲物其非常邪人能觀者寡矣丹青以畫告人以龍人知其爲龍不信者未之有後觀真龍告之以龍人且怪焉方今之世孰不說法囂囂其教似則似真則否如彼畫龍然非惟畫龍不與雲爲霖而已問李朱幾爲病於戲可懼屬者有禪人宜默者再編集洞山語要來以告予予薰香稽首看讀一過謂之曰近世支那禪師瑞白雪公有言曰洞山古刹我等祖基傾頽已久瓦礫不存今幸孤涯上座住持欲重新祖塔我輩爲洞上兒孫烏可坐視乎由是觀之知重修業蔭彼土今也於予亦資始祖錄乎我國宜矣知所遵也吾儕苟辱遠裔安不喜圖命工鉅梓以廣其傳俾參學者知丹青外寔有神龍雲行雨施千古如此請莫怪焉

元文己未三月之八日

鷹峯源光主人覺城叟請詢和南拜撰

國譯永平道元禪師語錄

解題

本録は日本曹洞宗の開祖承陽大師道元禪師の著なり。初め大師の法嗣詮慧・懷英・法孫義演等、大師の上堂・小參・法語・贊題・偈頌等を編纂して十卷となし、題して「永平廣録」といひ、大師の曾孫寒巖義尹が之を撰へて入宋し、道元の法兄たる瑞巖の義遠に示して其の較正を請へり。茲に於て義遠、其の全編中より最も高秀なるものを抜いて一卷となす。本書即ち是れなり。故に本書は大師一代の全録に比すれば、固より崑山の片玉に過ぎずと雖も、其の所説に至つては言言句句、苦口丁寧にして、恰も飯を嚙んで嬰兒に與ふるが如く、眞に大師の語要の粹ともいふべし。

本録は南北朝の初め、即ち延文三年に越前寶慶寺の大檀越藤原知冬の發願助縁に依つて寶慶の曇希、之を開版し、其の後、正保五年、京都に於て復た再版せられしも、今は兩版とも容易に獲難し。唯だ弘く流布するものは、本國譯本の底本となりし寛文十三年版のみなり。又、廣録十卷は延寶元年、三山道白の發願によつて刊行せられたり。

傳を按ずるに、大師、諱は道元、一に希玄。久我通親の子なり。土御門帝の正治二年京師に生る。幼にして父母を喪ひ、無常を觀じて脫白求法の志を懷き、十三歳の時、潜かに叡山に登りて外舅良顯法師に投ず。翌年、天台座主公圓僧正に從つて剃髮し、菩薩戒を受け、台宗の教觀を究む。時に三井寺の公胤僧

山の指示により、雲巖曇巖に従つて參究甚だ努む。後、一旦、雲巖の許を辭して再遊し、水を過りて影を
観るに際し、豁然として大悟し、乃ち一偈を作つて曰く、「切忌從他覓。返々與我疎。我今獨自往。處處
得逢渠。渠今正是我。我今不是渠。應須互懺懺會。方始契一如如」と。是れ所謂、過水悟道の偈なり。
遂に雲巖の衣鉢を嗣ぐ。大中の末、新豐山に住して宗風を擧揚し、後に筠州の洞山普利院に遷る。座下の
衆徒、常に數百人に滿つ。唐の懿宗皇帝咸通十年（皇紀一五二八）、疾を示し、三月八日門下に遺教し、儼
然として坐化す。壽六十有三、臘四十二。勅して悟本大師と諡し、塔を慧覺と曰ふ。師は定慧圓明にして
妙唱無比、その打出する所の龍象、擧げて數ふべからざれども、其の中、最も名あるものは二十六人、就
中、曹山本寂は出藍の響あつて門風大いに震ひ、遂に曹洞の一宗を成すに至る。著、語錄一卷あり。本書
即ち是れなり。

國譯永平道元禪師語錄序

超宗異目、① 慥暴 ② 生猛、峭壁 ③ 乖崖 ④ 孤危 ⑤ 嶮絶なるに非ずんば、何ぞ以て衲僧 ⑥ 眼眩の
疾を起し、邪見 ⑦ 枝蔓の根を抜くに足らんや。古に在つては乏しからず、今に居しては誰とか爲る
や。 ⑧ 太白老人 ⑨ 淨
禪師、 ⑩ 奮然として一
たび出で、獨り此の
風を振ふ、諸方之を
憚り、學者之を畏る。日
本元公禪師、 ⑪ 海南を
⑫ 截り來つて、直に其
の ⑬ 室に入つて、心
塵脱略の處に向つて、
生涯を喪盡す、故山に
⑭ 枝蔓の根。無明を病根とす。

- ① 慥。篤實の貌、言行相應也。
- ② 暴。猛也、速急也、これは超宗をいふ。
- ③ 生猛。其の眼許を出でて諸人之を畏る、これを異目といふ。
- ④ 峭壁。乖は則ち俗に違ひ、崖は物を利せず。
- ⑤ 孤危。これは峭壁を釋す。
- ⑥ 嶮絶。これは乖崖を釋す。
- ⑦ 眼眩。めまひ也、書經に、「若し憂眩眩せざればその疾癒えず」と。
- ⑧ 太白。天童寺なり、寧波府に在り、晉の時の僧義興にはじまる。
- ⑨ 淨禪師。長翁如淨禪師、雪竇鑑の法嗣。
- ⑩ 奮然。鳥の羽毛を張る觀なり。
- ⑪ 海南。長れはさがる。
- ⑫ 截海。渡也、香象の流を截つて然も過ぎて、更に疑滯なきがごとし」と百丈はいふ。
- ⑬ 南來は。日本は百濟や新羅の東南にあり、師歳二十有四、貞應二年三月宋に入り、明州の界に著くと行錄に見ゆ。
- ⑭ 衲僧。論語の先達篇に、「由也堂に升れり、未だ其の室に入らず」といふより出づ。
- ⑮ 眼眩。身心脱略。身心脱略に作るべし。
- ⑯ 許露。人の惡を發揚する、あばきあらはす也。
- ⑰ 義尹。日本應後の大慈寺開山寒岩義尹。
- ⑱ 序引。狐涎は言語をいふ、それをとりあつめて始末するを引といふ。
- ⑲ 融鞍橋。文字語言をいふてた

歸坐して、情を盡して
① 許露す。其の徒の義
尹、狐涎を採撫して、
② 序引を爲らんことを
欲す、則ち之が爲に曰く、「汝が師横説堅説、未だ曾て舌頭を動着せず、錯つて、驢鞍橋を認めて、
阿爺の下領と作すこと莫れ。」
③ 景定甲子十一月旦

とへる也、羊の骨を以て驢鞍
を作る、其の曲れる也、橋の
如くなるをいふ。
④ 阿爺下領。所説の宗義にたと
へる、阿は發音の辭、父を尊

となす。
⑤ 景定甲子。宋の理宗景定五年
也、日本の八十九代龜山天皇
文永元年に當る。
⑥ 無外義遠。瑞岩の無外義遠は

道元禪師の法兄也、天童淨老
の法子、爲に序して以て公驗
を靈鷲淨慈に求めしむ、眞歇
五世の法孫。

⑦ 無外義遠書す

國譯永平道元禪師語錄

初住本京宇治縣興聖禪寺語錄

師、嘉禎二年丙申十月十五日、當山に就いて
開堂、拈香祝聖 罷つて、

上堂、
① 山僧 叢林を歷ること多からず、只
だ是れ等閑に ② 天童先師に見えて、 ③ 當下に眼
横鼻直なることを認得して、人に瞞せられず、
便乃ち空手にして郷に還る。所以に一毫も佛法
なく、 ④ 任運に且く時を延ぶ。朝朝日は東より
出で、夜夜月は西に沈む。雲收つて山骨露はれ、
雨過ぎて四山低る。畢竟如何。良久して云く、

侍者 詮慧 編

① 山僧。僧侶が自ら自分を指し
ていふ名稱にして、拙僧と同
意なり。都市を離れたる山間
に住して、世間と没交渉なる
愚者といふ謙遜したる語な
り。
② 叢林。(Vindhya Vana)とは
衆僧の和合して、同學安居す
る道場にして、大智度論に「僧
伽、衆に衆といふ、多くの比丘
一處に和合す、是を僧伽と名
づく、譬へば大樹の叢り衆る、
是れを名づけて林となす、一

一の樹を名づけて林となさ
ず、一々の樹を除いて亦林な
きが如し、是の如く一々の比
丘を名づけて僧となさず、一
一の比丘を除けば亦僧なし」と、
蓋し此に因由するなるべ
し、所謂僧堂、禪堂、專門道
場等皆同意なり。
③ 天童先師。天童如淨禪師の、
とにて、先師とは大師の本師
なるが故なり。師は支那天童
山景德寺に住し、雪竇智鑑の
法嗣なり、隨侍の衆徒常に數

「三年には一閏に逢ふ、雞は五更に向つて啼く。」久立下座。(副詞を録せず)

上堂、^①舉す、^②南泉、^③黃檗に問ふ、「甚の處にか去るや。」^④榮云く、「菜を擇び去る。」^⑤泉云く、「甚麼を將てか擇ぶや。」^⑥榮、^⑦刀子を豎立す。

泉云く、「只だ客となることを解して、主となることを解せず。」^⑧師云く、「南泉と黃檗とは故に是れ、^⑨作家の相見なり。若し是れ、^⑩與聖ならば別、^⑪商量あり。黃檗の刀子を豎起する時に當つて、^⑫南泉に代つて他に向つて道はん、我が

王庫の内、^⑬是の如きの刀なし。參。」^⑭上堂、^⑮衆に示して云く、「^⑯兄弟に告げ奉る、若し堂内廊下、^⑰谿邊樹下、^⑱相見の處に於て互に相合掌低頭して、^⑲如法に、^⑳問訊せよ、永く恒規と爲さん、只だ佛祖相見の如くんば豈に禮儀

なからんや。佛在世の日、或は燒香散香、或は雨花し獻賣して、^㉑四大を慰問し、^㉒度生を咨詢す。永嘉、^㉓曹谿に到る時、^㉔錫を振つて而して立つ。皆是れ佛祖相見の儀式なり。切切に遵守して、^㉕庶幾はくは、^㉖祖宗を味まさらんことを。記得す、僧、^㉗睦州に問ふ、「一言に道ひ盡す時如何。」^㉘州云く、「老僧偏が鉢裏に在らん。」^㉙又僧、^㉚雲門に問ふ、「一言に道ひ盡すとき如何。」^㉛門云く、「古今を裂破す。」^㉜人あり、^㉝山僧に一言に道ひ盡す時如何と問はゞ」と云つて拂子を擲下す。衆皆頭を擧す。師云く、「可惜許、一柄の拂子。」

上堂に云く、「^㉞身心脱落、^㉟聲色俱に非なり。箇の中に悟なし、^㊱何の處にか迷を著けん。座中誰か是れ江南の客、^㊲鷓鴣聲外の詞を聽取せ

百人を下らず、行持綿密、天下叢林の範を垂る、大師亦其の會下に修行し、親しく曹洞宗の衣鉢を傳受して歸る、紀元一八八九年即ち紹定己丑年六十六歳を以て遷化す。
①當下。又は直下ともいひ、即座にの意なり。
②任運。自然の義。
③五更。更とは時の標準にして支那に於ては一夜を五時に區分し、初更、二更、三更、四更、五更とす、五更は即ち黎明の頃に當り、午前三時より五時頃迄の間をいふ。
④舉す。舉示又は舉唱の意にして、大衆に對して古則公案を舉示し提唱するをいふ。
⑤南泉。南泉普願禪師のこと、馬祖道一の法嗣なり。
⑥黃檗。黃檗希運禪師のこと、百丈懷海の法嗣にして禪機激烈、機鋒峻烈を以て開ゆ、幼

の時特に「ひんでい」と讀み、同聲同答のことをいふ。の相見。對面と同意也。
⑧問訊。合掌して曲躬低頭することにして、長者に對したる時にする禪門の禮法なり。
⑨四大。吾人の身體のこと、身體は地、水、火、風の四大元素より成るが故なり。
⑩度生。一切衆生を濟度するの意。
⑪永嘉。永嘉大師といふ、眞覺禪師のことなり、永嘉とは師の生地の名なり、天台の學に通じ後曹溪に參じて大悟す、證道歌は師の著なり。
⑫曹谿。又は曹溪とも書く、支那曹洞宗の祖、六祖慧能禪師のことなり。曹谿は地の名、此の地の寶林寺は慧能禪師住して、祖道を擧揚せり。
⑬祖宗。佛祖の宗旨をいふこと。
⑭記得。記憶の義なれども、轉

時黃檗山に出家し、常に故郷を慕ひ、所住の地宛陵の開元寺を稱して、自ら黃檗山と名づく。
⑮師。今茲に師と著者の語にして、如淨禪師を指していふなり。
⑯作家。又は作者といふ、明眼の宗師を稱す。
⑰與聖。大師の自稱。此の時は與聖寺に住せられしがためなり。
⑱商量。問答商量と熟字する字にして、商人が物品を賣買する時、互に其の價を論量して定むることより轉じて、問答審議の意となる。
⑲王庫云々。涅槃經如來性品にある王と其の王子の親友たる一貧子との問答に於ける王の語にて、かやうな閑家具なしとの意なり。
⑳兄弟。法の上の兄弟にて、此

して舉示の義に用ふ。
㉑睦州。睦州の道蹤禪師のこと、黃檗の法嗣、睦州龍興寺にありて大いに宗風を擧揚せしが故に此の名あり、機鋒峻烈、靈門の一足を折りて大悟せしめたるは有名なる話なり。
㉒雲門。雲門宗の祖、文偃禪師のこと、雪峰義存の法嗣にして、靈門山に住せしが故に名づく。交性慧敏、加ふるに禪機激烈、古來禪門有数の作家たり。
㉓身心脱落。身心共に我が物なりとの執着を離れて、無我の境界に入るをいふ。大師は此の語に依つて豁然として大悟せられり。洞山瑩燈錄に「一夜翁(天童如淨)巡堂見二僧打睡、責之曰、參禪要身心脱落、何得只管打睡、師從旁聞之、廓然契悟云々。」
㉔鷓鴣。支那の南方に居る鳥の

時黃檗山に出家し、常に故郷を慕ひ、所住の地宛陵の開元寺を稱して、自ら黃檗山と名づく。
⑮師。今茲に師と著者の語にして、如淨禪師を指していふなり。
⑯作家。又は作者といふ、明眼の宗師を稱す。
⑰與聖。大師の自稱。此の時は與聖寺に住せられしがためなり。
⑱商量。問答商量と熟字する字にして、商人が物品を賣買する時、互に其の價を論量して定むることより轉じて、問答審議の意となる。
⑲王庫云々。涅槃經如來性品にある王と其の王子の親友たる一貧子との問答に於ける王の語にて、かやうな閑家具なしとの意なり。
⑳兄弟。法の上の兄弟にて、此

して舉示の義に用ふ。
㉑睦州。睦州の道蹤禪師のこと、黃檗の法嗣、睦州龍興寺にありて大いに宗風を擧揚せしが故に此の名あり、機鋒峻烈、靈門の一足を折りて大悟せしめたるは有名なる話なり。
㉒雲門。雲門宗の祖、文偃禪師のこと、雪峰義存の法嗣にして、靈門山に住せしが故に名づく。交性慧敏、加ふるに禪機激烈、古來禪門有数の作家たり。
㉓身心脱落。身心共に我が物なりとの執着を離れて、無我の境界に入るをいふ。大師は此の語に依つて豁然として大悟せられり。洞山瑩燈錄に「一夜翁(天童如淨)巡堂見二僧打睡、責之曰、參禪要身心脱落、何得只管打睡、師從旁聞之、廓然契悟云々。」
㉔鷓鴣。支那の南方に居る鳥の

よ。」

上堂、忽ち佛法の二字を聞くも、早く是れ我が耳目を汚す。諸人未だ法堂に到らざるに、既に三十棒を喫し了れり。然も是の如くなりとも雖も、山僧今日也た是れ衆のために力を竭さん。喝、一喝して下座す。

上堂、諸人、祖師を誰らんと要す麼、海嶽を掀翻して知己を求む。

二祖を誰らんと要す麼、乾坤を撥亂して太平を建つ。曼履知らず何れの處にか去る、宗風千古嘉聲を播く。

上堂、釋迦老子道く、「明星現する時我れと大地の衆生と同時に成道す」

と。且く道へ、作麼生か是れ所成底の道、若し人會得せば、釋迦老子慚愧を著くるに處なけん。甚としてか此の如くなる。速かに道へ速かに道へ。

上堂、直に道ふ本來無一物と、誰か知る暹界曾て藏さざることを。下座す。

開爐上堂、與聖が爐鑪開張す、佛祖之れを跳れども出でず、箇の中の意を問ふものあらば、今朝は是れ十月初一。

上堂、擧す、東印土の國王、般若多羅尊者を請じて齋する次、王即ち

名、形は鶴に似て稍大きく、

背部は灰著にして、褐色の斑

點あり、孟春を朝して啼く。

法堂。説法堂の意にして、七

堂伽藍の一なり。

祖師。今は達磨を指すなり。

二祖。支那禪宗第二祖神光

可禪師のこと。

曼履。達磨曼履を提げて天竺

に還りしといふ故事をいふ。

爐鑪。爐は火函、鑪は送風器

にして、二字にて火工が金剛

を鍛冶精錬するの器、禪門に

て人物を鍛冶陶治する道場の

意に用ふ。

東印土。東印度に同じ。

般若多羅尊者。西天第二十七

祖にして東印度婆羅門種の人、不知密多尊者に就いて出家し、大法を嗣續す。

齋。僧及び僧侶に食事を供養することをいふ。

僧の自ら稱する代名詞

にして、自己は道人なれども

未だ修道の貧しきものといふ

謙遜せし語なり、道徳の乏し

きないふ。

白石夜兒を生む。二句無心の

妙用、動靜不二の妙趣をいふ。

迦葉尊者。西天付法の第一祖

摩訶迦葉(Mahakasyapa)にして、常に頭陀行を修して意らず、佛十大弟子中上行第一と稱せらる、靈山會上世尊拈華の當處に破顏微笑し、正法眼藏涅槃妙心を付囑せられ、續傳の第一祖となる。

沙彌(Sramanaka)の音譯にして、息怒、勸策男の意なり。惡を息めて慈惠の行を修する出家の男子の稱にして、修行未熟にして比丘と稱することを得ざるまでをいふ。

臘月。一年の最終の月のこと、即ち十二月のことないふ。

問ふ、「諸人盡く經を轉す、尊者甚麼としてか轉せざるや。」尊者曰く、「貧道出息衆縁に墮せず、入息陰界に居せず。常に是の如きの經を轉するこそ百千萬億卷」と。師擧了了つて云く、「更に道理を説け、看ん。」上堂、但だ見る青山の常に運歩するを。誰か知る。白石の夜兒を生むことを。下座す。

上堂、擧す、昔日迦葉尊者泥を踏む時、沙彌あり問ふ、「尊者何ぞ自ら爲すことを得たるや。」尊者云く、「我れ若し爲さずんば、誰か我がために爲すことをせん」と。師云く、「心は臘月の扇の如く、身は寒谷の雲の如し。若し我が爲すことを見得せば、便ち誰か爲すことを見得せん。二塗俱に涉らず、鐵壁峭危危。」

上堂、與聖久しく衆のために説話せざれども、佛殿僧堂、溪聲樹影、總に諸人のために説きたれり。諸人聞得するや也た未だしや。若し聞得すと道はゞ、箇の什麼をか説くや。若し聞かすと道はゞ、自己に辜負す。

上堂、人あり、一句を道ひ得ば、法界の量滅するも、未だ免れず春夢に吉凶を説くことを。更に若し一句を道ひ得て、塵を破つて經を出すも、也

た是れ紅粉佳人を飾るなり。直下に非夢の眞覺を照了せば、便ち見ん法界も未だ大となさず、微塵も小となさざることを。兩つながら既に實ならずんば、一句何にか憑らんや。井底の蝦蟇は月を吞卻し、天邊の玉兔は自ら雲に眠る。

上堂、要妙を拈提すれば、露柱眉を皺め、出格を玄談すれば、烏龜火に向ふ。平實無事にして、古今を褒貶するも、豈に能く自救せん。焉ぞ敢て佗を救はんや。諸人此を離れて作麼か商量せん。是れ三年間に逢ひ、九月重陽なること莫しや。是れ大盡は三十日、小盡は二十九日なること莫しや。斯の如くの見解をば、喚んで、驢前馬後の漢となす。興聖敢て道ふ、直饒ひ恣麼なるも、也た是れ驢前馬後の漢と。

上堂、僧問ふ、「如何なるか是れ古佛心。」答へて云く、「鶯啼處處同。」問ふ、「如何が是れ本來の人。」答へて云く、「腦肢眼を蓋ふの漢。」師乃ち云く、「問あり答あるは、屎尿狼藉。問なく答なきも、雷霆霹靂。十方大地平沈し、一切虚空迸裂す。外より放入せず、内より放出せず、一槌痛く下さば萬事了畢せん。依前として鼻孔大頭垂る。一對の眼睛烏律律。」上堂、「如今、雲水の兄弟還つて得る底の人あり麼。」時に僧あり、出でて

①拈提。提起、舉示の義なり。
②驢前馬後の漢。驢の前面に趨り、馬の後面に趨ふは馬丁、奴僕なり、漢は賤丈夫を罵つていふ語、故に主人公にあらす、下賤の奴僕なりといふ意なり。
③本來人。本來具有する自己の眞面目の意。
④腦肢は雙樂頭巾に四肢あるものたふ、頭巾を被りて面をあらはさざるも、その人なりといふ意なり。
⑤眼睛烏律々。烏は黒を示し、律々は眼の珠の飛び出したる貌にて、抜け出てて恰例な貌なり。
⑥雲水。禪僧の遍多行脚するや、行雲流水の如くにして去

禮拜す。師云く、「有ることは自らあり、只だ是れ未だ。僧問ふ、「箇の甚麼をか得るや。」師云く、「道ふことを信せずや。」師乃ち云く、「得る底の人を識らんと要する麼。心人に負かざれば、面に慚づる色なし。」

上堂、赤心片片誰か知得せん、笑殺す。黃梅路上の兒。
上堂、一步を進むるも未だ他の國王の水草を犯すことを免れず、一步を退くるも未だ祖父の田園を踏著することを免れず。進まず退かず、還つて出身の路ありや也た無しや。良久して云く、「權に垢衣を掛く、是を佛と云ふ、卻つて珍御を装ふとき復た誰とかなさん。」

僧海、首座の爲にする上堂、海、臨終に頰あり、云く、「二十七年、古債未だ轉せず。虚空を踏躑して、獄に投すること箭の如し。」師舉し了つて云く、「夜來僧海枯る、雲水競ふて嗚呼す。徹底汝方に見よ、還つて忌む。見刺なきことを。欄胸に一拂すれども猶は未だ瞥ならず。一たび死して今方に再び蘇らん。」

上堂、人人盡く衝天の志あり、如來の行處に向つて行くことなけれ。即ち下座す。

來任運なるが故に、雲水と名づく。李白が胡僧の歌に「心將三流水目一清淨、身與浮雲無是非」とある。
②黃梅路上の兒。黃梅は地名にして黃梅縣にあり、路上の兒とは四祖道信禪師の傳に「一日黃梅縣に往き路上に一小兒に逢ふ、其の骨相秀異なり、師問ふ、汝の姓は何ぞ、兒答へて曰く、姓は即ち有り、是れ常の姓に非ず、師又問ふ、是れ何の姓ぞ、兒曰く、是れ佛性なりと、師其の法器たるを識り、侍者をして母に之が出家を求む、母風縁を以ての故に諾す、後傳衣す」と。
③首座。叢林に於て大衆の首位に居る故に名づけ、又第一座ともいふ。
④見刺。宗鏡錄に曰く「深く見刺を排つて永く疑根を斷す」と、稜角ある見解のこと。
⑤六代の祖師。支那の禪宗達磨

上堂、一句や也た水消瓦解、一句や也た壑に塞り溝に填つ。且く道へ、三世の諸佛、六代の祖師、那箇の一句の中に向つてか人の爲にするや。興聖が這裏、諸佛未だ曾て説かず、祖師未だ曾て舉せざる底の一句あり、諸人に舉似せん。良久して云く、「了。」

大師を初祖とし、二祖慧可、三祖僧肇、四祖道信、五祖弘忍、六祖慧能の六祖師をいふ。

興聖寺上堂終

開闢次住越州吉祥山永平寺語錄

侍者懷契編

師、寛元二年甲辰七月十八日に於て、當山に徒る。

上堂に云く、「獨存無倚、脱落全眞。混然として萬象の中に明歷然たり、卓爾として不疑の地に活潑潑たり。月の水に印して痕なきが如く、風の空に行いて動せざるに似たり。恁麼に委悉し得去らば、陋巷には騎せず金色の馬、廻途卻つて著く破爛衫。」
上堂、人人夜光の珠を握り、箇箇荆山の玉を抱く。若し回光返照せざれば、甘じて寶を懐いて邦に迷ふことを爲さん。道ふことを

①委悉。委曲に了得するの意。
②破爛衫。破れた衣服のことにて、第二義門に下り、和光同塵を辭せざるをいふ。
③夜光の珠。金鑿故事に出づる夜中光を放つ玉なり、今は佛性のことを此の珠に譬へしなり。
④荆山の玉。楚人卞和、文王の位に即く時、玉を懐いて荆山の下に哭するの玉にして、意は前の夜光の珠と同意なり。
⑤回光返照。自己に反求するの意。普勸坐禪儀に「須らく言を尋れ語を還ふの解行を休すべし、須らく回光返照の退歩

を學すべし」と。即ち語言を離れ、麈尾に自己是れ什麼物ぞと功夫するをいふ。
⑥寶を懐いて邦に迷ふ。論語の陽貨に曰く、「其の寶を懐いて其の邦に迷ふ、仁と謂ふ可き乎」と。自己の本有を忘れて他に求むるをいふ。
⑦遠磨西來。遠磨大師の印度より支那に來るをいふ。
⑧慈明の圓和尙。正宗賢に「師諱は楚圓、汾陽に嗣ぐ、全州李氏の子なり、少にして善生となる、母賢にして出家せしむ、谷泉瑪瑙と尊しく汾陽に見えて旨を悟る云々」と。

見すや、耳に應ずる時は、空谷の大小の音聲足らざることなきが如く、眼に應ずる時は、千日の萬像影質を逃るること能はざるが如し。若し聲色を非として外邊に求むれば、^①達磨西來すとも也た大いに屈せん。

上堂に云く、「先來、^②慈明の圓和尚の會中に、大叢林小叢林の說あり。

且く道へ、甚麼をか大叢林となし、甚麼をか小叢林と喚ぶや。若し衆の寡

多、院の大小を以て、叢林の量をなさば、則ち戲論となる。縱使ひ衆多き

も、而も抱道の人なきときは、則ち是れを小叢林となし、縱使ひ院小き

きも、而も抱道の人あれば、是れを大叢林となす。猶ほ民繁く土廣きを

以て大國となさず、君聖に臣賢なるあるを以て大國となすが如し。^③汾陽

の昭禪師の會中には、止だ七八衆のみ、^④趙州は二十衆に満たす、^⑤藥山

は僅かに十衆あり、然も例して^⑥晚參をなす。故に永平も今茲に入院し、

晚參に古規を行す。或は五百七百、以至千僧も大叢林たることを忝しめず。

大叢林と號するも、既に抱道の人の主席に具はる者無くんば、敢て藥山、

趙州、汾陽の諸老に擬せんや。所以に近代は晚參なく、亦^⑦講を絶す。^⑧

先住天童の時は、千載一遇なり、^⑨澆運に當ると雖も、軌則尤も嚴なり。

①抱道の人。抱は懷抱の義にて、眞に祖道を守る人ないふ。

②汾陽の昭禪師。具に汾陽の善昭禪師、南岳下九世の禪にして、首山省念禪師の法嗣なり。

③趙州。地名にして、此處に觀音院なる寺あり、從諗禪師住せり、故に禪師を稱して斯くいふ。從諗は南泉普願の法嗣なり。

④藥山。藥山惟儼禪師のこと、青原下第三世の祖、始め石頭に參じ、後馬祖に侍して證契し、石頭に嗣法す。

⑤晚參。早朝の參問を早參、又は朝參と稱し、日晡の參を晚參といふ。

⑥講。講法の略。韻錄などを提唱する。

⑦先住天童。天童山景德寺如淨禪師のこと。

⑧澆運。澆季末世のこと。

⑨解躡。先佛叢祖の履踐せられし跡たる道行の蹤跡の義。

⑩丹道和尚。青原下第十二世の祖。芙蓉道楷禪師の法嗣、丹霞山子淳のこと。

⑪德山。青原下第四の祖、德山宣鑑禪師のこと、龍潭崇信禪師の法嗣。

⑫一隻眼。左右兩眼以外の一箇の眼目、即ち心眼の義なり。

⑬攝耳。放誕にして軌軌に遠はざるないふ。

⑭結制安居。制規を結訂して、大衆一處に安居して解道すること。此の法は印度に於て兩期三ヶ月外出不便の故を以て、寺内に於て修行せしに始まる。

⑮九旬禁足。四月十六日より七月十五日に至る九十日間、外出せずして安居修進するないふ。

或は半夜、或は晚間、或は齋罷、總て時節に拘らず、入室普説を要す、乃ち希代の勝躡なり。今永平既に其の嗣子と稱す、故に晚參を廢せず、我が朝の最初なり。記得す、^①丹霞和尚、擧す、^②德山衆に示して云く、「我が宗に語句なく、亦一法の人に與ふるものなし。」^③德山慈懸に道ふ、「只だ是れ草に入つて人を求む、覺えず通身泥水なることを」と。子細に觀來れば、只だ一隻眼を具するのみ。若し是れ丹霞ならば即ち然らず、我が宗に語句あり、金刀剪れども開けず、^④玄玄深妙の旨、^⑤玉女夜懷胎す」と。師云く、「丹霞慈懸に道ふ、眼睛、^⑥菘苴たる德山を照破することを得たり。然も是の如くなりとも雖も、永平は即ち然らず。我が宗に語句なく、心と口と相乗く。拈出して人の爲にする處、驢胎と馬胎と。」

結夏上堂、拂子を以て圓相を作して云く、「^⑦結制安居は、這箇を超越す」と。

又一圓相を作して云く、「^⑧九旬禁足は、這箇を究明す。所以に道ふ、

威音王佛は、這箇を棄けて假に名づけて佛となし、^⑨歷代の祖師は、這箇に

憑つて人天に號令すと。處々の安居、時々の禁足は、然も慈懸なりとも雖も、

這箇を將て極則となすこと莫れ、^⑩這箇を將て向上となすこと莫れ。極則を

將て極則となすこと莫れ、^⑪這箇を將て向上となすこと莫れ。極則を

掃除し、向上を踏踏す。永平只だ此れ是の安居は、叢林のために、榜樣たるに堪へたり。

上堂、記得す、僧、趙州に問ふ、「未だ世界のあらざるに、早く此の性あり、世界壞するとき、此の性壞せずと、作麼生か是れ不壞の性。」趙州云く、「四大五蘊。」僧云く、「此れ猶ほ壞する底、作麼生か是れ不壞の性。」趙州云く、「四大五蘊。」師云く、「趙州古佛は只だ把定することを知つて、放行すること能はず。永平敢て道はん、水長く船高く、泥多ければ佛大なり。」

上堂、大鈞は化機を運載して絲毫も動せず、石頭心印を全提すれば文彩已に彰る。這の田地に到つては、佛眼も戯れども及ばず、迷悟能く該ぬることなし。羅壘の鼻孔は山僧が眼睛、山僧が眼睛は羅壘の鼻孔、所以に山を隔て、煙を見て、便ち是れ火なることを知り、壘を隔て、角を見て、定んではれ牛なることを知る。拂子を擧して云く、「只だ這箇は一毫も隔てず、諸人畢竟喚んで甚麼とかなさん。天曉報じ來る山鳥の語、陽春の消息は早梅香し。」

涅槃會上堂、黃面の瞿曇入涅槃、法輪摧折し法河乾く。十成一會、靈山在り、徒賴に婆羅雙樹寒し。下座す。

明庵千光禪師前の權僧正法印大和尚忌辰上堂、擧す、師翁、虛庵和尚に問ふ、「學人不思議不思議の時如何。」虛庵云く、「本命元辰。」師翁云く、「恁麼ならば則ち今日より去らず。」虛庵云く、「若し恁麼ならば則ち妨げず今日より去ることを。」師翁禮拜す。虛庵云く、「南に面つて北斗を見る」と。師良久して云く、「祖師、本命元辰、微笑の破顔一へに新なり。黃花翠竹を假らす。扶桑日出で、春に逢ふ。」

上堂、海に入つて沙を筭ふ、空しく自ら力を費す。磚を磨して鏡となす、枉げて工夫を用ふ。君見すや高々たる山上、雲自ら卷き自ら舒ぶ。滔々たる澗下、水曲に随ひ直に隨ふ。衆生の日用は雲水の如く、雲水は自由なれども人は爾らず。若し爾ることを得ば、三界の輪廻何の處よりか起らん。

上堂、擧す、陳睦州僧あつて來參す。州云く、「汝豈に是れ行脚の僧にあらずや。」僧云く、「是。」州云く、「佛を禮するや也た未だしや。」僧云

- ①此の性。佛性、法性をいふ。
- ②四大。地水火風の四をいふ。
- ③五蘊。色、受、想、行、識の五をいふ。人身は四大、五蘊より成らざるなし。
- ④把定。又は把住といふ、萬法歸一なる理の當體を示す、向上的手段にして、實際理地一塵を立せず、何物の出頭をもゆるさの機用なり。
- ⑤放行。諸法歴然なる事の當相を示す向下的施設にして、佛事門中一法をも捨てず、自由の往來を放過する手段なり。
- ⑥大鈞。造化のこと。
- ⑦石頭。石頭希遷禪師、青原行思の法嗣、無際大師をいふ。
- ⑧田地。境界をいふ。
- ⑨羅壘。釋尊のこと、梵音「ゴ

- 「タマ」と稱し、釋尊の別體なり。
- ⑩法輪。法飾ともいふ、設法の處に建て、ある標幟なり。
- ⑪十成。猶ほ十分といふことし。
- ⑫一會。會座、一座といふことし。
- ⑬靈山。靈鷲山の略、釋尊說法の處。
- ⑭婆羅雙樹。娑羅此に堅固といふ、釋尊入滅の時、四方に各各二本宛の娑羅樹の特に高く立ちたるがかりしをいふ。各各の雙樹は四枯四榮を示すものとす。
- ⑮明庵。榮西禪師のこと。
- ⑯虛庵。黃龍八世の孫虛庵懷徹のこと、榮西禪師の師にして支那天童山の住僧なり。
- ⑰本命元辰。宗門に於て本分上の事を説話するに用ふる語なり。

く、「那の土壤を禮して麼かせん。」州云く、「自領出去。」師云く、「陳尊宿、放去は太だ奢、收來は太だ儉なり。則ち人に達ふて膽を露して、合水和泥すと雖も、何ぞ他に自分の草料を與へざる。山僧敢て道ふ、這の僧恁麼に去るも、也た是れ杓ト虚聲を聴く。」

上堂、是非を坐斷し、離微を超越するは、佛祖の陶冶、修證の範圍なり。獨體や眉底の活眼、空劫や句中の玄機、青原の赭色、懸麟問歩し、藥嶠の金毛、師子威を全うす。相逢ふて還つて手を把り、大道本歸を同じうす。解夏上堂、四月十五日、手を握つて拳となし、七月十五日拳を開いて掌となす。中間の一句子、兩頭邊を超越す。作麼生か是れ超越底の一句子。眼皮纒かに綻びて鼻孔遼天。

八月一日上堂、擧す、趙州因に僧問ふ、「道人相見の時如何。」州云く、「漆器を呈す。」師云く、「趙州古佛、逸群の作ありと雖も、且く平展の穢なし。或は人あつて山僧に道人相見の時如何と問はゞ、祇だ他に向つて道はん、八月仲秋何の處か熱せん。」

上堂、永平有る時は入理の深談、只だ諸人の田地の穩密なることを要す。

有る時は門庭の施設、只だ諸人の神通遊戲せんことを要す。有る時は奔逸絶塵、只だ諸人の身心脱落せんことを要す。有る時は自受用三昧に入る、只だ諸人の手に信せて拈得せんことを要す。忽ち人あり、出で來つて向上の事作麼生と道はゞ、但だ向つて道はん、曉風塵洗して昏烟淨し、隱隱たる青山畫圖を展ぶ。

上堂、拄杖を拈じて云く、「横拈倒用、諸佛の眼睛を撥開し、暗去明來、祖師の鼻孔を敲落す。恁麼の時に當つて、目連、鷲子氣を飲み聲を呑み、臨濟德山も呵々大笑す。且く道へ、箇の什麼をか笑ふ。」拄杖を靠けて云く、「等間に斜に壁に靠く、舊に依つて、黑黧皤。」

上堂、擧す、僧趙州に問ふ、「狗子還つて佛性ありや也たなしや。」州云く、「無。」僧云く、「一切衆生皆佛性あり、狗子什麼としてか無なる。」州云く、「伊に業識のあるあるがためなり。」師云く、「趙州恁麼に人のためにす、固是れ親切なり。山僧は然らず、狗子に佛性の有無を問ふ者あらば、他に向つて道はん、有無俱に謗すと。更に如何と問はゞ、聲に和して便ち捧せん。」

① 塙を廢す。馬祖住庵唯だ坐禪す、南岳問ふ、坐禪して何をか圓る。祖云く、「一作佛を圓る。」岳一塙を庵前に廢す。祖云く、「塙を廢して何にか爲す。」岳云く、「佛と作さんことを要す。」祖云く、「廢塙豈に鏡と成ることを得んや。」岳云く、「坐禪豈に成佛することを得んや云々。」

② 三界。欲界、色界、無色界。

③ 陳睦州。黃檗の法嗣道蹤禪師のこと、陳は俗姓、睦州は師所住の地名なり、機鋒峻烈、雲門は師に就いて大悟す。

④ 陳尊宿。道蹤禪師の敬稱。

⑤ 合水和泥。拖泥帶水に同じ。

⑥ 草料。草料は馬の喰物なり、今宗師家の稱喝をいふ。

⑦ 杓トして虚聲を聴く。杓を以て敲撃して舌凶を下するをいふ。

⑧ 青原。青原山行思禪師のこと、

原會て石頭希遷を接して云く、「衆角多しと雖も一麟に足れり」と。

⑨ 藥嶠。嶠は山に同じ。藥山惟靈禪師のこと、藥山、曾て嗣雲棲曇晟に問ふて云く、「汝、獅子を畫することを解すると、是なりや否や。」巖曰く、「是なり」と。

⑩ 漆器。此の問答は五燈會元卷四にあり。

⑪ 自受用三昧。自己の智光を以て眞法界を照すをいふ。大事を了得して自ら其の法樂に遊ぶなり。

⑫ 拄杖。身を拄ふる杖にして、行脚の時に用ひる道具の一なり。今は多く師家說法の時に携ふ。

⑬ 目連。佛十大弟子中、神通第一と稱せらる。

⑭ 鷲子。舍利弗のこと、佛十大弟子中、智慧第一と稱せら

上堂、外、放入せず、内、放出せず、劈面に一揮すれば、大事了畢す。如何と若何とを用ひず、摩訶般若波羅蜜。

比丘尼懷義、先妣のために請ひし上堂、生や無所從來、猶ほ衫を著くるが如し。死や無所去處、猶ほ袴を脱するが如し。萬法本空なり、一何れの處にか歸せん。到頭生死相干らず、罪福皆空にして住する所なし。

上堂、① 恰恰として、稜縫なく、明明として覆藏せず。② 驚嶺に、迦葉に傳へ、③ 少林豈に、神光に授けんや。現成す處々合頭の語、具足す人々知見香。虚空演説すれば森羅聽く、唇皮に掛けずして擧揚を解す。汝等諸人、十二時中、眼に滿ち耳に滿ち、舌を超え今を超ゆ。誰か自誰か他、何れか迷何れか悟。還つて體悉得すや麼や。良久して云く、「鎮州の蘿蔔を擧起す、④ 廬陵の米價にいづれぞ。」

新舊の⑤ 維那、知客を謝する上堂に云く、「⑥ 頂門に眼を具す、所以に十方を照徹す。直指私なし、所以に一曲を蔽はず、⑦ 摩竭の關棧を打開し、少林のを機を拈卻す。客を接して天橋を漏泄し、槌を擧する處佛祖命を乞ふ。是れ⑧ 神通妙用にあらず、亦法爾如然にもあらず。且く箇の什麼の道

① 臨濟。臨濟宗の祖、寶鑑の法嗣、諱を義玄といひ、機鋒峻峭、盛に接化に神喝を弄す。② 驚嶺。破庵錄に云く、「惟有一拄杖黑麻鞋」と、歸僧は皮の細起する説。

③ 稜縫。稜角縫目。④ 驚嶺。靈鷲山のこと。⑤ 迦葉。佛十大弟子中、頭陀第一と稱せらる。⑥ 少林。支那嵩山の別峰にあり、達磨九年面壁の處。⑦ 神光。達磨の法嗣二祖慧可のこと。⑧ 知見香。五分法身香の一なり。

⑨ 鎮州の蘿蔔。僧、通州に問ふ、「和尚親しく南泉に見ゆと是りや。」州云く、「鎮州に大蘿蔔頭を出す」と。

⑩ 廬陵の米價。僧、資原に問ふ、「如何なるが是れ佛法の大意、師曰く、「廬陵の米作麼の價ぞ」と。⑪ 維那。叢林に於ける六知事の一人にして、僧堂の監督をなし、大眾一切の世話をする役。⑫ 知客。叢林に於ける役名、來賓の接待係なり。⑬ 頂門。頂のこと。⑭ 摩竭の關棧。摩竭陀の時、國悟心要に「摩竭に室を掩ひ、少林に冷座す」とあり、關棧は關門の鍵で、佛法の奥妙といふほどの意。⑮ 神通妙用。大悟の境に達せし人の自由無礙の作用。⑯ 五臺山。支那山西省にあり、摩訶、竺法蘭の二師、始めて佛法を傳へて此の山に住せしをいふ。文殊出現の靈場として著はる。

理にか據る。」良久して云く、「從來の標致清拙なりと雖も、大丈夫兒は合に自由なるべし。」上堂、擧す、① 五臺山頂雲飯を蒸し、佛殿塔前狗天に尿す。② 利竿頭上餛飩子を煎じ、三箇の胡椒夜鏡を簸す。師云く、「若し這裡に向つて領覽、得ば、驪龍到る處雲雨を興す。其れ或は未だ然らずんば、且く池に③ 臘月の蓮の開くを待て。參。」

上堂、④ 有利無利行市を離れず、⑤ 王老師身を賣ることは即ち且く置く、廬陵の米作麼生か價を酬いん。若し人の價を酬ゆるなくんば、山僧自ら買ひ自ら賣り去らん。藁に拄杖を拈じて卓一下して下座す。

中秋上堂、雲開いて胡餅天邊に掛く。喚んで中秋夜月圓かなりと作す。睡覺め起き來つて

① 如何なるが是れ佛法の大意、師曰く、「廬陵の米作麼の價ぞ」と。② 維那。叢林に於ける六知事の一人にして、僧堂の監督をなし、大眾一切の世話をする役。③ 知客。叢林に於ける役名、來賓の接待係なり。④ 頂門。頂のこと。⑤ 摩竭の關棧。摩竭陀の時、國悟心要に「摩竭に室を掩ひ、少林に冷座す」とあり、關棧は關門の鍵で、佛法の奥妙といふほどの意。⑥ 神通妙用。大悟の境に達せし人の自由無礙の作用。⑦ 五臺山。支那山西省にあり、摩訶、竺法蘭の二師、始めて佛法を傳へて此の山に住せしをいふ。文殊出現の靈場として著はる。⑧ 利竿。寺院所在の標幟なり。⑨ 臘月の蓮。臘月は十二月にして、蓮の咲く時季にあらず、故に希有の義に用ふ。火蓋の蓮と同意なり。⑩ 有利無利行市を離れず。鎮州の蘿蔔極めて高く、廬陵の米價甚だ賤し」と。⑪ 王老師。南泉普願禪師のこと、王は師の俗姓、常に自ら王老師と稱す。⑫ 身を賣る。「南泉示、來曰、王老師賣、身去也、阿誰買、時有僧、出、衆曰、某甲買、師曰、不作、賣、不作、饒、汝作麼生買、僧無對云云」の問答の意を引く。⑬ 大義禪師。「法師」の誤なり。⑭ 驚湖和尚。信州驚湖大義禪師のこと、馬祖の嗣。唐憲宗嘗て詔して内に入れ、嚴德殿に於て論議す、一法師あり、問答せり。

覺むる處無し。頭を擡げて忽地に青天を見る。

上堂、擧す、昔大義禪師、鷺湖和尚に問ふ、「欲界に禪なし、何ぞ禪定を修するや。」鷺湖云く、「汝、只だ欲界に禪なきことを知つて、禪界に欲なきことを知らず。」大義對なし。師拈じて云く、「七顛八倒、拈じ來つて用ふ。欲なしといふも禪なしといふも、兩つながら真ならず、妄真同じく二つながら妄なることを識取して、夜深けて方に把針の人を見ん。

上堂、永平に箇の單傳の句あり。雪裏の梅花一枝綻ぶ。中下は多く聞いて多く信せず。上乘の菩薩は信じて疑なし。

上堂、擧す、僧、京兆の華嚴の休靜禪師に問ふ、「大悟底の人卻つて迷ふ時如何。」休靜云く、「破鏡重ねて照さず、落花枝に上り難し。」師云く、「永平今日華嚴の境界に入つて、華嚴の邊際を廓かにす、事已むことを獲す、兩の片皮を鼓す。或は人あつて、大悟底の人、卻つて迷ふ時如何と問はゞ、只だ伊に向つて道はん、大澤若し足ることを知らば、百川應に倒流すべし。」

- ① 欲界。欲界、色界、無色界、之を三界といふ、その一なり。
- ② 把針。針を把ると訓む、針仕事なして居ること。
- ③ 單傳。祖庭事苑に、傳法の諸祖、三藏の教業を以て兼れ行ふ、後に達摩、心印を單傳して經を破り宗を顯すとあり。
- ④ 華嚴の休靜。洞山の法嗣にして華嚴寺に住す。
- ⑤ 亞相。大納言の唐名、亞は次なり、相は丞相なり、丞相に次ぐの義、大師の養父、通忠公をいふ。
- ⑥ 擧。擧界なり。
- ⑦ 九蓮臺上。九品蓮臺なり即ち上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生、是なり。廣録に九蓮臺上の二句、「九族生天豈可廢、二親報地豈忘屠」に作る、家訓亦然り、宜しく從ひ

源亞相の忌の上堂、父母の恩を報するは、乃ち世尊の勝鬪なり。且く道へ、恩を知り恩を報する底の句作廢生か道はん。恩を棄て直に無爲の郷に入る。果、霜林に熟して慧日光る。魂靈何れの許に在すと問はんと要せば、九蓮臺上恰も雙を成す。擧す、藥山坐する次、僧あり問ふ、「兀兀地什麼をか思量す。」山云く、「箇の不思議底を思量す。」僧云く、「不思議底如何が思量せん。」山云く、「非思量」と。永平今日這の則の因縁を頌出して、二親のために報地を莊嚴す。非思量の處思量を絶す。切に忌むを將て喚んで黃となすことを。剝地に識情俱に裂斷すれば、鑊湯爐炭も亦清涼。

上堂、無心是佛の語は、西天より起り、即心是佛の談は、東土に始る。若し懸塵に會せば、天地懸かに隔り、懸塵に會せずんば、只だ是れ常流、畢竟如何。三春果滿つ菩提樹、一夜花開いて世界香し。

上堂、衲僧の拄杖は黒きこと漆の如く、世間の凡木と儔しからず。從前の山鬼窟を打破して、嶺梅忽ち綻びて枝頭に上る。

上堂、擧す、僧趙州に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「庭前の柏樹子。」僧云く、「和

- 改むべし。
- ① 報地。來世果報の地をいふ。
- ② 剝地。剝は脱なり、削なり、すつきりといふほどの意。
- ③ 鑊湯爐炭。大法炬經卷十四に云く、「又復觀見鑊湯爐炭、炎熾猛火山河灰黃皆悉充滿」と。
- ④ 三春果滿。春三月をいふ。
- ⑤ 衲僧。衲は補綴衣にして、破衣を著けて修行に志す僧を衲僧といふ、禪僧の稱。
- ⑥ 山鬼窟。黒山鬼窟の略、妄想分別に墮して居るを黒山鬼窟に墮すといふ。

尙境を以て人に示すこと莫れ。」州云く、「吾れ境を以て人に示さず。」僧云く、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「庭前の柏樹子」と。師云く、「南無趙州古佛西來の宗旨を拈出す。西來の意若何、庭前の柏樹子。境を將て人に示さず、只だ庭前に憑つて擧す。敢て諸禪德に問ふ、若爲が此の理を明めん。」膝を拍つこと一下して云く、「江南の橋を將て喚んで、江北の枳となすこと莫れ。」

上堂、大衆を召して云く、「但だ曹溪のみにあらず、西天にも亦佛法を會する人なし。或は箇の漢あつて出て來つて、和尙恁麼に道ふ、笑を露柱燈籠に取らんと道はど、只だ他に向つて道はん、這箇は是れ長連牀上の學得底、向上の事作麼生」と。良久して云く、「將に謂へり、胡鬚能様の赤と、元來更に赤鬚胡ありと。」

上堂、教の中に道く、「一切の賢聖は皆無爲法を以て而も差別あり」と。諸人什麼を喚んでか差別となし、那箇を指してか無爲法となすや。他に向つて道はん、差別底是なりと。恁麼に會得せば、箇の無事の衲僧とならん。其れ或は然らずんば、長連牀上に粥あり飯あり。

臘八上堂、豐曇の老賊魔魅に入り、人天を惱亂して了る時没し。眼睛を打失して覓むるに處なし。梅花新に發く舊年の枝。

上堂、西天を出でて、東土に入り、雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ。諸方の點頭するに一任す。拂子を擧して云く、「只だ順行三千、逆行八

- ①曹溪。寶林寺、六祖慧能禪師の住せし處。
- ②長連牀上。僧堂裡にある多人同坐する床。
- ③無爲法。本來常住にして生滅を離れ、他に依りて爲作違作せられざる法。
- ④臘八。十二月八日にして釋尊成道の日なり。
- ⑤點頭。會得、領解の義。
- ⑥順行三千逆行八百。日用縱横に拈用することはいふ。
- ⑦無底の鉢。無作の妙用をいふ。
- ⑧落處。極處、歸旨といふほどの意。
- ⑨禪版。坐禪の時、後念を除く人かために衆の携ふる板にして、時に手を安じ身を離する器なり、潤さ二寸余、長さ一尺七八寸餘。
- ⑩五祖の演。五祖は地名、五祖山の法演禪師、白雲守瑞の法嗣なり。
- ⑪築著碁著。築は塞の意、碁は石と石と相撃つ意、即ち晝暗に、充塞して到る處に觸着することといふ。
- ⑫圓悟禪師。名は克勤、五祖法演の法嗣、雪竇重顯の頌古百

百するが如くんば、作麼生か會せん。若し會得せば、七佛の鼻孔を穿過し、諸人の眼睛を擗破せん。若し也た會せざるも、唯だ衲僧無底の鉢あつて、依前として飯を盛り又羹を盛る。」

上堂、三世の諸佛を吞盡するも、人の鼻孔を借つて氣を出す。迦葉當時破顔す、今に至つて猶ほ未だ警地ならず。參。

上堂、若し佛法を將て人情に相當つれば、未だ免れず眉鬚墮落すること。佛法を破除して向上に提拂するも、地獄に入ること箭を射るが如し。永平爲人の處を見んと要すや麼や、但だ雪の消し去ることを得て、自然に春到來す。

上堂、佛々の授手、祖々の相傳、箇の什麼をか相傳し、箇の什麼をか授手するや、大衆、落處を知らんと要すや麼や。三世の諸佛、六代の祖師、甚の破草鞋、破木杓にか當らん。若し也た擬議せば、永平備が脚底にあらん。

上堂、山僧箇の方便あり。明々に汝が爲に親しく傳ふ。箇の蒲團、禪版に靠つて、灼然として綻ぶ火中の蓮。

上堂、世尊道く、「一人眞を發して源に歸すれば、十方虚空悉く皆銷殞す。」五祖の演和尚道く、「一人眞を發して源に歸すれば、十方虚空 榮著 磔著。」夾山の 圓悟禪師云く、「一人眞を發して源に歸すれば、十方虚空 錦上に花を添ふ。」佛性の 泰和尚道く、「一人眞を發して源に歸すれば、十方虚空只だ是れ十方虚空。」天童先師云く、「一人眞を發して源に歸すれば、十方虚空悉く皆銷殞す。既に是れ世尊の所説、未だ免れず奇特の商量をなすことを。天童は即ち然らず、一人眞を發して源に歸すれば、乞兒飯碗を打破す」と。師云く、「五 尊宿は恁麼、永平は不恁麼、一人眞を發して源に歸すれば、十方虚空眞を發して源に歸す。」

則に垂示、著語、評唱を加へて碧巖を著す。
①泰和尚。佛性の泰和尚、圓悟の法嗣にして鴻山に住す。

天童和尚忌上堂、唐に入つて歩を學んで邯鄲を失す。鼻直眼横に兩般なし。謂ふこと莫れ天童學者を瞞すと、天童曾て永平に瞞せらる。

上堂、天下太平にして、鉢盂處々に飯を喫す、萬姓安樂にして、露柱時々花を開く。所以に迦葉微笑破顔し、慧可 禮拜得髓す。直饒ひ這の 田地に到るも、更に參せよ三十年。所以に道ふ、太山に登らざれば、天の高きことを知らず、滄溟を涉らざれば、海の濶きことを知らずと。若し是れ箇の漢ならば、天地を一粒粟中に納れ、大海を一毫頭上に置き、華藏界 常寂光盡く眉毛眼睫の上にある。且く道へ、這の人什麼の處に在つてか安心立命するや。膝を拍つこと一下して云く、「山川磨破

す草鞋の底、到り了つて方に知る眼に瞞せらることを。」

上堂、擧す、僧、投子に問ふ、「如何なるか是れ ① 一大事因縁。」投子云く、「尹司空、老僧を請じて開堂せしむ。」師云く、「若し是れ永平ならば則ち然らず。如何なるか是れ ② 一大事因縁と問ふことあらば、只だ他に對つて道はん、早朝には喫粥し ③ 齋時には飯す、健なれば即ち ④ 經行し、困すれば即ち眠むる」と。

開爐上堂、地を掘つて天を覓む、日面なり月面なり、波を撥いて火を求む、徹底通紅、臨濟の赤肉團を掀翻し、雪峰の古鏡の濶きを勘破し、丹霞の木佛を焼き、陝府の鐵牛を煨き、寒灰再び煽ゆることを管取して、卻つて暖處に歸して商量せよ。

上堂、僧、古徳に問ふ、「深山の巖崖還つて佛法ありや也た無しや。」徳云く、「石頭大底は大、小底は小」と。先師道く、「深山巖崖の間、石頭大の答、崖崩れ石迸裂し、虚空 閑話聒」と。師云く、「二尊宿は恁麼に道ふと雖も、永平更に一路を資く。忽ち人あつて深山巖崖還つて佛法ありや也たなしやと問はゞ、他に向つて道はん、虚空消殞し、頑石點頭すと。然

①尊宿。尊は久なり、久しく道を修し、徳を積みたる宗師の尊稱。

②禮拜得髓。達磨、少林に住すること九年の後、四大弟子を召し、各所見を言はしめ、四人の中二祖慧可の一言も言ふことなく禮拜して立つ、時に達磨曰く、「汝吾が髓を得たり」と。

③田地。境界と同意。
④華藏界。華嚴世界、又は蓮華藏世界をいふ、華嚴の十佛攝化の境界なり、報身佛の國土なり。
⑤常寂光。常寂光土にして、法身佛の國土なり。

⑥投子。投子山大日禪師のこと。
⑦一大事因縁。法華方便品に「諸佛世尊は唯一大事因縁を以ての故に、世に出現す」とあり、六祖曰く、「一大事とは佛

りと雖も猶ほ是れ佛法邊の事、畢竟如何。」拂子を擲下して下座す。

元日上堂、見色明心、釋迦老子筋斗を翻す、開聲悟道、達磨祖師鉢盂を撃ぐ。十五日已前は靈山に月を語り、十五日已後は錦上に花を鋪く。這箇は則ち且く置く、只だ精金も百鍊せずんば、争か光輝を見ん。至寶も價を酬いすんば、争か眞假を辨せんといふが如きんば、恁麼の時に當つて作麼生。良久して云く、「孟春猶ほ寒し、伏して惟れば大衆尊候起居萬福。」

上元 上堂、雪蘆花を覆ふて塵に染ます、風光を占め斷することは當人に屬す。寒梅一點芽心綻ぶ、喚動す。劫壺空處の春。

上堂、擧す、賓頭盧尊者、阿育王の大會に赴く、王、香を行するの次、作禮して問うて云く、「承り聞く、尊者親しく佛に見え來ると、是なりや否や。」尊者、手を以て眉毛を撥開して曰く、「會すや麼や。」王曰く、「會せず。」尊者曰く、「阿耨達池の龍王、佛を請じて齋せし時、貧道も亦其の數に預る」と。永平今日聊か一頰を伸べん、親しく曾て佛に見えて眉毛を撥す。王庫本是の如きの刀なし。阿耨達池の王佛を請す。更に氷月を將て再三撈せよ。

の知見なり」と。

① 齋時。晝食の時。
② 經行。長く坐禪する時は自ら倦怠を生じ、足痛を覺ゆるを以て、坐を起ちて除行緩歩すること。

③ 臨濟の赤肉團。臨濟錄に云く「上堂曰、赤肉團上有二無位真人、常從汝等諸人面門出入、未三證據者看云云。」
④ 雪峰の古鏡。雪峰は雪峰山の義存禪師のこと、徳山の法嗣、學人接待四十餘年、常に會下に修行する者千人を超ゆと、古鏡は、五燈會元玄沙草に「雪峰曰、世界湖一尺、古鏡湖一尺、世界湖一丈、古鏡湖一丈云云」と。

⑤ 丹霞の木佛。丹霞は千禧禪師。木佛は會元丹霞傳、師燒木佛取舍利云云を引く。
⑥ 開眼。發々しいこと。
⑦ 二尊宿。古徳と天堂とをい

上堂、擧す、僧百丈に問ふ、「如何なるか

是れ奇特の事。」百丈云く、「獨坐大雄峰。」今日或は人あつて、永平に如何なるか是れ奇特の事と問はゞ、只だ他に向つて道はん、今日鼓を鳴して陸堂すと。

浴佛上堂、兜率陀天より降らず、豈に摩耶を假りて聖胎と作さんや。突出す恒沙の功德聚、優曇火裏に一枝開く。還つて釋迦老子敗缺の處を知るや麼や、家私都て喪盡して、賣弄す小嬰孩。

上堂、衲僧の端的、參禪を要す。參じて無參に到る是れ正傳。只だ箇の正傳も亦著けず。大家齊しく賀せよ普通の年。

解夏上堂、法歳の周圓を見んと要すや麼や。一圓相を打して云く、「這裏に會取せよ。」又圓相

① 上元。正月十五日のこと。

② 劫壺。宏智洞山常活話の頌に「劫壺空處有他家傳」とあり。

③ 賓頭盧尊者。釋尊の弟子、十六羅漢の一人、白頭長眉の羅漢なり。

④ 阿育王。印度の國王にして厚く佛教に歸依し、僧を供養し、寺を建て、結集を行ふ等佛教を外護せること甚だ大なりき。

⑤ 阿耨達池の龍王。阿耨達池は印度大雪山の北にありて、種種の珍寶を以て岸となし、周八百里の池なり。龍王此に住みて清涼水を出し、印度四大河は源を此に發すといふ。

⑥ 百丈。百丈山懷海禪師のこと、師は馬祖の法嗣、百丈清規を制定す、叢林開闢の祖となす。

⑦ 獨坐大雄峰。大雄峰は百丈山の異稱。

⑧ 兜率陀天。又兜率天とも云ふ、帝釋天の所住の國土なり、釋尊は此の天より下生せりと

いふ。
⑨ 摩耶。釋尊の母。
⑩ 法歲。夏臘即ち四月十六日より七月十五日に至る九旬の間を凡て法歲といふ。

⑪ 如來禪。圭峰宗密の所判なる五種の禪の最上なるもの、達磨門下の展轉相傳する禪なり。

⑫ 祖師禪。如來禪に對して祖師禪と稱す。
⑬ 嚴頭。諱は全藏、徳山の法嗣なり。

⑭ 法座。法執といふに同じ。
⑮ 剎那。時間の單位にして、極めて短き時間なり、俱舍論の説によれば一彈指の中に六十剎那ありといふ。
⑯ 乳中の酪。涅槃經に「乳より

を打して云く、「這裏に參得せば、如來禪は則ち爾が會することを許す。祖師禪を見んと要せば、直に是れ十萬八千。且く道へ、永平が意甚の處にかある、但だ日頭の東畔に上るを見て、誰か夏末と秋初とを知らん。」

上堂、擧す、僧、巖頭に問ふ、「古帆未だ掛けざる時如何。」巖頭云く、「小魚大魚を呑む。」師云く、「這の則の因縁を會せんと要せば、永平が一頷を聽取せよ。小魚大魚を呑む、和尚儒書を讀む。佛魔の網を透出して、法塵も也た掃除すべし。」

上堂、時節因縁は佛性なり、刹那に前後圓成す。但だ自ら長時に退歩すれば、乳中の酪分明なり。

酪を出し、酪より生酥を出し、生酥より熟酥を生じ、熟酥より醍醐を生ず」とある、妄中自ら眞あることないふ。

永平寺上堂終

小參

結夏小參、擧す、慈航和尚、四明の天童に住して、結夏小參に云く、「參禪の人は第一に鼻孔端正、其の次は須らく眼目精明なるべし。又其の次は宗說俱に通ずることを貴ぶ。然して後機用齊しく到つて、始めて能く佛に入り魔に入り、自他兼ね到る。何となれば鼻孔正しきときは則ち一切皆正しきこと、人の家に居して家主正しきときは、其の下自ら化するが如し。且く如何が鼻孔端正にし去るを得ん。古聖道く、「決定して第二念に流至せざれ、中に就いて方に我が宗門に入る」と。豈に是れ父母未生已前に向つて爾がために箇の標準をなしたるにあらざるや」と。師云く、「古人決定して第二念に流至せざれといふと雖も、敢て諸人に問ふ、那箇を指してか第一念となさん。永平今夜口業を惜まず、諸人に向つて道はん、九十の尅期明日より始む。繩墨外邊に於て行くことなかれ。蒲團に倚坐して他事なし。終日寥寥として太平を賀す。」

①慈航。諱は了朴、南岳下第十七世の孫なり。
②四明の天童。四明は地名、大明統志に「寧波府爲四明云云」とあり、天童は太白山天童寺なり。
③宗門。正宗記略に「古者禪門を謂つて宗門となす」とあり。
④九十の尅期。九十は、安居九旬の間をいふ、尅期日は、九旬の間期日の定められたるをいふ。
⑤大慈。諱は實中、百丈懷海の法嗣。
⑥般若。智慧と譯す。
⑦和羅飯。梵語、譯して自恣食といふ。九旬安居の終りし

解夏小參、一圓相を打して云く、「箇れは是れ没量の大事、三世の諸佛も此れを了し、歴代の祖師も此れを悟り、參學の道人も此れに參す。若し日用に於て薦得せば、親しく佛祖を超過すること一頭地ならん。豈に見すや趙州、大慈に問ふ、『般若は何を以て體となすや。』大慈云く、『般若は何を以て體となす。』趙州、呵々大笑す。來日趙州掃地の次、大慈問ふ、『般若は何を以て體となすや。』趙州掃帚を放下して呵々大笑す。大衆、大慈、趙州兩員の古佛、一期の相見、奇絶なることを妨げず、今日解制斯に臨んで作廢生か商量せん。昨日は和羅飯今朝は粥一盂。且く道へ、古人と是れ同か別か。良久して云く、『大慈若し也た重ねて垂問せば、趙州の笑轉た新なることを添得せん。久立衆慈伏して惟るに珍重。』

冬夜小參、大功熟する處、一陽即ち生ず、萬法源に歸して、方に尊貴を見ん。所以に道ふ、盡十方世界、是れ彌が一隻眼、盡十方世界、是れ彌が自己、盡十方世界、是れ彌が光明、盡十方世界、是れ彌の解脱門と。什麼の處か是れ彌が成佛の處にあらざる、什麼の處か是れ說法度人の處にあらざる。道ふことを見すや、護明兜率より降せざれども、一輪圓滿して十方に周しと。

日、佛及び僧衆に供する餅飯
 ①久立衆慈。大衆の長時間法座の下に立ちて聽法したるは、大衆の慈心に出づといひてその隨喜を謝する語。
 ②護明。傳燈錄に「釋迦牟尼佛登三補處一生兜率天上、名曰護明天人亦曰護明大士ことあり。
 ③震旦。支那の轉音なり。
 ④行履。日常の行住坐臥の四威儀を始め、運水搬柴喫茶喫飯に至る迄、一切日用の行持をいふ。
 ⑤尺壁寸陰。淮南原道訓に「聖人不貴尺之壁、而重寸之陰、時難得而易失也」とあり。
 ⑥善知識。智徳衆に對し、能く人を教ふる力ある人をいふ。涅槃經に「善知識とは、法の如くに説き、法の如くに行じ、

方に周しと。

除夜小參に云く、「小參は即ち佛祖の家訓なり、我が國前代に未だ擧し行せしことを知らず、永平始めて之を傳へて二十年を經。祖師西來して、法震旦に入り、而して前代の祖師之家訓といふ。佛祖の行履にあらざらんば履まず、佛祖の法服にあらざれば服せず、名利を抛卻し、人我を捨て去つて、山谷に隱居し、叢林を離れずして、尺壁寸陰も、萬事を顧みずして、純一に辨道す。此れ乃ち佛祖の家訓、人天の眼目なり。然も善知識となることは、則ち僧祇大劫に修し來るにあらざれば、爲ること能はず。大衆祇劫を見んと欲すや麼や。彈指一下して云く、「只だ這れ便ち是れ。喚んで本有より得るとなさんや、喚んで修し來つて得るとなさんや。這裏に見得せば、便ち是れ時移り歳換り、臘盡きて春回る、十方を坐斷し、三際に冥通す。舊歲實に去らず、新年實に來らず、來去交參せず、新舊對待を絶す。所以に僧、石門に問ふ、『年窮歲盡の時如何。』石門云く、『東村の王老夜、錢を焼く。』僧、開先に問ふ、『年窮歲盡の時如何。』開先云く、『舊に依つて孟春猶ほ寒し。』今夜忽ち箇の僧あつて、永平に年

自ら殺生せず、人を殺へて殺生せしめず、(中略)正見を行じ、人をして正見を行せしむ」とあり。
 ⑦僧祇大劫。僧祇は梵語具には阿僧祇といひ、無數と譯し、非常に長き時間のこと、大劫とは、劫とは時間の單位にして、小劫、中劫、大劫とありて、人壽八萬四千歳の時より、百年毎に一歳を減じて十歳に至り、更に斯の如く増して八萬四千歳に至る間を一小劫といひ、二十小劫を一中劫、四中劫を一大劫といふ。要するに無數に永き時間のことをいふ。
 ⑧三際。三世に同じ。
 ⑨石門。石門山の慧徹禪師をいふ。
 ⑩錢を焼く。鬼神を祭るために紙錢を焼く故事なり、春來れば百花開くと同意。
 ⑪開先。諱は善遷、徳山の法嗣。

猶歲盡の時如何と問はゞ、祇だ他に向つて道はん、前村深雪の裏、昨夜一枝開くと。天寒久立。」

法語

禪人に示す

近世學道の人、龍蛇を辨せず、菽麥を分たず、然して究明せんと欲すること亦良に難し。古者道と大地雪漫漫、春來るも舊に依つて寒し。到頭成佛は易く、卻つて是れ禪を説くことは難し」と。此の病は佛祖も猶ほ未だ脱せず、如何にしてか未だ脱せざるや、謂く、「成佛は易く、禪を説くことは難し。禪を説くことは易く、成佛は難し」と。恚癡の見解、作廢生か佛法難し。易底の情見を脱得せんや。豈に見すや、僧、雲門に問ふ、「樹凋み葉落つる時如何。」門云く、「體露金風。」佛照禪師拈して云く、「大小の雲門、常住物を將て自己の人情となす。」然りと雖も、也た是れ無病の藥。釋迦老子一期出世して、大醫王となり、衆生の深く苦海に沈むを感むが爲に、是に於て慈を興し悲を運して、種々の方便を以て、一大藏教を演出す。皆是

①菽麥を分たず。菽は大豆、豆と麥との區別を知らずといふこと。左傳に「無藝にして菽麥を辨ぜず」とあり、是れ穢の甚しきを形容せるなり。
②佛照禪師。諱は德光、大惠宗果に嗣法す。
③大醫王。涅槃經一世醫所ニ譽

れ病に應じて藥を與へ、一切有情をして大安樂の地に到ることを得せしむる底の方子なり。達磨西來に至るに及んで、子孫孫皆砒霜狼毒を用ひて、病者をして絶後に再び甦らしめんと要す。海上の單方の如く、神驗多しと雖も、正眼に看來れば、總に是れ好肉に瘡を剗る。若し是れ本色の手段ならば又且つ然らず。方書を執せず診候にあらず、目機鉢兩應變時に臨む。任ひ是れ佛病祖病なるも、輕々に一捏することを銷せず、盡く骨を換へ腸を洗つて、神清氣爽ならしむ。所謂一丸衆病を消す。藥方の多きを假らず、老漢通身是れ病にして、正に起處を覓むるに得ず。普燈都正既に此の如きの作略あり、試みに眼を著けて看せしむ。若し觀得透せば、則ち扁鵲盧醫並に下風に立たん。

諸佛の大道は、深妙にして不可思議なり、修行者豈に容易ならんや。見すや、古人身命を捨て、國城妻子を棄てて、之を視ること瓦礫の如くに相似たり。然して後劫數を経歴し山林に獨棲し、身心は枯木の如くにして、方に始めて道と相應す。既に道と合すれば、便能く山川を借つて言語となし、風雨を拈じて舌頭となし、太虚を説破して無等輪を轉す。何の用

治。差已還復發、若し是如來藥治者、差已不復發、故佛言三界大醫王ことあり。
②方子。調藥法をいふ。
③砒霜狼毒。砒霜は毒を含める礦物の一種、狼毒とは一種の毒草なり。
④海上の單方。不老不死の妙藥のことといひ、單傳の處方なり。海上は海上に方丈、蓬萊等の仙人島あり、此の島に不老不死の仙藥ありといふ、今は大死一番、大活現成、不生不滅の境に達する妙術といふ義なり。
⑤方書。處方箋の書いた書物で、種々の手段をいふ。
⑥普燈都正。普燈は人名、傳不詳。都正は都主の誤寫、都主は都寺にして叢林に於ける役名なり。僧官。
⑦觀得透。眼は視にして見透すること。

か不能ならん、何の法か不可ならん。道に志す者は、この風範に遵ふべし。昔日僧あつて、法眼禪師に問ふ、「如何なるか是れ古佛。」法眼云く、「即今也た嫌疑なし。」僧又問ふ、「十二時中如何が行履せん。」法眼云く、「歩踏著す」と。夫れ出家の人は、但だ時反び節に隨は、即ち得てん。寒なれば即ち寒く、熱なれば即ち熱し。佛性の義を知らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし。但だ分を守り時に隨つて密に此の意を究めよ。如何が是れ時に隨ひ是れ分を守らん。色上に於て非色の解をなすこと莫れ、亦色の解をなすこと莫れ、亦兩頭に走らず、即ち嫌疑を忘せば、他の古佛と同じく住し同じく行いて、猶ほ鏡の相照すがごとくならん。所以に釋迦老子道く、「沙門聚落に入つては、猶ほ蜂の花を採るが如くせよ、但だ其の味のみを取つて其の色を壊せざれ」と。何ぞこの時節に順はざる。十二時中縁に逢ひ境に遇ふて、但だ其の味のみを取つて其の色を壊すること莫れ。偏に向つて道はん、他の萬縁の印を棄け、他の萬法の證を被ること莫れ。須らく是れ色香を壊せざるの時節なるべし。此れを離れて若しあらば、則ち萬象汝がために證明せん。山僧事已むを得ずして道ふ。了然道者、道に志すの切なる、餘輩未だ肩を著し

① 扇嶋盧巖。扇嶋は古の名醫、盧巖とは盧氏といふ神醫のこと。
② 無等輪を轉す。佛の説法は衆生の爲に拔苦與樂すること、轉輪王の輪寶を運轉して無礙なるが如きをいふ、佛に背輪、口輪、意輪あり、無等輪は無上法輪の義なり。
③ 法眼禪師。諱は文登、羅漢社深の法嗣、禪門五家中、法眼宗の祖なり。
④ 沙門。梵語、舍離摩耶の轉訛、譯して勤息又は止息といふ。諸の善法を勤修して、諸の惡法を止息するもの、我、僧侶の通名也。
⑤ 了然道者。大師に就きて求法の志厚き女子なりしといふ、傳不詳。

うすべからず。是を以て一毫端に於て、聊かために點出して以て參究を資く、之を勉めよ、之を勉めよ。

普勸坐禪儀

原のるに夫れ、道本圓通、爭か修證を假らん。宗乘自在、何ぞ功夫を費さん。況んや全體過かに塵埃を出づ、孰か拂拭の手段を信せん。大都當處を離れず、豈に修行の脚頭を用ふるものならんや。然れども毫釐も差あれば、天地懸かに隔り、遠順緣かに起れば、紛然として心を失す。直饒ひ會に誇り悟に豊にして、警地の智通を獲、道を得心を明めて、衝天の志氣を擧し、入頭の邊量に逍遙すと雖も、幾と出身の活路を虧闕す。矧んや彼の祇園の生知たる、端坐六年の蹤跡見つべし。少林の心印を傳ふる、面壁九歳の聲名尙は聞ゆ。古聖既に然り、今人盡ぞ辨せざる。所以に須らく言を尋ね語を逐ふの解行を休すべし。須らく回光返照の退歩を學すべし、身心自然に脱落して、

① 圓通。楞嚴經卷六の注に、性體周徧を圓といひ、妙用無礙を通といふ。
② 宗乘。又は宗旨、佛祖正傳の法門の極致なり。
③ 塵埃。拂拭。神秀上座の偈に「時々勤拂拭、勿使惹塵埃」とあるに據る。
④ 逍遙云云。信心銘に「毫釐も差有れば天地懸に隔り、現前を得んと欲せば、順逆を存す

① 本來の面目現前せん。② 恁麼の事を得んと欲せば、急に恁麼の事を務めよ。夫れ參禪は靜室宜しく、飲食節あり、諸縁を放捨し、萬事を休息し、善惡を思はず、是非を管すること莫れ。

③ 心意識の運轉を停め、④ 念想觀の測量を止めて、⑤ 作佛を圖ること莫れ、豈に坐臥に拘らんや。

尋常坐處には厚く坐物を敷き、上に蒲團を用ひ、或は結跏趺坐、或は半跏趺坐す。謂く、結跏趺坐は、先づ右の足を以て左の脛の上に安じ、左の足を右の脛の上に安ず。半跏趺坐は但だ左の足を以て右の脛を壓すなり。寛く衣帶を繋けて齊整ならしむべし。次に右の手を左の足の上に安じ、左の掌を右の掌の上に安じて、兩の大指面ひて相拄ふ。乃ち正身端坐して、左に側ち右に傾き、前に躬り後に仰ぐことを得ざれ。

ること莫れ、違順相争ふ是れを心病と爲す」とあり。⑥ 警地の智通。警は過目なりと注す、地は然と同じで、ちらりと物を見たる貌、些少の知見を開きたるをいふ。

⑦ 祇園の生知。祇園は祇樹給孤獨園精舍の略、生知は聖人のこと、祇園精舍に在ませし釋尊をいふ。

⑧ 回光返照。自己に就いて反省すること、仰山曰く、汝等諸人、各自に回光返照せよ、吾が言を記する莫れ」と。

⑨ 本來の面目。本源自性と同一。

⑩ 恁麼の事。恁麼は俗語、如是の義、故に「此の事」といふに同じ。

⑪ 念想觀。測量に就いて愈より細に至る順序なり、即ち初に念、次に想、後に觀なり。

⑫ 作佛を圖ること莫れ。南岳、

馬祖に問うて曰く、「坐禪して什麼を圖る。」祖曰く、「作佛を圖る。」岳曰く、「坐禪して豈に作佛を得んや」と、又洞山、僧の如何なるか是れ佛向上の事なる間に答へて「非佛」と、非佛の境界、是れ作佛とも圖ることなき消息なり。

⑬ 欠氣。大きく口を張つて呼吸をすること。

⑭ 兀兀。不動の貌。

⑮ 箇の不思議。會元に藥山因に僧問ふ、「兀兀地什麼を思量す。」山曰く、「箇の不思議を思量す。」僧曰く、「不思議如何か思量す。」山曰く、「非思量」とある。

⑯ 習禪。六波羅蜜中の禪定なり、坐禪して意識の散亂を止め、以て彼岸に至るの船筏とする禪なり。南山の道宣の撰高僧傳中、達磨を習禪の列に入るは甚だ非なり。

耳と肩と對し、鼻と臍と對せしめんことを要す。舌上の脣に掛け、唇齒相著け、目は常に開くべし。鼻息微かに通じ、身相既に調へて、欠氣一息し、左右搖振して、兀兀として坐定して、箇の不思議底を思量せよ。不思議底如何か思量せん、非思量、此れ乃ち坐禪の要術なり。所謂坐禪は、習禪にはあらず、唯だ是れ安樂の法門なり、菩提を究盡するの修證なり。

公案現成して羅籠未だ到らず。若し此の意を得ば、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。當に知るべし正法自ら現前して、昏散先づ撲落

することを。若し坐より起たば、徐徐として身を動かし、安詳として起つべし、卒暴なるべからず。嘗て觀る、超凡越聖、坐脱立亡も、此の力に一任することを。況んや復た、指竿鉞鏡を拈するの轉機、拂竿棒喝を擧する

の證契も、未だ是れ思量分別の能く解する所にあらず、豈に神通修證の能く知る所とせんや。聲色の外の威儀たるべし、那ぞ知見の前の規則にあらざるものならんや。然れば則ち上智下愚を論せず、利人鈍者を簡ぶこと莫

れ、專一に功夫せば、正に是れ辨道なり。修證自ら染汚せず、趣向更に是れ平常なるものなり。凡そ夫れ、自界他方、西天東地、等しく佛印

⑰ 公案。公府の案牘の義にて、佛祖の修證の機縁をいふ。然れども今は眞實の佛法の義なり。

⑱ 坐脱立亡。達磨、四祖は端坐して遷化し、三祖は大樹の下に立つて逝くと、此の如く臨終に自由なるは皆此の坐禪の力なり。

⑳ 指竿。轉機の二句は宗師家が學人を接待する臨機應變の活作略を述べしなり。

㉑ 修證自ら染汚せず。六祖南岳に問ふ、「運つて修證すべきや否や。」岳曰く、「修證即ち無きにあらず、染汚は即ち得ず」と、修證不二、その真跡なき妙用をいふ。

㉒ 自界他方。自界は釋尊一化の國土、他は十方佛土をいふ。

㉓ 佛印。佛心印の時、佛祖嫡傳の宗旨をいふ。

㉔ 打坐。打は爲の義、坐禪のことといふ。

を持し、一ら宗風を擅にするも、唯だ打坐を務めて、兀地に礙へらる。萬別千差といふと雖も、祇管に參禪辨道せよ、何ぞ自家の坐牀を拋却して、漫に他國の塵境に去來せん。若し一步を錯れば、當面に蹉過す。既に人身の機要を得たり、虚に光陰を度ること莫れ。佛道の要機を保任す、誰か浪に石火を樂まん。加のみならず、形質は草露の如く、運命は電光に似たり。

①石火。草露、電光と共に極めて迅速に消滅するの譬。
②形質。肉體。
③候忽。迅速なる貌。
④須臾。候忽と同意。
⑤摸象。真龍意識情想の卜度は悉く是れ生盲の象を摸索するが如し、真龍は葉公眞龍を見て失神せし故事を引きしもの。
⑥直指端的の道。漸々修學の法

門にあらず、直指人心見性成佛の祖道をいふ。
⑦絶學無爲の人。證道歌にある句、諸聖を慕はぬ人をいふ。
⑧寶談。傳燈錄に慧海云く、寶談、江西和尙の汝が自家の寶藏一切を具足して使用自在なり、外に求むることを假らずといふを聞いて自體し去り、自己の財寶身に隨つて受用すしとあり。

候忽として便ち空し、須臾に即ち失す。冀はくは其れ參學の高流久しく、摸象に習つて、眞龍を恠むこと勿れ。直指端的の道に精進し、絶學無爲の人を尊貴し、佛々の菩提に合沓し、祖々の三昧を嬌嗣せよ。久しく恁麼なることをなさば、須らく是れ恁麼なるべし。寶藏自ら開けて、受用如意ならん。

坐禪箴

①宏智禪師の坐禪を慕ふて此の箴を作る。

佛々の要機、祖々の機要、不思議にして現じ、不廻互にして成す。不思議にして現す。其の現自ら親しく不廻互にして成す。其の成自ら證なり、其の現自ら親し。曾て染汚なし。其の成自ら證なり、曾て正偏なし。曾て染汚なきの親、其の親委することなくして脱落し、曾て正偏なきの證、其の證闕ることなくして功夫す。水清うして地に徹す、魚行いて魚に似たり。空淵にして天に透る。鳥飛んで鳥の如し。

①宏智禪師。諱は正覺、青原下第十四世、再霞子淳の法嗣なり。著書「宏智禪師語錄」六卷あり。

自贊

鼻は山よりも高く、眼は珠よりも明かなり、頭匾は扇に似、脚尖は驢の如し。入室には臭拳を擧ずることを愛し、陞堂には力を拄杖に借る。水を乞ふ人に遇ふては天井を指し、飯を覓むる人に遇ふて

は 應量を與ふ。昔 雞狗等の戒を護持するに因つて、今日佛祖の 屈向を竊み得たり。紛々として林下に錯つて商量す、笑殺す靈山の那一瞬。

老梅樹老梅樹、枝々葉葉を長養するの春、兀地は一機歴歴、莊嚴は三昧塵塵。拄杖頭に全く節目なし、蒲團上に十方身あり。鳳毛を弄して天童の鼻孔を捉得し、虎穴に入つて 大休の口唇を一笑す。住山の頑石、叢林の 陳人。田を種ゑて飯を博むるは 地藏の家風、深山に松を栽うるは 臨濟の榜樣。雲巖は雲居の袈裟を披し、雪山は雪庭の氣象を挽く。面目分明に舉似す。掛けて高堂に向つて供養す。

①應量。應量器の略、僧の食器なり。
②雞狗等の戒。印度に於ては、一種の外道は鶏狗のなすが如き形を爲し、其より生ずる苦を忍耐することによつて、生天の因となると信じて行ひし外道あり。
③屈向。梵語、名義集に大細布といふ、木綿華心を以て織り、其の色青黒色なりと、即ち達磨所傳の佛袈裟といふ。
④鳳毛。雪巖の頌に「八萬四千鳳毛に非ず、三十三人虎穴に入る」とあり、鳳毛は勝友なり。
⑤大休。天童山賣班禪師のいふ。
⑥陳人。莊子に「人として人道無き是れ之を陳人といふ」とあり、注に陳人とは世間に陳久せし無用の人なり。
⑦地藏。地藏柱環禪師、玄沙の法嗣なり、田を栽うとは、師が修山主の問に答へて「藏曰く、争か如かん我が道真田に種を飯を博めて喫せんには」といへり。
⑧臨濟の榜樣。臨濟錄に「師松を栽うる次、黄檗問ふ、深山裏に許多を栽ゑて什麼と、作す、師云く、一には山門のため、二には後人の爲に榜樣となさん」とあり。

偈頌

補陀巖に遊び禮す

①聞思修より ②三摩地に入り、自己端嚴にして聖顔を現す。爲に來人に告げて此の意を明めしむ、觀音は 寶陀山に在らず。

禪人頌を求む

①瞻風撥草して參禪を要す、祖意明明として妙不傳、恨むこと莫れ江山千萬疊。頭頭汝がために ②玄門を闢く。

王 侍郎に與ふ

妙と説き玄と談するは總に掠虚す、言を忘じ獨坐して口槌の如し。初より把定して孤絶に誇るにあらず、百草頭邊に盡く撥揮す。

成忠に贈る

①鴻蒙既に兆して ②三才現す、甚の當人の本性をか覺め來らん。象外の一機能く眼を着くれば、笑ひ觀る石女の ③三臺に舞ふことを。

①聞思修。楞嚴經の會解に「耳に遠するを聞といひ、心に著くを思といひ、治習する之を修といふ」とあり。
②三摩地。梵語、譯して等持といふ、定の別名なり。
③寶陀山。補陀山ともいふ、支那で觀自在菩薩出現の靈場として名あり。
④瞻風撥草。深山幽谷に入り、際邊の道人を探るの義、轉じて過渉のことに用ふ。
⑤玄門。老子に云く、「玄之又玄、衆妙の門」とあり、甚深微

茹^{じよ}秀才^{しやうさい}に贈る。

天然の妙智は自ら真如、何ぞ儒書及び佛書を假らん。①繩床に獨坐して口壁に掛く、等間に一實千虚に勝れり。

文本官が長韻に和す

大道は從來一實より通ず、蓬瀛何ぞ必ずしも壺中のみにあらんや。逍遙の世外誰人が識らん、赤肉團邊に古風を振ふ。

抄簿が韻に和す

本来の心地自ら寧寧、法の^②咨參するなし卓爾として靈なり。従前の凡と聖とを坐断せば、何ぞ特地に明星を見るに勞せん。

重陽に兄弟と再會す

去年の九月は此の中に去り、九月今年此れより來る、古來の年月日を拈却して、欄に凭つて一笑すれば菊花開く。

冬至に徒に示す 二首

昨日は短く今日は長し、了かに佛法の商量すべきなし。商量を絶して後如何が委せん、到る處人に逢ふて一陽を賀するのみ。觸處渠に逢ふて面目

妙法の法門なり。

①侍郎。支那に於ける文書の起草を主る役名。

②鴻蒙。天地未だ判せざる混沌たる状態をいふ。

③三才。天地人、これを三才といふ。

④三臺。天子に靈臺、時臺、圓臺の三あり、韻府に「登三三臺」あり。

⑤秀才。漢の時、士を取るに、孝廉、秀才の二科あり、後に轉じて、鄉貢、進士の通稱となる。

⑥繩床。三才圖會に「胡床は本西戎の製か、交椅に比すれば甚だ簡易なり、坐下に繩網を設く、故に繩床と名く」とあり。

⑦蓬瀛。蓬萊、方丈、瀛州の三山の中の二を擧げしなり、三山は仙人の居る島なりといふ。

を全うす、身を翻し首を回して天に向つて通ず。一期縦ひ拳頭^①の力を借るも、氣を出すことは須らく還つて鼻に功あるべし。

相州鎌倉にあつて 驚蟄を聞いて作る

半年飯を喫す 白衣の舎、老樹の梅花霜雪の中、驚蟄一聲霹靂を轟かす、帝郷の春色は小桃紅なり。

山居の六首

西來の祖道我れ東に傳ふ、月に釣り雲に耕して古風を慕ふ、世俗の紅塵飛んで到らず、深山雪夜草庵の中。

夜坐更闌けて眠未だ熟せず、情に知る辨道は山林に可なることを。溪聲耳に入り月眼に到る、此の外更に何の用心をか須ひん。

久しく人間に在つて愛惜なし、文章筆硯既に抛ち來る、花を看鳥を聞くも風情少し、時人の不才を笑ふに一任す。

三秋の氣肅清涼の候、^②織月叢蟲萬感の中、夜靜かに更闌にして北斗を看れば、曉天將に東を指すに到らんとす。

三間の茅屋既に風涼、鼻觀先づ參す秋菊の香、鐵眼銅睛も誰か辨別せん。越州に九度重陽を見る

①杏參。訪問多侍。

②驚蟄。二月に初めて出鳴る、その聲に驚いて、土中に蟄伏せる群虫穴より起き出る。

③白衣の舎。北條時頼の殿中を指す。

④織月。上弦及び下弦の月。

ことを。
前樓後閣玲瓏として起る、峰頂の浮圖六七層、月冷かに風高し箇の時節、衣は傳ふ半夜坐禪の僧。

①浮圖。塔なり。
②衣は半夜に傳ふ。六祖慧能禪師、五祖より衣鉢を傳へらるる時を引き來る。

國譯永平道元禪師語錄終

後序

時に延文戊戌、菩薩戒を受けし弟子、實慶の大檀越野州の太守藤原朝臣知冬、願を發し縁を助く。集むる所の鴻福は上四思に報じ、下三有を資けんものなり。

住持永平兼實慶比丘曇希立版

大海汪洋、渺として、涯涘無し。一滴を嘗むれば則ち百川の異流此の滴中に具る。義尹禪人乃師の志を忘れず、其の廣録を持して、較正を爲さんことを需む。百千の十一を得たり。其の權實照用、敲唱、激揚此の録中に具れり。猶ほ海の一滴のごときのみ。枝葉を脱略して

國譯永平道元禪師語錄 後序

①菩薩戒。菩薩の行を修する人の一般に受持すべき戒律。梵網經に説く處の十重禁戒、四十八輕戒をいふ。
②實慶。越前國大野郡の實慶寺をいふ。
③大檀越。檀越は梵語の音譯にして意譯して施主、即ち布施を行ふ人にして、寺院を建立し及び寺院に對して物質上の外護を與ふる人也。
④四思。三寶の思、國王の思、父母の思、檀越の思の四なり。

⑤渺。渺の略、渺茫と續く宇にて、廣く遠くして、かぎりなき貌。
⑥權實照用。圓悟錄に「其の權や須彌を芥子に納れ、大地を方外に抛つ。其の實や上は是れ天、下は是れ地、山は是れ山、水は是れ水、僧は是れ僧、俗は是れ俗、其の照や塵として沙界に周くして餘すことなく、其の用や喝は雷奔に似、棒は雨點の如し」と。
⑦激揚。猶ほ擧揚の如し。
⑧脱略。猶ほ脱略のごとし。
⑨書雲。冬至のこと、冬至の日、觀臺に登り、雲物を書して備を爲すといふこと左傳にあ

孤危を立せず、自ら一家を成す。趙州のいはゆる諸方は見難くして識り易し、我が這裡は見易くして識り難きもの。予れ此の老に於ても亦云ふ。

書雲の日義遠題す

巨海風生すれば、千波萬浪、變態窮りなし。

今日日本の元禪師の語を観るに、亦猶ほ是のごとし。若し是れ水脈を諸んするに慣はゞ、便ち淺深波水異ならざるを見ん。豈に風恬に浪靜なるを待つて、其の間に棹を舞し帆を揚げんや。倘し或は未だ然らずんば、卻つて請ふ頭より探過せんことを。

大宋乙丑 咸淳 改元 清明後の一日

靈隱退耕德事

①咸淳。宋の度宗帝の年號、本邦龜山帝の文永二年に當る。
②改元。年號を改めたるその年をいふ。
③清明。冬至の日より一百六日をいふ。
④靈隱。杭州臨安府の靈隱寺、武林山に在り、晉の咸和年中の創建に係り、規模宏壯、支那著名の靈刹なり、退耕原寧は徑山無準純の法嗣なり。
⑤尹上人。寒巖義尹禪師のこと。

⑥結構。結構、構造等と同意にて全體の組織をいふ。
⑦發語。發言、發表の意。
⑧鏗鏘。金玉の聲。

⑨昂結。昂は高なり、結は纏と同字にて、木のきりかぶ、高嶺といふほどの意。
⑩趙師の作。師に超え勝りたる作用といふこと。
⑪魯變。論語に「齊一變せば魯に至らん、魯一變せば道に至らん」とあり、變化して進むことをいふ。
⑫京國淨慈。京國は京師の義なり、淨慈は、杭州府の錢塘縣に在る名刹なり。
⑬虛堂智愚。明州象縣陳氏の子、諱は智愚、號は虛堂、退耕は表德號なり、法を運養に嗣ぎ、嘉禾の興聖に出世し、累りに十刹に歴住せり。

④尹上人、日本の元和尙の永平集を持し來つて觀せしむ。其の結構深遠にして語言に墮せず、自ら謂らく、天童淨和尙、不傳の旨を得たりと。況んや此の老平時 發越皆鏗鏘として、昂枿規矩の外に絶出す。此れを以て之を見れば、元老は則ち 趙師の作あり、斯の録を攬ん者、從つて魯變せん。

大宋咸淳、改元淳三日

奉 勅任持 京國淨慈 虛堂智愚書す

永平道元禪師語錄序

非超宗異目，慥暴生瘳，峭壁乖崖，孤危嶮絕，何足以起衲僧眩之疾，拔邪見枝蔓之根，在古不乏，居今爲誰。太白老人淨禪師，奮然一出，獨振此風，諸方憚之，學者畏之。日本元公禪師，截海南來，直入其室，向心塵脫略處，喪盡生涯，歸坐故山，盡情訐露，其徒義尹，採撫狐涎，欲爲序引，則爲之曰：汝師橫說豎說，未曾動着舌頭，莫錯認驢鞍橋作阿爺下領。

景定甲子十一月旦

無外義遠書

永平道元禪師語錄

初住本京宇治縣興聖禪寺語錄

侍者 詮 慧 編

師於嘉祿二年丙申十月十五日就當山開堂拈香祝 聖罷。

上堂山僧歷叢林不多只是等閒見天童先師當下認得眼橫鼻直不被人瞞便乃空手還鄉所以一毫無佛法任運且延時朝朝日東出夜夜月沈西雲收山骨露雨過四山低畢竟如何良久云三年逢一閏雞向五更啼久立下座（謝詞不錄）

上堂舉南泉問黃檗甚處去檗云擇菜去泉云將甚麼擇檗豎起刀子泉云只解作客不解作主師云南泉黃檗故是作家相見若是與聖別有商量當黃檗豎起刀子時代南泉向他道我王庫內無如是刀參

上堂示衆云奉告兄弟若於堂內廊下谿邊樹下相見處互相合掌低頭如法問訊永爲恒規只如佛祖相見豈無禮儀佛在世日或燒香散香或雨花獻寶慰問四大咨詢度生永嘉到曹谿時振錫而立皆是佛祖相見儀式切切遵守庶幾不昧祖宗記得僧問睦州一言道盡時如何州云老僧在個鉢裏裏又僧問雲門一言道盡時如何門云裂破古今有人問山僧一言道盡時如何擲下拂子衆皆舉頭師云可惜許一柄拂子

上堂云：身心脫落，聲色俱非，箇中無悟，何處著迷。座中誰是江南客，聽取鷓鴣聲外詞。
上堂：忽聞佛法二字，早是污我耳目。諸人未到法堂，已喫三十棒了也。雖然如是，山僧今日也是爲衆竭力，喝一喝，下座。

上堂：諸人要識祖師麼？掀翻海嶽求知己，要識二祖麼？撥亂乾坤建太平。隻履不知何處去，宗風千古播嘉聲。

上堂：釋迦老子道，明星現時，我與大地衆生同時成道。且道：作麼生是所成底道？若人會得，釋迦老子無處著慚愧，爲甚如此？速道，速道。

上堂：直道本來無一物，誰知遍界不曾藏。下座。

開爐上堂，與聖爐開張，佛祖跳之不出，有問箇中意旨，今朝十月初一。

上堂：舉東印土國王，請般若多羅尊者齋次，王乃問：諸人盡轉經，尊者爲甚麼不轉？尊者曰：貧道出息不墮衆緣，入息不居陰界，常轉如是經，百千萬億卷，師舉了云：更說道理看。

上堂：但見青山常運步，誰知白石夜生兒。下座。

上堂：舉昔日迦葉尊者踏泥時，有沙彌問尊者何得自爲尊者？云：我若不爲誰爲？我爲師云：心如臘月扇，身如寒谷雲，若見得我爲，便見得誰爲？二塗俱不涉，鐵壁峭危危。

上堂：與聖久不爲衆說話，佛殿僧堂，溪聲樹影，總爲諸人說了也。諸人聞得也未？若道聞得，說箇什麼？若道不聞，辜負自己。

上堂：有人道得一句，法界量滅，未免春夢說吉凶。更若道得一句，破塵出經，也是紅粉飾佳人。

直下照了，非夢之真覺，便見法界未爲大，微塵不爲小，兩既不實，一句何憑。井底蝦蟇吞卻月，天邊玉兔自眠雲。

上堂：拈提耍妙，露柱皺眉，出格玄談，烏龜向火，平實無事，褒貶古今，豈能自救，焉敢救佗。諸人離此作麼商量？莫是三年迷悶，九月重陽麼？莫是大盡三十日，小盡二十九麼？如新見解，喚作驢前馬後漢，與聖敢道，直饒恁麼，也是驢前馬後漢。

上堂：僧問：如何是古佛心？答云：鶯啼處處同。問：如何是本來人？答云：眼皮盡眼漢。師乃云：有問有答，屎尿狼藉，無問無答，雷震霹靂，十方大地平沈，一切虛空迸裂，外不放入，內不放出，一掃而下，萬事了畢，依前鼻孔大頭垂，一對眼睛烏律律。

上堂：如今雲水兄弟，還有得底人麼？時有僧出禮拜，師云：有自有，只是未在。僧問：得箇甚麼？師云：不信道。師乃云：要識得底人麼？心不負人，面無慚色。

上堂：赤心片片誰知得，笑殺黃梅路上兒。

上堂：進一步，未免犯他國王水草，退一步，未免踏著祖父田園，不進不退，還有出身之路也。無良久云：權掛垢衣，是佛，卻裝珍御，復爲誰。

爲僧海首座。上堂：海臨終有頌云：二十七年古債未轉，踏繡虛空，投獄如箭，師舉了云：夜來僧海枯，雲水鼓鳴呼，徹底汝方見，還忌見刺無刺，胸一拂猶未嘗，一死而今方再蘇。

上堂：人人盡有衝天志，莫向如來行處行。下座。

上堂：一句也，冰消瓦解，一句也，塞壑填溝，且道：三世諸佛六代祖師，向那箇一句中爲人，與聖。

這裏有諸佛未曾說祖師未曾舉底一句，舉似諸人，良久云了。

興聖寺上堂終

開闢次住越州吉祥山永平寺語錄

侍者 懷 奘 編

師於寬元二年甲辰七月十八日，從于當山。

上堂云：獨存無倚，脫落全真，混然明歷，歷於高象之中，卓爾活潑，鑿於不疑之地，如月印水而無痕，似風行空而不動，恁麼委悉得去，隨卷不騎，金色馬廻途，卻著破欄衫。

上堂，人人握夜光之珠，箇箇抱荆山之玉，若不同光返照，甘爲懷寶迷邦，不見道，應耳時如空谷大小音聲，無不足應，眠時如千日萬像，不能逃影質，若非聲色外邊求，達磨西來也大屈。上堂云：先來慈明圓和尚會中，有大叢林小叢林之說，且道：甚麼作大叢林，喚甚麼小叢林，若以衆之寡多，院之大小，爲叢林之量，則成戲論，縱使衆多，而無抱道之人，則是爲小叢林，縱院小，而有抱道之人，是爲大叢林也，猶不以民繁土廣爲大國，而以有君聖臣賢爲大國也。汾陽昭禪師會中，止七八衆，趙州不滿二十衆，藥山僅有十衆，然例作晚參，故永平今茲入院，晚參行古規也，或五百七百，以至千僧，不忝爲大叢林，號大叢林，既無抱道之人，具主席者，敢撰藥山趙州汾陽諸老耶，所以近代無晚參，亦絕講先住天童時，千載一遇也，雖當澆運，執則尤嚴，或半夜，或晚間，或齋罷，總不拘時節，要入室普說，乃希代之勝躅也，今永平既稱其嗣子，所以不廢晚參，我朝之最初也，記得丹霞和尚舉，德山示衆云：我宗無語句，亦無一法與人，德山恁

麼道只是入草求人，不覺通身泥水。子細觀來，只具一隻眼。若是丹霞，卽不然。我宗有語句，金刀剪不開，玄玄深妙旨。玉女夜懷胎，師云：丹霞恁麼道，得眼睛照破，慕直德山。然雖如是，永平卽不然。我宗無語句，心與口相乖，拈出爲人處，驢胎與馬胎。

結夏上堂，以拂子作圓相云：結制安居，超越這箇，又作一圓相云：九旬禁足，究明這箇，所以道：威音王佛，稟這箇而假名爲佛，歷代祖師，憑這箇而號令人天，處處安居，時時禁足，雖然恁麼，莫將這箇爲極則，莫將這箇爲向上，掃除極則，踏翻向上，永平只此是安居，堪與叢林爲榜樣。上堂，記得僧問趙州：未有世界，早有此性，世界壞時，此性不壞，作麼生是不壞性？趙州云：四大五蘊，僧云：此猶是壞底，作麼生是不壞性？趙州云：四大五蘊，師云：趙州古佛，只知把定，不能放行，永平敢道：水長船高，泥多佛大。

上堂，大鈞運載化機，絲毫不動，石頭全提心印，文彩已彰，到這田地，佛眼覷不及，迷悟莫能該，瞿曇鼻孔，是山僧眼睛，山僧眼睛，是瞿曇鼻孔，所以隔山見煙，便知是火，隔牆見角，定知是牛。舉拂子云：只這箇一毫不隔，諸人畢竟喚作甚麼？天曉報來，山鳥語，陽春消息，早梅香。

涅槃會上堂，黃面瞿曇入涅槃，法幢摧折，法河乾，十成一會，靈山在，徒頓娑羅雙樹寒，下座。明庵千光禪師前，權僧正法印大和尚忌辰，上堂，舉師翁問虛庵和尚：學人，不思善，不思惡，時如何？虛庵云：本命元辰，師翁云：恁麼則不從今日去也？虛庵云：若恁麼則不妨今日去也？師翁禮拜，虛庵云：面南看北斗，師良久云：祖師本命元辰，微笑破顏一新，不假黃花翠竹，扶桑日出，逢春。

上堂，入海筭沙，空自費力，磨磚作鏡，枉用工夫，君不見，高高山，上雲自卷，自舒，滔滔澗下，水隨曲隨直，衆生日用如雲水，雲水自由，人不爾，若得爾，三界輪迴，何處起。

上堂，舉陳睦州有僧來參，州云：汝豈不是行腳僧？僧云：是。州云：禮佛也未？僧云：禮那土壤，作麼？州云：自領出去，師云：陳尊宿，放去太奢，收來太儉，雖則逢人露膽，合水和泥，何不與他本分草料？山僧敢道：這僧恁麼去，也是杓下聽虛聲。

上堂，坐斷是非，超越離微，佛祖之陶冶，修證之範圍，觸體也，眉底之活眼，空劫也，句中之玄機，青原之赭色，麒麟開步，藥嶠之金毛，師子全威，相逢還把手，大道本同歸。

解夏上堂，四月十五日，握手爲拳，七月十五日，開拳作掌，中間一句子，超越兩頭邊，作麼生是超越底一句子，眼皮纒綻，鼻孔遶天。

八月一日，上堂，舉趙州因僧問道：人相見時如何？州云：呈漆器，師云：趙州古佛，雖有逸群之作，且無平展之機，或有人問：山僧道人相見時如何？祇向他道，八月仲秋，何處熱。

上堂，永平有時，入理深談，只要諸人田地穩密，有時門庭施設，只要諸人神通遊戲，有時奔逸絕塵，只要諸人身心脫落，有時入自受用，三昧，只要諸人信手拈得，忽有人出來，道：向上事作麼生，但向道：曉風摩洗，香烟淨，隱隱青山，展畫圖。

上堂，拈拄杖云：橫拈倒用，撥開諸佛眼睛，暗去明來，敲落祖師鼻孔，當恁麼時，目連鷲子，飲氣吞聲，臨濟德山，呵呵大笑，且道：笑箇什麼？靠拄杖云：等閒斜靠壁，依舊黑黢黢。

上堂，舉僧問趙州：狗子還有佛性也無？州云：無。僧云：一切衆生，皆有佛性，狗子爲什麼無？州云：

爲伊有業識在師云趙州恁麼爲人固是親切山僧不然有問狗子佛性有無向他道有無俱是誇更問如何和聲便棒

上堂外不放入內不放出劈面一揮大事了畢不用如何與若何摩訶般若波羅蜜比丘尼懷義爲先妣請上堂云生也無所從來猶如著衫死也無所去處猶如脫袴萬法本空一歸何處到頭生死不相干罪福皆空無所住

上堂恰恰無稜縫明明不覆藏鶻嶺謾傳迦葉少林豈授神光現成處處合頭語具足人人知見香虛空演說森羅聽不掛唇皮解舉揚汝等諸人十二時中滿眼滿耳超古超今誰自誰他何迷何悟還體悉得麼良久云舉起鎮州蘿蔔何似廬陵米價

謝新舊維那知客上堂云頂門具眼所以照徹於十方直指無私所以不蔽於一曲打開摩竭關棧拈卻少林玄機接客而漏泄天機舉棧處佛祖乞命不是神通妙用亦非法爾如然且據箇什麼道理良久云從來標致雖清拙大丈夫兒合自由

上堂舉五臺山頂雲蒸飯佛殿塔前狗尿天利竿頭上煎飽子三箇糊孫夜簸錢師云若向這裡領覽得驪龍到處與雲雨其或未然且待池開臘月蓮參

上堂有利無利不離行市王老師賣身卽且置廬陵米作麼生酬價若無人酬價山僧自買自賣去也藉拈拄杖卓一下下座

中秋上堂雲開胡餅掛天邊喚作中秋夜月圓睡覺起來無覓處擡頭忽地見青天
上堂舉昔日大義禪師問鷺湖和尚欲界無禪何修禪定鷺湖云汝只知欲界無禪不知禪界

無欲大義無對師拈云七顛八倒拈來用無欲無禪兩不真識取妄真同一妄夜深方見把針人

上堂永平有箇單傳句雪裏梅花綻一枝中下多聞多不信上乘菩薩信無疑

上堂舉僧問京兆華嚴休靜禪師大悟底人卻迷時如何休靜云破鏡不重照落花難上枝師云永平今日入華嚴之境界廓華嚴之邊際事不獲已鼓兩片皮或有人問大悟底人卻迷時如何只向伊道大海若知足百川應倒流

源亞相忌上堂報父母恩乃世尊之勝躅且道知恩報恩底句作麼生道棄恩直入無爲鄉果熟霜林慧日光要問魂靈在何許九蓮臺上恰成雙舉藥山坐次有僧問兀兀地思量什麼山云思量箇不思量底僧云不思量底如何思量山云非思量永平今日頌出這則因緣爲二親莊嚴報地非思量處絕思量切忌將玄喚作黃剗地識情俱裂斷錢湯爐炭亦清涼

上堂無心是佛之語起自西天卽心是佛之談始於東土若恁麼會天地懸隔不恁麼會只是常流畢竟如何三春果滿菩提樹一夜花開世界香

上堂拈僧拄杖黑如漆不與世間凡木儔打破從前山鬼窟嶺梅忽綻上枝頭

上堂舉僧問趙州如何是祖師西來意州云庭前柏樹子僧云和尚莫以境示人州云吾不以境示人僧云如何是祖師西來意州云庭前柏樹子師云南無趙州古佛拈出西來宗旨西來意若何庭前柏樹子不將境示人只憑庭前柏樹敢問諸禪德若爲明此理拍膝一下云莫將江南橋喚作江北棋

上堂召大衆云非但曹溪西天亦無會佛法人或有箇漢出來道和尚恁麼道取笑露柱燈籠只向他道這箇是長連牀上學得底向上事作麼生良久云將謂胡鬚能樣赤元來更有赤鬚胡

上堂教中道一切賢聖皆以無爲法而有差別諸人喚什麼作差別指那箇作無爲法向他道差別底是恁麼會得作箇無事務僧其或不然長連牀上有粥有飯

臘八上堂瞿曇老賊入魔魅惱亂人天沒了時打失眠睛無處覓梅花新發舊年枝

上堂出西天入東土雲從龍風從虎一任諸方點頭舉拂子云只如順行三千逆行八百作麼生會若會得穿過七佛鼻孔傑破諸人眼睛若也不會唯有衲僧無底鉢依前盛飯又盛羹

上堂吞盡三世諸佛借人鼻孔出氣迦葉當時破顏至今猶未瞥地參

上堂若將佛法相當人情未免眉鬚墮落破除佛法向上提持入地獄如箭射要見永平爲人處麼但得雪消去自然春到來

上堂佛佛授手祖祖相傳相傳箇什麼授手箇什麼大衆要知落處麼三世諸佛六代祖師當

苦破草鞋破木杓若也擬議永平在個腳底

上堂山僧有箇方便明明爲汝親傳靠箇蒲團禪版灼然綻火中蓮

上堂世尊道一人發真歸源十方虛空悉皆銷殞五祖演和尚道一人發真歸源十方虛空築

著磕著夾山圓悟禪師道一人發真歸源十方虛空錦上添花佛性泰和尚道一人發真歸源

十方虛空只是十方虛空天童先師云一人發真歸源十方虛空悉皆銷殞既是世尊所說未

免作奇特商量天童卽不然一人發真歸源乞兒打破飯碗師云五尊宿恁麼永平不恁麼一

人發真歸源十方虛空發真歸源

天童和尚忌上堂云入唐學步失却那鼻直眼橫無兩般莫謂天童瞞學者天童曾被永平瞞

上堂天下太平鉢盂處處喫飯萬姓安樂露柱時時開花所以迦葉微笑破顏慧可禮拜得髓

直饒到這田地更參三十年所以道不登太山不知天之高不涉滄溟不知海之濶若是箇漢

納天地於一粒粟中置大海於一毫頭上華嚴界常寂光盡在眉毛眼睫之上且道這人在什

麼處安身立命拍膝一下云山川磨破草鞋底到了方知被眼瞞

上堂舉僧問投子如何是一大事因緣投子云尹司空請老僧開堂師云若是永平則不然有

問如何是一大事因緣只對他道早朝喫粥齋時飯健卽經行困卽眠

開爐上堂掘地覓天日而月而接波求火徹底通紅掀翻臨濟赤肉團勘破雪峰古鏡澗燒丹

霞木佛煨陝府鐵牛管取寒灰再煨卻歸暖處商量

上堂僧問古德深山巖崖還有佛法也無德云石頭大底大小底小先師道深山巖崖問石頭

大小答崖崩石迸裂虛空闍聒聒師云二尊宿雖恁麼道永平更費一路忽有人問深山巖崖

還有佛法也無向他道虛空消殞頑石點頭雖然猶是佛法邊事畢竟如何擲下拂子下座

元日上堂見色明心釋迦老子翻筋斗聞聲悟道達磨祖師擊鉢盂十五日已前靈山話月十

五日已後錦上鋪花這箇則且置只如精金不百鍊爭見光輝至寶不酬價爭辨真假當恁麼

時作麼生良久云孟春猶寒伏惟大衆尊候起居萬福

上元上堂，雪覆蘆花不染塵，風光占斷屬當人。寒梅一點芳心綻，喚動劫壺空處春。
上堂，舉，賓頭盧尊者赴阿育王大會，王行香次，作禮問云：承聞尊者親見佛來，是否？尊者以手撥開眉毛曰：會麼？王曰：不會。尊者曰：阿耨達池龍王請佛齋時，貧道亦預其數。永平今日聊伸一頌，親曾見佛撥眉毛。王庫本無如是刀，阿耨達池王請佛，更將水月再三撈。
上堂，舉，僧問：百丈如何是奇特事？百丈云：獨坐大雄峰。今日或有人問：永平如何是奇特事？只向他道：今日鳴鼓陞堂。

浴佛上堂，不從兜率陀天降，豈假摩耶作聖胎。突出恒沙功德聚，優曇火裏一枝開。還知釋迦老子敗缺處，麼家私都喪盡，賣弄小嬰孩。

上堂，稱僧端的要參禪，參到無參是正傳。只箇正傳亦不著，大家齊賀普通年。

解夏上堂，要見法歲周圓麼？打一圓相云：這裏會取，又打圓相云：這裏參得，如來禪則許爾會。要見祖師禪，直是十萬八千，且道：永平意在甚處？但見日頭東畔上，誰知夏末與秋初。

上堂，舉，僧問：巖頭古帆未掛時如何？巖頭云：小魚吞大魚。師云：要會這則因緣，聽取永平一頌。小魚吞大魚，和尚讀儒書，透出佛魔網，法塵也掃除。

上堂，時節因緣佛性，刹那前後圓成，但自長時退步，乳中之酪分明。

永平寺上堂終

小參

結夏小參，舉，慈航和尚住四明天童，結夏小參云：參禪人第一鼻孔端正，其次須眼目精明，又其次貴宗說俱通，然後機用齊到，始能入佛入魔，自他兼到，何也？鼻孔正則一切皆正，如人居家，家主正，其下自化，且如何得鼻孔端正去？古聖道決定不流，至第二念就中方入。我宗門豈不是向父母未生已前，爲爾作箇標準了也？師云：古人雖道決定不流，至第二念敢問諸人：指那箇爲第一念？永平今夜不惜口業，向諸人道：九十剋期，明日始莫於繩墨外邊行，蒲團倚坐無他事，終日寥寥賀太平。

解夏小參，打一圓相云：箇是沒量大事，三世諸佛了此，歷代祖師悟此，參學道人參此，若於日用薦得，親超過佛祖一頭地，豈不見趙州問大慈，般若以何爲體？大慈曰：般若以何爲體？趙州呵呵大笑，來日趙州掃地次，大慈問：般若以何爲體？趙州放下掃帚，呵呵大笑，大衆大慈。趙州兩員古佛，一期相見，不妨奇絕。今日解制斯臨，作麼生商量？昨日和羅飯，今朝粥一盂，且道：古人是同是別？良久云：大慈若也重垂問，添得趙州笑轉新，久立衆慈，伏惟珍重。

冬夜小參，大功熟處，一陽卽生，萬法歸源，方見尊貴，所以道：盡十方世界，是爾一隻眼，盡十方世界，是爾自己，盡十方世界，是爾光明，盡十方世界，是箇解脫門，什麼處不是爾成佛處？什麼處不是爾說法度人處？不見道：護明不從兜率降，一輪圓滿十方周。

除夜小參云：小參乃佛祖之家訓也。我國前代未聞舉行，永平始傳之。經二十年矣。祖師西來，法入震旦，而前代祖師謂之家訓，非佛祖之行履，不履，非佛祖之法服，不服，拋卻名利，捨去人我，隱居山谷，不離叢林，尺璧寸陰，不顧萬事，純一辨道，此乃佛祖之家訓。人天眼目，然爲善知識，則非僧祇大劫修來，不能爲也。大衆欲見僧祇劫塵，彈指一下云：只這便是。喚作本有得麼？喚作修來得麼？這裏見得，便是時移歲換，臘盡春回，坐斷十方，冥通三際，舊歲實不去，新年實不來，來去不交參，新舊絕對待，所以僧問石門：年窮歲盡時如何？石門云：東村王老，夜燒錢，僧問開先：年窮歲盡時如何？開先云：依舊孟春猶寒。今夜忽有箇僧問：永平年窮歲盡時如何？祇向他道：前村深雪裏，昨夜一枝開，天寒久立。

法語

示禪人

近世學道之人，龍蛇不辨，菽麥不分，然欲究明，亦良難矣。古者道大地雪漫漫，春來依舊寒，到頭成佛易，卻是說禪難。此病佛祖猶未脫，如何未脫，謂成佛易，說禪難，說禪易，成佛難，怎麼見解作麼生，脫得佛法難，易底情見耶？豈不見僧問雲門：樹凋葉落時如何？門云：體露金風，佛照禪師拈云：大小雲門，將常住物作自己人情，雖然，也是無病之藥。釋迦老子一期出世，爲大醫

王，爲惑衆生深沈苦海，於是興慈悲，以種種方便，演出一大藏教，皆是應病與藥，令一切有情得到大安樂之地。底方子，及至達磨西來，子子孫孫，皆用砒霜狼毒，要使病者絕後再甦，如海上單方，雖多神驗，正眼看來，總是好肉剜瘡。若是本色手段，又且不然，不執方書，不在診候，目機鉢兩應，變臨時，任是佛病祖病，不消輕輕一捏，盡使換骨洗腸，神清氣爽，所謂一丸消衆病，不假藥方多，老漢通身是病，正覓起處，不得，普燈都正，既有如此作略，試令著眼看，若覓得透，則扁鵲盧醫並立下風也。

諸佛大道，深妙不可思議，修行者豈容易耶？不見古人捨身命，棄國城妻子，視之如瓦礫相似，然後經歷劫數，獨棲山林，身心如枯木，方始與道相應，既與道合，便能借山川爲言語，拈風雨爲舌頭，說破太虛，轉無等輪，何用不能，何法不可，志於道者，可遊這風範。昔日有僧問法眼禪師：如何是古佛法眼云：卽今也無嫌疑，僧又問：十二時中如何行履，法眼云：步步踏著，夫出家人，但隨時及節，便得寒卽寒，熱卽熱，欲知佛性義，當觀時節因緣，但守分隨時密究，此意如何，是隨時是守分，但於色上莫作非色解，亦莫作色解，亦不走兩頭，卽忘嫌疑，與他古佛同住同行，猶鏡相照，所以釋迦老子道沙門入聚落，猶如蜂採花，但取其味，不壞其色，何不順這時節，十二時中逢緣遇境，但取其味，莫壞其色，向備道，稟他萬緣印，被他萬法證，須是不壞色香之時節也。離此若有，則萬象爲汝證明，山僧事不得已道，了然道者志道之切，餘輩未可齊肩，是以於一毫端，聊爲點出，以資參究，勉之勉之。